

529  
A

5 6 7 8 9 270 1 2 3 4 5 6 7 8 9 28

始





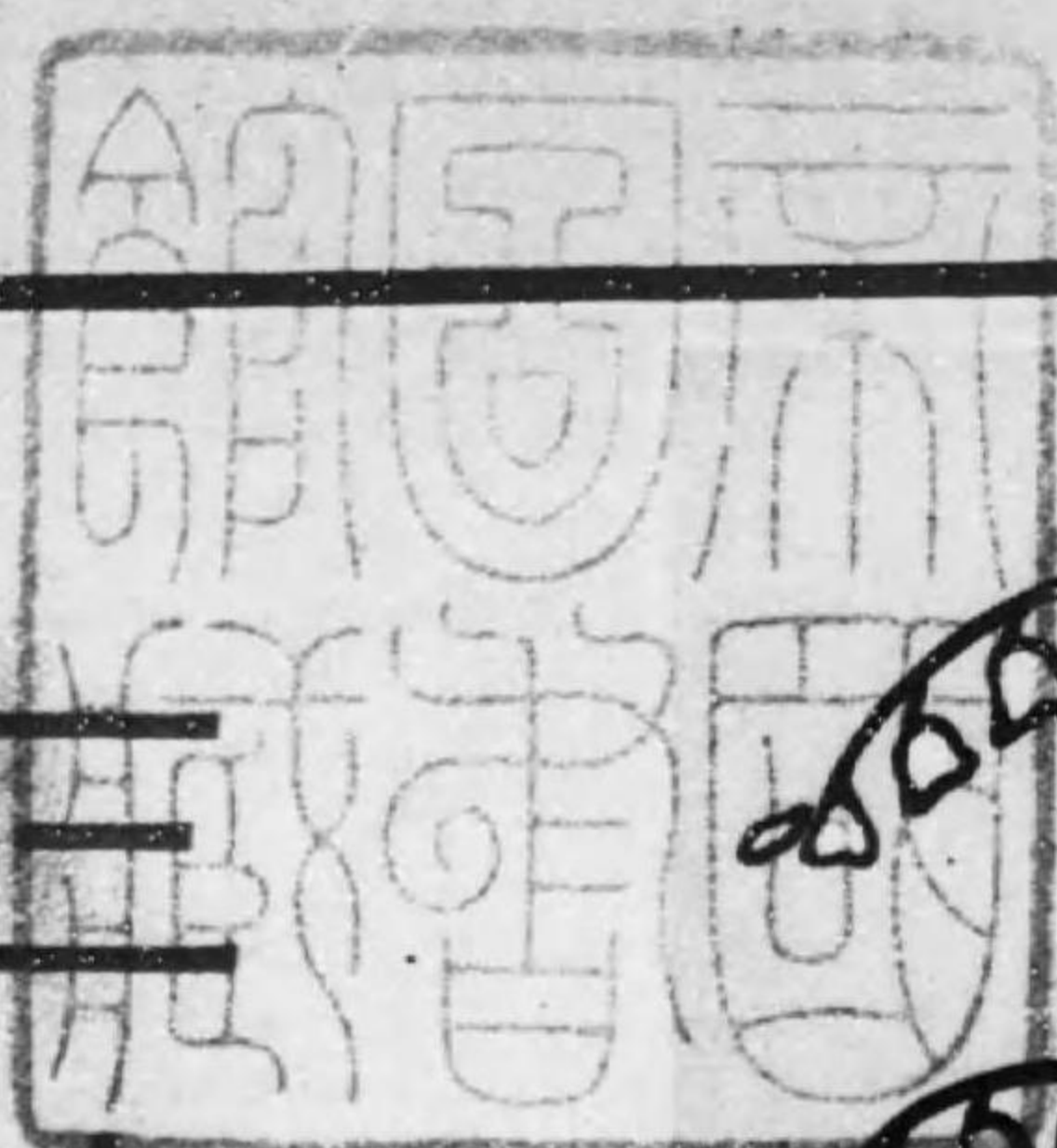
6. 8.3



三家庭

小櫃友貞一治  
田中友貞一治  
共譯

大正  
13. 6. 30  
内交





## 序に代へて

今年の三月、櫻の蕾の膨らみが目立つて来た頃、小櫃、田中の兩君がやつて来て、『三家庭』を譯して見ましたと云ふ。私は眼の前に積まれた山なす原稿を見て、先づ兩君の根氣のよいのに驚かすにゐられませんでした。この書の原作は、私の豫て愛好してゐる書物ですから、兩君から乞はるゝまゝに、原作や原作者に就いて一言を述べて序に代へたいと思ひます。

原作が初めて世に出た時は、作者の名は變名が用ひてあつて、誰の作だか薩張り分りませんでした。が、學生や家庭の間に非常な好評を博して、その賣行は二十餘年を過ぎても、一向に衰へませんでした。初版が出てから二十三年目に、初めて原作者の名前が公表されたのですから、作者の名聲を離れて、書物自身にどの位讀者を引付ける力があつたかゞ分るではありませんか。



原作が初めて出たのは一八七三年ですが、その三年前の一八七〇年は、英國の教育史上記念すべき年で、同國の初等教育が初めて國家の手に移つた年であります。これは固より一朝一夕に出来た事ではなく、その初め英國の識者が、大陸の教育の情況に刺撃されて以來十二三年に亙つて目覺ましい活動を續けた結果であつて、先づ一八五八年にニューカッスル・コンミッションといふ教育調査委員が設けられたのを手始めに、各方面の調査委員が相尋いで設けられ、それぞれ報告を發表して改善の意見を提供し、殊に英吉利に於ける第一流の詩人であり批評家であつたマシユ・アーノルドが、一八五一年から三十五箇年間視學官の職にあつて、前後二回大陸の教育視察に派遣せられ、終始一貫教育改善の必要や方法を力説したことは、朝野の視聽を教育へ集中させる上に非常な効果がありました。この期間は、いはゞ英國教育の維新期とも革命期ともいふべく、本書の原作者アラも、三十代の新進氣鋭の宗教家はた教育家として、口に筆に教育改善の爲めに貢獻を圖り、正面より制度方法等の論議を立てると共に、

裏面より「エリック」、「セント・ウインフレツツ」或は本書の原作の如き教育小説を著はして、學生の情操教育や家庭の躰方に裨益したのであります。

さて著者フレデリック・ウィリアム・アラは、一八三一年印度ボムベイの牧師の家に生れ、幼年の頃英本國に移住して、カッスルタウンのキング・ウィリアム・カレツジで普通教育を受けましたが、この學校に於ける經驗が、この人の教育小説「エリック」の中に描かれてゐます。十六の年に倫敦大學に入學し、在學中特に詩人コールリツジの作品に傾倒したといふ話が残つてゐます。その後ケムブリツジへ入つて神學を修めたが、兩大學共に優秀の成績で卒業しました。一八五四年に僧職に任ぜられ、一八七一年から七六年までマールボロ・カレツジの校長となり、後ケムブリツジ大學の説教師となり、女皇附の僧官となり、デイン・オヴ・キアンタベリとなり、一九〇三年他界の人となるに至るまで、彼は十九世紀の後半を通じて、英吉利の宗教界、教育界に重きをなした博洽の學者であつて、宗教、教育、語學の三方面に亙つて夥しき著述が



あります。「基督傳」、「聖パウロ傳」、「基督教の初期」、「エリック」(學生小説)、「セント・ウインフレツヅ(學生小説)など、いづれも廣く讀まれた書物であります。

本書原作の題名は、「三家庭」世の父親息子たちに薦むる物語」といふのであつて、作者が本書を著した趣意は、この題名に表はれてゐます。當時マールボロの校長として、恐らくは自分の預つてゐる子弟やその家庭の中に、作者を動かして筆を執らずに居られぬ思ひをさせた材料があつたと思ひます。さもなければ、作者は當時あの傑作「基督傳」の起稿中で、その方に追はれてゐましたから、恐らく本書の著作を思ひ立たなかつたでせう。本書の原作の初版が出てから丁度五十年、時勢も變り、英吉利と我國とは國情も異なれど、作中諸處純真なる人情の機微に觸るゝところ、今日と雖も讀む人の心を淨化洗練する力が十分にあつて、少年の情操教育や家庭教育に有效な讀物だらうと思ひます。

大正十二年八月

篠田錦策

## 序

この書の原作「スリー・ホームズ」は、さすがに宗教家としても教育家としても一世に鳴つたフラー博士の作だけあつて、世に出てからもうかなりな年月になるのに、英國で相變らず學生小説の隨一に推され、我國でも久しい以前から教科書用の抄本なども出來て、高等學校や専門學校で年々用ひられ、一般にも廣く愛讀されてゐます。私達も初めてこの書の原作に接したのは教室に於いてでしたが、讀みゆくうちに、奇しい程惹きつけられて行くのをどうすることも出來なかつたことを記憶します。三人の少年學生の家庭にまつはる運命が、小説の様だといふには餘りに暗示に富み、餘りに私達の生活に多く觸れてゐるからでせうか。魔の運命の傀儡となつて、誤解、誘惑、自棄、絶望と落ちてゆく痛み傷ついた若い魂を、救ひ上げて神の手にすがらせ、永遠の平和に安住させるまでの涙ぐましい心の戦ひ、そして最後の勝利に輝く母性の



二  
愛と兄弟の愛と、さては美しい友情との記録がこの書なのです。ほんとに私達はこれを読み了るまでに、涙で文字が分らなくなつて當惑したことが度々ありました。さうです、この感激が私達に淺學をも顧みず、この翻譯に志させたといつていいと思ひます。

今更意に満たぬところが多くて残念ですが、どうにか出来上りました。とにかく原著の物語りの美しい條だけは傳へ得たと思ひます。

翻譯中、恩師篠田先生から種々御教示を賜はりました。こゝに末筆ながら、謹んで感謝いたします。

大正十二年八月

譯者

# 三家庭



此處

此處は英國の南方の或る州、心持の好い一本の路の兩傍を縁取る縁の草が、幅廣い帯の様に見える上を、今、三人の少年が歩いてゐる。

彼等は一樣にクリツケットの運動着——麥稈帽、フランネルのジャケットと洋袴、それに青い絹のハンカチフを腰に巻いてゐる。何處かでクリツケットの試合があつた歸りと見えて、現に二人の少年はそれ／＼バットを手にしてゐる。も一人の少年はバットを自分で持たず、横着にも召使の男に持たせてゐる、その召使はお仕着服を着て三人の後から餘り離れないでぶら／＼やつて来る。

いつも三人の人が連立つて歩く時は、その中で最も重だつた人や人氣のある人が中央になるものだが、今二人の少年の間に立つて歩いてゐる少年の運命こそ、此の物語の眼目となるのである。彼は男らしい、正直さうな少年で、濃い鶯色の髪と深い碧色に輝く眼とを有つてゐる。名はラルフ・ダグラス、齡は他の二人と同じく十五位、彼と知り合ひになるものは誰でも彼に惹き付けられる様な感じを持たずにゐられなかつた。單に彼の顔付や態度に、氣の置けない、人を惹きつける様な所があるのみでなく、そんなに若いにも似ず、時々何か恐い事を豫期するかの如く訴へる様な眼をす



る——その沈んだ様子の見える事が、その美しい顔よりも一人の興味をそよるのであつた。

彼の右に居て彼と主に話してゐる少年を、マーテン・アラビイといふ。二人は幼い頃からの友だちで、今まで何度も何度も幸福な時を一緒に過したのである。そして何か機会さへあれば互に探し合つて一緒になるといふ風であつた。然し今は二人は別の學校へ行つてゐるので、休暇中だけしか會ふことが出来ないのであつた。ラルフ・ダグラスは二年も前からラグビー・スクールへ、マーテン・アラビイはそれよりずつと前からイートン・カレッジへ行つてゐるのである。

第三番目の、自分のバットを自分で持つのを面倒がつた少年は二人よりも數ヶ月年少であるのみでなく、どちらかといへば二人よりも華奢な作りで、體に違つた質の少年である。恐らく誰でも此の三人を見たものは彼が其の中でず抜けて様子がいゝと思つたであらう、なぜなら彼の眉目容貌は一番美しく、タイプが貴族的だつたから。然しその容貌には或る冷かな、人の近づき難い所があつて、少年に相應はしいあのしとやかな内氣と遠慮とが無かつた。彼の態度も全くそれに相當してゐて、殆ど生意氣なといふ印象を與へるほど落付き拂つてゐた。彼はこの州の名門のドネリル伯爵の長男で子爵なのでグレナリン卿と呼ばれてゐる。氣の向いた時はこの上もなく氣持よく振舞ふことが出来たが、しかも其處には少しも純な自然な所が無かつた。知らない人に對する時には、自分

が氣に向きさへすれば如何にも世馴れた人らしく手落ちなく禮を盡して應待することが出来た。が、その慇懃さは注意深い人の眼を欺く事の出来ない、表面的な、心の無いものだといふ感じを抱かせたものであつた。若しこの三少年が知らぬ人たちの中に一日を過したとすれば、先づ沈黙を破つて談話を始めるのはグレナリンであつたらう、そして他の二人が話をしないうちにすつかり打ち切つた事であらう。併し、まだ黄昏になるすつと前に、他の二人の方が表面的な觀察をしない人からは多く尊敬され、親しまれるやうになつてゐたであらう。

扱つてこの時、グレナリンは大層いゝ機嫌らしかつた。そして假令第三者として二人の友情の仲間入をしようと望まないまでも、體にその若い同志から好く思はれたといふ風であつた。彼は話しかけた。

『今日は素敵に愉快だつたね、そしてまあ、何て美しい夕暮だらう！おい、ちよつと休まないか、あの木柵へ腰掛けようよ。』

『何うして休みたいんだね君、』とマーテンは笑ひながら『あゝ君はバットが無いもんで疲れたんだね。』

『君がそんな戯談を言ふなんて、』と機嫌よく『僕だつて君だのラルフ君だのゝやうに皆から贈呈



れたバットを有つてゐたら自分で擔いで見せびらかすんだがね。君のは幾度も見たから——ラルフ君、それを見せて呉れ給へ。」

彼はラルフからバットを受取ると木柵へ腰を下して、其の裏に光つてゐる小さな銀板に彫つてある文字を読み始めた。

「んん「ラルフ・ダグラス君へ——」何か頭文字が書いてある、ラグビーの生徒だね君。——舍内試合に五十三點を得た爲に——ねえ、ロードのクリツケット・グラウンドでの試合で、我々のチームの誰か、かういふ點を得るのを見たいなあ！ラルフ君、君は休む資格があるよ、今日もあんなにやつたんだものね。僕なんか二回のマツチに二點と一點さ、疲れたなんて言へた義理ぢあないね。」

「僕のも大同小異さ。三點と十點ではあまり幅が利かないね。僕等のウイツケットがはじめのうちばたく倒れるんだもの、僕はバブリック・スクールの組が負けてあのアルトン・クラブに凱歌を上げられるだらうかと思つたよ。」

「いゝさ、結局味方が勝つたんだから。」

とラルフが言つた。グレナリンが言ふ。

「いや、君の御蔭さ、——あゝ、うちのひらめが僕のバットを持つて來た。」

「君、あの人に何時になるか聞いて呉れ給へ、誰も時計を持ち合せないから。少し晩くなりはいしなにかしら。」

とラルフは問うた。

「何うして？ 晚餐におくれるのを心配してゐるの？ まだ君八時にならないよ。」

「デイナーだつて！いやデイナーには遅れないだらうがね。君のところではそんなに晩くデイナーを食べるのかね。」

「あゝ、何時も八時半になるよ。」

「いや、僕は八時近いんだと困るんだよ。デイナーにもサバーにも間に合はない上に……」

彼は言ひかけて口を噤んだ。この時すでに三人の前を通りすぎた召使をグレナリンは喚んだ。

「おい！今何時だい？」

「八時五分過ぎでございますよ、若様。」

と言ふ彼の聲は猫撫聲で、若主人へベコ〜とお仕儀をさへするのであつた。

「八時五分だつて！」

と繰り返したラルフの言葉の調子には、驚きと深い〜當惑とが表れてゐた。



「そんなに晚いとは思はなかつた。僕は直ぐ行かなければならぬ。さよならマーテン君、さよならグレナリン君！」

それつきり一口もきかずに彼は一飛びに木柵から飛下りると、麥畑を通り抜けて、一散に走つて行つて終つた。

「何故あんなに急ぐんだらう！そしてアラビイ君、君も行かなければならぬのかい？」とグレナリンは笑ひながら言つた。

「もう時間だと思ふよ、ダグラス君のお家はそんなに遠くはないが、と白嘴鳥の巢喰つてゐる木立の間に突立つた破風造りの屋根を指しながら、

「僕は畑を近路して行つたつてあの先まだ四分の一哩はあるからね。それにお腹も空いた、失敬するよ君。」

「さう、どうしても行かなければならぬなら失敬しよう。だが僕は一人ほつちぢあ退屈で堪らぬいな。さうだ、迎への馬車を呼ぶことにしよう。」

「馬車を！たゞ君の家まで歩くのが嫌さにかい？」

とマーテンは軽くやゝ嘲ける様な言ひ方をした。

「あゝ、悪いの？」

とグレナリンはマーテンの言葉にむつとした様であつた。

「おい、クラーク、すぐ家へ行つて、馬車を迎へに來させて呉れ、僕は此處に待つてゐるから。」

「でも、若様、もうお邸まで二十分とかゝりませんよ。私がお迎ひに來ますまでにはお歸りになれますが。」

クラークは少し驚いて言ふのであつた。

少年は悪々しげに、

「誰が貴様に道程を聞いたか、貴様は言はれた事をすればいゝんだ。生意氣な。俺は多分此處に待つてゐるだらう。それから、おい、馬は例の栗毛にするんだつてことを忘れちやいけないよ。」

「承知致しました。どうも相済みません。でも若様……」

「何がでもなんだ！」と癩癩を起して、「早く行け！何をぐづぐづしてゐるんだ。お父様から言はれた通りに、命令に従はない位なら俺の召使として何の役にも立たないぢあないか。」

召使は急ぎ足で去つた。去る時彼の口許に妙な笑が浮んだが、罵られたり、つけ／＼と命ぜられたりするのを好みでもするやうな様子に見えた。然し彼は路の曲り角まで行くか行かぬかに立止つ



て、木柵に腰掛けて此方に背を向けてほんやりしてゐる主人の姿を振り返つて見ると、笑ひ顔を佛頂面に變へた、そして揮拳を一振り振つてかう呟いた。

『本當に生意氣だ！あの犬ころめ——今こそへい／＼してゐるが今に見ろ、こつちで命令して泣かしてやるぞ、グレナリン子爵様だ、ハワード様だ、ドネリル家の一粒種だなんて言ひやがつて、俺だつて今に彼奴位にはなつてやるから見て居ろ！』

併し、木柵に腰掛けて心持よい夏の夕暮の空氣に浸りながら、懶けに踵で木柵をこつ／＼蹴つてゐるグレナリンには幸にこれらの文句は聞えなかつた。また他の二人の少年としても、こんな一見何でもない様な小さな事件が、今後何年も先までの不幸な種々な出来事と、人知れず關係してゐるよとは、氣が付く由もなかつた。そのくせこんな例は人の一生のうちによくあることなのだ。

一一

マーテンの父、サー・ヘンリー・アラビイの住んでゐる大きな近代風の家は高臺の上に立つてゐて、その高臺からは遙か彼方の海がチラと見え、海からは健康によい風が十分に吹いてくるのである。そして小さいが美しい庭園に圍まれてゐて、家のぐるりには廊下を取り巻いてゐて、年々夏の頃になると、いろ／＼な香りのいゝ見事な薔薇などの花で埋るのであつた。また幾つかの窓が灌木だの滑かな芝草だの、庭に面してつけてあつた。

マーテンが歸つた時、家ではダイナーが済む所であつた。彼の姉と弟とが丁度その日訪ねてくれた従弟のデヨージ・ボームントと明日から何をして遊ぶうかと頻に相談してゐる所で、父も母も殆ど子供たち同様に面白がつて話し込んでゐた。

マーテンはデヨージと懐しげに握手しながら言つた。  
『折角来てくれたに僕、家にゐなくて本當に失敬しました。』  
父は少し嚴格に、

『さうだ。停車場まで迎ひに行つて、家へ御案内すると約束して置き乍ら何うしたんだね。一體誰



だつたね、馬車を迎ひに出さうと言つたら、何、話しながら草園の中を近路して歸る方が面白いからなどと言つて止めたのは。』

「お父さん、怒つた風をなさつても駄目ですよ、お父さんにはそれは出来ませんよ。デョージ君、途中は間違は無かつたでせうね。」

「いや、どうも途中を間違へたに違ひないですよ。」

「きつとさうなんですよ。」と弟のハーバートが合槌を打つた。『だつてね兄さん、デョージ君は水車の所から廻つたんですつて——林の中で路に迷つたんですつて、無理はありませんよ。どうかしてあの雉の圍ひ場へ入つて行つて雉と間違ひられたのか密獵者と間違ひられたのか危く番人からズドンとやられる所だつたんですつて。それから、番犬に咬みつかれさうになつたんですつて。』

「チェ、」と言つたマーテンは本當にいま／＼しさうな顔をしたが、従弟に向つて、  
「やあ君、ほんとに済まなかつたねえ。」

マーテンの顔に表はれたその暗い影を見て取つた母が、

「いゝぢやありませんか。デョージさんは許して下さるでせうから。」

「あゝ、たゞ自分で約束に背いたことに對して氣が済めばねえ。」

かう父に言はれて、マーテンが何か答へようとした時、性急なハーバートは横槍を入れた。

「それで、兄さん、試合は何方が勝つたんですか。もうさあつきから噂をしてゐたんですがね。あの、アルトンクラブが勝つたんでせう。僕はそれを希望します。」

「こん畜生、」と弟の耳を引張つて、「まあ三つも四つもの學校の選手の組がアルトンに負けてたまるものか！だが、ほんとをいふと、もう少しでやられる所だつたのさ。」

マーテンが父の先の言葉を氣にかけてゐて、しばらく考を脇へ轉じたいと思つてゐるのを見て取つた母は、

「始めから詳しく話してお呉れ。」

と言つた。

「そしてあなたは何點取つて？」

と姉のアリスが問ふ。

「それからグレナリンさんは？ ダグラスさんは？ 試合はどつちから始めたの？ 誰がボールを投じたの？ 兄さんは幾つキャッチして？」

「ハハハ、何から話したらいいんだな。」



「ほんとの始めから。そしてすつかり。」

とハーバート。

「ちあお客様の前に出られるやうにしてから話さうよ。先づ第一に運動着を着替へなくつちや。ちよつとデョージ君が来たかどうか見に來ただけなんだからね。」

「よござんすよ、マーテン、今だけはその姿でも許して上げませうよ。」と母は制して、

「でも一日中運動してお腹も空いたでせうし、随分疲れたでせう。だから直ぐ其處へ掛けて、ハーバートにベルを鳴らさしてお茶を入れさせませう。デイナーはお済みでせうね。」

「いゝえお母さん、僕はデイナーのために遅れたんぢあ無いんですよ。」

「ぢやあ始めて頂戴兄さん。」

ハーバートはベルを鳴らしに立ち乍らかういふのであつた。マーテンはデョージの傍の卓についてさて試合の様子をすつかり話した。話が終へると、

「よくやつたね！」

と父が褒めてくれた。

「それで何だね、お前に約束を破らしたのはデイナーではなかつたのだね。私はまたそれで晩くな

るのかと思つたよ。それではお腹が空いてゐるだらうに、もうお話は止めにして、遠慮なくお上り。」

「えゝ、でも皆さんはもうお済みでせう、そんなら僕の食べるのを見てゐないで下さい。僕は何か動物園の獅子の様で……。ぢきに済みますからね。そしたら來週デョージ君と何をして遊ぼうか計劃を立てませうよ。」

皆が部屋を出て終ふと、彼は大意で食事を済ました。そして立ち上つて父の所へ行つた。父は臂掛椅子に倚つて本を讀んでゐた。マーテンは傍へ寄つて、

「お父さん、怒つてはいらつしやいませんね？」

「いやあ何も怒る筈は無いさ。たゞお前に言葉をさせたかつたのさ。知つての通り私は時間の事と約については、中々やかましいんだからね。だが若し私が試合を見てゐたら、やつぱり終りまで觀てゐたかつたに違ひないよ。だからお前が晩くなるのも無理はないさ。」

「ほんとにさうだつたんです、お父さん。僕は約束の事を決して忘れなかつたんですが。でもあの場合僕がやめてしまつたら、お父さんだつて残念に思はれたでせう。補缺の選手がゐらないんですからね。試合が臺無しになつちまつて、それこそ味方が困つてしまひますからね。」



「ぢやあ試合が六時まででに終へさへすれば御飯なんぞ待つてないで直ぐに歸つたんだね。」  
「無論ですとも」と少し不平さうな聲で、

「まだ僕今までに約束を破つた事なんか無いでせう！」

「さうとも。それだから私だつてお前の事を本氣になつて怒つたり出来ないんだよ。お前は全くいい子だからね、私はもう信用しきつてるのだ。だからさあ、あちらへ行つて皆の仲間入りをしよう。」

父はかういふとマーテンの肩に手を置いて庭の方へ行くのであつた。恐らく何處を尋ねても、この父親のやうにわが子を誇り、且つ信じ且つ愛して喜びを感じてゐる人は無いだらう。またこのサー・ヘンリー・アラビー氏の様な、父を持つ子も恐らく無からうし、このマーテンの様に愛すべき罪のない子を有つ親も珍しいことである。

三

ドネリル伯爵家は有名な門閥である。伯爵の祖先は、戦争にも平和にも至る所で功名を立て、る。代々、男は伶俐で氣高く、女はみな美しく善良であつた。だから英國の歴史を開いて見ると、それらの人々の名が方々に出てくるのであつた。然し、當主伯爵は、つい近頃まで、その立派な古木から生えたいは、墮落した若木であつた。彼は若い頃、まだこの家を繼ぐ前に散々遊んで、家の名譽を落すために全力を盡したのである。いよく家名を繼いでから始めて、悪かつた、將來の幸福の爲には若い大切な時代をあんなに送るので無かつたと氣付いたのであつたが、その時は既に取返しがつかなかつた。その中でも彼の心に墮落したな、といふ苦々しい感じを抱かせ、特に彼を苦しめた一つの事實がある。それは全く彼の馬鹿々々しい放蕩の擧句——こんな事はこの家あつて始めての事であるが——彼が家の財産の大部分を重い抵當に入れてしまつた事なのである。而もその金のあらまは競馬の博に使つたのだとは驚くではないか。

かうして、彼の住む宏大な家、彼の有つてゐる名望、彼の何處へ行つても受け得る尊敬を何も知らぬ世間が羨んでゐる間に、彼は次第々々にあれほど誇りにしてゐた家名の光りを失つて行くのだ



といふ激しい良心の苛責に苦んで來るのであつた——悪魔エブリスの宮殿の宴に列なるものどもの心を、怒りの焰が焼き盡すやうに。

彼の心を一層深く悲ませたのは子供の事であつた。グレナリンが父がそのために一生を汚した様な危い性質を受け継いでゐる事であつた。そして、その表面に現れる事柄から察し得る範圍では、どうしても少年時代を通じて、荒んだ、驕の悪い、いろんな好くない結果を澤山に生む様な——父親のやうに——生活をするらしく思はれるのであつた。

グレナリンの母は随分美しい、そして稀に見る溫和な性質の女だつたが、彼が四つにしかならぬ時に亡くなつた。

グレナリンは母に似て大層美しかつた。そしてあらゆる人々から、最も仕合せに生れついた人として羨まれた。若くて、美しく、生れがよくて、人の心を奪ふ様な態度と眼から鼻へぬける伶俐さを持ち、その上に高貴な家柄と王侯にも比すべき財産との後嗣であるといふことが、彼の生涯を輝かした。幸福なものであらうと想像させたのは無理もない話であつた。グレナリン自身もさう思つてゐたのである。彼はこの世界が自分の爲に造られたのでは無いかと思つた。一體なら學校では自分の本當の價値を認めることが出來、さういふ自尊心を抜いてもらへたらうに、こゝでも彼の覺り

の速さや、快活な態度や、美しくて氣品の高い顔や、大きな財産の相続人であり名門の出であるといふ事などが、澤山の御機嫌取りを得た結果、彼は己の進む路の素敵に滑かで心地よいのを知つた。高慢と自負を強められたばかりであつた。

生れつきづほらな伯爵は絶えず家を外にしてゐた。子供の訓練などといふ問題には丸で興味を有つてゐなかつた。で、子供はまるつきり召使たちに任せ切りであつて召使たちはまた子供の御機嫌ばかり取るので、子供が威張り散らす癖を出す時には殆ど手に負へない位だつた。なぜこんな我儘が許されたかと言へば、伯爵は我が子に對して一種の愚な誇を感じてゐたからであつて、而もその愚な誇を、子供は自分に對する強い愛情だと佩き違へてゐた。伯爵は決して召使たちが子供に逆らふ事を許さなかつた。だから子供の我儘は日を追うて手が付けられなくなつて行つた。若しも考へのある確りした召使なり家庭教師なりが一人でもついてゐたならグレナリンはまるで別な人間に育つて行つたのであらうに。いや現に厭しい驕をしなければならぬと言張つた思慮ある家庭教師が一人だけあつたのを、伯爵が抑へ付けた事があつてから、誰でもこの若い伯爵の言ひなり放題になつて居るのが一番容易である——實際それより他に方法がない——といふ事を覺つたのである。自然の結果は來た。彼は仕様のない子供に育て上げられた。頑固な、手の付けられない少年とな



つた。イートン・カレッジでは可成に境遇の制御を受けたが、家へ歸ると持前の傾向が存分に發揮された。その旋毛曲りは愛相の盡きる程で、もう父親始め下は一番卑しい雇人まで、一人として休暇が終へて彼が學校へ歸るのを喜ばぬ者はなかつた。

父伯爵はこれに對して、靜かに諭して聞かせるといふ事に決して思ひ及ばなかつた。多分、彼の教訓には模範といふ重みがないので、さうすることを良心が許さなかつたのであらう。かうして、ただ世故に長けたといふにすぎない人の唇を洩れる宗教的な忠告——これのみが最も高い教であるべき宗教的忠告——は、餘りに實意の無い言葉であり、餘りに偽の響であるので、グレナリンの様な世間をよく知つた若者には何の感化をも與へなかつた。それ故、伯爵の親としての干渉は時々猛烈な憤怒となつて彼は峻烈な方法でグレナリンを懲罰するのである。かういふ親子の衝突は彼にしても彼以上に激し易いグレナリンにしても愉快なものではなかつた。グレナリンはさういふ時、いつも全力を盡して強情に反抗した。で伯爵もこの頑殆と持て餘して、グレナリンの勝手に任せて置き、時々たま從前の極端な放任と同じ様に無思慮な過激手段を取つて自分の威嚴を示すだけであつた。

グレナリンが命じて我が馬車につけさせた、父伯爵の大切にしている立派な栗毛の駒は、丁度

伯爵がデイナーを食べる爲に遠乗から歸つた所へ驀地に馬車を立關へ曳き入れた。グレナリンはチラと父の姿を見ると、今度こそ眞面目になつて怒るだらうと思つたので、馬車から飛下りるなり、一散に二階へ駆け上つた。

「待て、ハワード、まて！」

ドネリル伯爵は大聲でかう怒鳴つて馬から飛下り、手綱を召使に投げつけた。

然し子供の方では聞えぬ風をしてすばやく二階へ走り上つて、父親の決して入らない自分の部屋へ逃げ込んでしまつた。其處までは父がついて來ようとしなれないのを彼はよく心得てゐた。

「貴様はよくもあの栗毛をつかつたな！」

ドネリル卿はひどく激して御者を叱る。

「この馬は悍の強い馬で、怪我をさせないやうにさせない様にと云つてる事を、貴様知らないのか？」

「クラークさんがしろといふから爲たんでございます。御者は帽子へ手を掛けながら言つた。

「私はまた御前様、グレナリン様に言ひ付かりましたので御座います。何でも若様の御命令には從へと仰いましたから。」



とクラークは媚びるやうに、而も、きつぱりと言つて退けた。

「二度とそんな事をすると言つて暇を出さず、二人とも……」

伯爵は堪へ切れなくなつて罵つた。それから廊下を大股に歩きながら咬くのであつた。

「いまくしい奴だ。彼奴どうしてくれよう？ 俺は一家の主人公だといふことを知らしてやらなきや。」

デイナーを知らせる鐘が鳴ると、グレナリンは心中窃に慄へながら食堂へ降りて来た。其處は天井の高い、素晴らしい立派な部屋であつた。其の板張した壁には、その家の祖先たちの厳しい、威厳のある顔が見下す様に懸つてゐた。丁度その日は食卓に就くべき來客はなかつたが、平生貴族的な生活をしてゐるドネリル家のデイナーは、例によつて贅澤を極めたものであつた。

食事は何時終へさうにも無かつたが漸く濟んだ。食卓には葡萄と桃とメロンが運ばれ、主人の前へは葡萄酒が置かれた。召使たちは出て行つた。

「いよくだ。」とグレナリンは思つた。そして不安のためにもぢくして椅子に倚つてゐた。

併しそれは直ぐには始まらなかつた。沈黙が続いたが、その間父親は兩脚を組んで上の足をぶらぶら動搖させて、それから忙しげにコップへ葡萄酒を注いだ。グレナリンはそれを見て、父親が自

分の不従順を怒鳴りつけるに必要な程度まで憤怒の情を燃してゐるのを見て取つた。それから續いてどんな事が起つたか、それは急いで書いてしまはう。何故ならそれは餘りに悲しく、不名譽な事が行はれたのだから。

ドネリル卿は激し易くて重みが無かつた。グレナリンは冷かたで無禮であつた。二人は聲高に罵り合つたが、その言ひ争ひは、父子の間に似合はしからぬ許りでなく、聞くに堪へられない程であつた。かくて遂ひに、伯爵はどうにも我慢が出来なくなつて、子供の肩を攫むや矢庭に廊下へ突出して、ばたんと激しくドアを閉めた。先刻來飲んでゐた酒のために頭が亂れ、足許が確りしてゐなかつたので、グレナリンは前へよろ／＼とよろめいた。そしてドアの外側の磨き上げたフロレンス風のモザイクの床で、するりと這つて打ち倒れた。倒れるとき、何か彫刻の臺となつてゐる大理石の角へ額を打ちつけた。血がさつと床へ迸つた。

怒りの聲が聞え、突然ドアを閉める音がしたので、この時すでに二三人の召使たちが廊下へ集つてゐた。で、彼等はあわて、若主人を助け起した。彼は倒れて氣を失つてゐた。

外の騒に驚いた伯爵は、ドアを開けると集つてゐる人々に眼を止めた。子供の眞青な顔を見た。斑色の大理石に迸つてゐる血しほを見た。



「おや！」伯爵は叫んだ。「ひどく怪我をしたんでなけりやいゝが。」

「大丈夫でございます。」と女中頭が言った。

「額をお打ちなさいましたので氣が遠くおななすつただけでございます。でも直ぐとお寝みなさる様にした方が宜しうございます。」

「いやベンソンさん、どうぞよろしいやうに見てやつて下さい。なんなら直ぐに醫者を迎へにやつて。」

このいやな事件の原因に就いては何の話も無かつた。併し、グレナリンの仕打が何時も親不孝な不従順なものだといふ事を家内中の召使たち誰一人として知らぬ者は無いのを、ドネリル卿はよく承知してゐたので、こんな事が家中へ擴るのかと氣付くと、堪らなく情なく思つた。食堂へもどると嘆息して椅子へ腰を下しながら、あゝもつと幸福な満足な心持の家庭に換へられるなら、この地位も財産も進んで投げ出してしまふんだが——と思ふのであつた。

グレナリンは寢臺に横になつた。傷は洗はれ、繃帯された。ぢきに彼の意識は明瞭になつた。激しい頭痛が止むと、もう餘り大した故障は無くて済んだ。だが右の額額のところへ出來た小さな傷痕は永久に消えなかつた。そしてその傷痕は、彼の美貌こそ傷けなかつたが、長年に互つてこの不幸な

夕べの苦い想ひ出を彼に起させる種となつた。



いよくこの物語の主人公たる第三の少年ラルフ・ダグラスの住む邸を訪ねなければならぬ。その邸といふのは、まことに裕福な美しい英國風の家の標本であつた。そして又、ちよつと見ただけでどんなほんやりにも判明る様に、その家には贅澤な風、心地よい様子が見えるばかりでなく、上品な所が具はつてゐる。

しかも、ラルフ・ダグラスは急いで入らうとする様子は無かつた。彼は父親が彼のクリケットをする時の目醒ましい活動などには塵つ葉程も興味を有たない事や、試合の結果については冷笑的な質問さへ、恐らく十中八九まで無からうといふ事をよく承知してゐるのだ。エヴァン・ダグラス氏の趣味や欲求は、ラルフとはまるで反対の方向へ向いてゐた。で、彼の楽しみや好みに對しては、それに同情を有つだけの興味を、少しも感じて呉れ無かつた。二人の子供のうち、一人は彼が大好きで、一人は——氣の毒にそれがラルフなのだが——冷たく取扱はれ、無視され、蔑まれた。

ダグラス氏は學者であり、紳士であつたが、彼の學問は極く偏屈なもので、彼の知識はまことに露ひのない型のものだつた。彼の學問上の評判は、彼を論難者としては尊大ならしめ、人間として

は容赦のない、包容力の缺けた人にしてしまつた。斯様な我意は——よく人が己れの缺點に對してする様に、彼もそれを却つて誇つてゐたのだが彼の品性を支配してしまつた。その爲、後からわが行を顧る時にはいつも恥しい思ひをせずには居られない様な行動をさへもする様になつたが、さて其の恥しい思ひは、彼の將來を戒め後悔させる力とならずに、却て彼を頑にするのであつた。氏はもともと善い家柄の生れであるが、若い頃は非常に貧乏で、苦學して大學を卒へ辯護士となつた。後、海軍大將の娘と結婚したが、偶然二人の親戚の死によつて、思ひ懸なくこのアールバロの家を繼いで、その貴重な財産を所有することになつた。かうして、突然に富を得た彼は、この機會を利用して、今までやつて來た辯護士といふ職をすつかり永久に止めてしまつた。

ラルフとクリステイといふ二人の子供が出來ると、彼は其處に新しい仕事と、新しい興味の對象とを見出した。彼は子供たちの爲に、人生に清新な目的を與へられたのである。彼は少しも早く子供たちを教育する仕事を始めたくて、未だ稚い時代を殆ど待ち切れないといふ風にみつめてゐるのであつた。しかも、その熱心さは、單に、本當の私心の無い、子供たちの將來の幸福の爲ばかりを思ふからではなかつた。彼の心のうちには、虚榮だの野心だのといふ混ぜ物がかんり含まれてゐたのである。彼が子供たちを優れたものにしたと思ふのは、子供たち自身の爲であるよりは、



寧ろ彼自身の名聲の一段の光を添へたいと思ふからであつた。なぜなら、彼は何事を考へるにも自分を本意として、決して他に標準を置かない人であつたから。

最早人生に取り残された人として、彼は子供たちが將來成功し、優れた人物となつて、父親自身の失望を救ふ時が来るだらうといふ望みにひたすら没頭した。彼が自分で今までにやつて来た修養は、殆ど其の爲に幸福を齎して呉れなかつたのに、懲りずまに子供たちをも自分と同じ型に造り上げる事を、一生の長い希望としたのである。

ラルフは伶俐な敏捷な少年だが、快活で活々としてゐて、活潑な子供に付きものの陽氣な燥いだ所を十分に有つてゐた。かくて、彼の少年時代は戦と涙なしには過されなかつた。子供の天性を理解しない父親は、これを非常に惱んで、一步も容赦しなかつたから。一方クリステイは病弱な少年で、何でも智的な仕事を愛した。で、考へ深い、まじめな少年に成つて行つた。だから、父ダグラス氏の愛情や賞讃は皆彼に集中した。だのに可哀さうにラルフに對しては、氏の感情は往々苛酷で、常に冷かであつた。ラルフが父の意見に合ふ様に努めるらしい所が一寸も無かつたから。

父から歸れと堅く言はれた時刻を過ぎても歸らなかつた事を意識してゐるラルフが、邸の門番の所まで來ると、悲しい心持になつた理由が、もはや我々には了解るではないか。彼はこつそりと家

の裏口へ廻つて、その階段を上つて、彼と弟とが使ふやうに設へた書齋の様な室へ這入つたのである。其處に誰もゐないのを見ると、再び降りて來て、蔽ひのある庭の小路を走つて行つて池に着いた。彼は小舟に飛び込んで、漕力を速めて小さな中島へ漕ぎよせた。二三歩草地を横切ると其處に四阿があつた。中には窓により添つて腰を掛けて讀書に耽つてゐる愛らしい少年がゐる。伶俐さうで、しかも静かな顔付きの、ラルフより幾分か三つは年下の、但し全體の様子は似てゐない、何處の兄弟でもこの二人ほどに違つてゐるのは少いと思はれるほどであつた。彼はすつかり本心に心を奪はれてゐるので、ラルフの近づいたのに氣が付かなかつた。そして、彼をぢつと凝視してゐるラルフの表情から見て、二人の顔の違ひなどはお互の愛情に何の關係も無いのだといふ事は明かに知れた。

「クリステイ、何だねそんなに面白さうに讀んでゐるのは？」

とラルフは弟が自分のゐるのに少しも氣付かないのを面白がつて微笑んで言つた。

「あ、兄さん！」クリステイは吃驚して立ち上りざま、「何でこつそり來たんです！僕、ちつとも知らなかつた。マコーレーのね、レース（レース、オア、エンシエント、ローマの）を讀んでゐたの。」

「古典學者だねえ！」と戯れて、「だが、こんなに薄暗くなるまで讀んでゐると、盲人になつちまふ



よ。さあ行かう。」

「なんです！ まだ兄さんは家へ行かないの？」

クリステイは彼の運動着を見ると言った。

「どうしたんです。もう八時半過ぎですよ。」

「知ってるが、仕方が無かつたんだよ。お父さまは怒ってる？ いや、聞く必要はない、きまつてるんだから。」

「だつて晩くも七時半までには歸る様につて、お許しを受けたんぢあない？」

「さうさ。試合だつてデイナーだつて、それまでには終へる筈だつたんだよ。だから無論歸る積りだつたんだ、デイナーなんかお父さまにははれなくつても斷れたんだからね。しかし、試合だけが七時十五分までかゝつちまつたから仕方がない。終へると直ぐにマーテン君やグレナリン君と歸つたんだ、デイナーを食べずにね。お父さまは何と仰しやつた？」

「あんまり仰しやらなかつたけれど……。兄さん、僕ね、お父さまはひどく怒つてらつしやると思ふの。なんだかぶつ／＼言つて、ひどく苦い顔をしていらつしやつたもの。それでお母さまが、兄さんは何か故障が出来て歸れないのかも知れないつて仰しやつた時に、たゞチエツて仰しやつただ

けでしたもの。」

「困つたなあ——僕は何をしたつてお父さまの氣に入らないんだもの。」

悲しげな調子でラルフは言つた。

「ほんとに、兄さんは氣の毒です。でも、氣にかけないでね、兄さんがすつかり話をすれば、必とお父さまだつてそんなにお怒りにならないでせうから。」

「ねえクリステイ、若しもこれが僕でなくてお前だつたら、お父さまはお怒りにはならないんだが。」

「兄さん！なぜそんな事をいふのです！」とクリステイは急ぎ込んで「さあ行きませう。晩くならないうちに رفتた方がいゝんだから。僕、漕いで上げます。」

「應接間へ入らうよ。お母さまがいらつしやるから。お前とお母さまの前ならお父さまだつてひどく仰しやらないんだからね。」



ラルフとクリステイは應接間へ行つた。そして、本當に嬉しい事に其處に母がゐてくれた。

ラルフが急ぎ込んで傍へ寄つて接吻したとき、彼女の顔は喜びに輝いてゐた。そして自分の隣へ彼を掛けさせた。さて直ぐ様試合の様子を尋ねて、ラルフが克ち得た所の勝利を控へ目に然し男らしく報告するのを、熱心に嬉しげに聞入るのであつた。そして、まだ試合の結果について聞かないうちに、心配さうな調子でかう聞いた――。

『だけれど、ラルフさん、どうして七時半を過ぎても歸らなかつたの？ お父さまは時間を守るといふことについてはあんなにやかましいんでせう、だからお父さまの仰せは必ず守らなければなりません。せめてダイナーの始らぬうちにお歸りだよね。』

『ダイナーの始らないうちに歸つたんです。試合が六時に終へる筈だつたのを、あんまり面白く運んで、七時半まで續いたんです。』

『さうですか、それぢや早く歸れなかつたのも無理はありません。でも、ラルフさん、お父さまはきつと御機嫌をわるくしていらつしやるでせうが、お腹が空いたでせうね、まあダイナーをお上ん

なさい。』

『あの、僕の傍に来てゐて下さらない？ 御飯の済むまで。』

・ダグラス夫人は悲しげに微笑んだ。彼女にはラルフがなぜこんなことを言ふのか了解つたのだ。そして、愛情深い彼女の胸は、長男が家の中に絶えずびく／＼して暮してゐることを思ふと悲しみに堪へられなかつた。家庭にどんなによい所があらうと、またそこに母と弟との愛があるに拘らず、ラルフは家にあつて決して本當の幸福を感じてゐないことを、彼女は知つたのである。不斷の暗い影が――どんな細やかな事にも不機嫌になる父親の影が――彼を覆つてゐるのを、彼女は知つたのである。だから微笑みながら、

『え、二人で傍にゐてあげませう。』

と答へたが、それまでに、かうした悲しい思ひが彼女の心を通り過ぎて行つた――今までに幾度となく通りすぎたやうに。

應接間へ行く途中、讀書室の傍を通つた。その時、きつとお父さまが室に居られると信じて、子供たちは足音を立てない様に十分注意して廊下を通つた。

ダグラス氏はその足音を聞かなかつたものだから、まだラルフは歸らないと信じてゐた。特別に



クリツケットの試合か嫌な人故、胸の中は怒で一杯に成つた。彼はラルフがそれに適してゐようとするまいとにかまはず、彼を古典的な學生に作らうといふ頑固な決心を推通して行つて、休暇中毎日彼に日課を強ひた。それが、この位ならといふ様な少し許りの日課ではなくて、規則正しく數時間づつ厳しくやらせるのである。で、その日だけ試合の爲に例の課業を爲さないでいゝと——クリステイが特に仲へ入つて骨を折つたにしても——許してやつたのは、不承々々の、いや／＼ながらであつたのだ。だから許しはしたが、どんなに晩くとも七時半までには歸れといふ固い條件付きで許したのであつた。然も、その約束をラルフは破つたのである。

ラルフは席について、心地よい食事をつた。そして母と弟に向つて、熱心に試合の痛快だつた様子を説明してゐる間、彼は殆ど父に會ふといふ恐さを忘れてゐた。やがて遂に讀書室のベルが突然激しく鳴り出した。彼は吃驚した。

ダグラス氏はラルフが歸つて來た音は聞かなかつたけれども、隣の部屋で食器の音ががら／＼するのを隨に聞いたので、誰が何をしてゐるのかを、十分推量することがすぐ出來た。ベルを鳴したのはその推量を確める爲に過ぎなかつた。呼に應じて召使が來るまでに、彼はすっかり不機嫌になり切つて、彼の耳に入る陽氣な話し聲も笑ひ聲も、それを宥める事が出來なかつた。

「若様が歸つた様だな？」

彼は下男に言つた。

「はい、半時間ほど前にお歸りでございます。」

「何處にをるか？」

「お隣のお部屋でデイナーを召上つていらつしやいます。」

「話があるから來いと言ひなさい！」

ベルの音を聞いてからのラルフの變り様は見ても氣の毒であつた。忽ち悄け切つて、眞青になつて、そは／＼と邊りを見廻した。そして話しかけてゐた言葉も途切れて續かなくなつた。

下男がダグラス氏の吩咐を傳へた時、

「私が行つて上げませう、そしてお父さまに事情をお話し申上げませう。」と夫人は云つた。

「恐がらないでもよござんすよ。私が事情をお話し申上げたらきつとお怒りなされることはありませんまいから。」

「済みません、お母さま。」

ラルフは感謝を面に表して云つた。ほんのちよつと彼は落付いた。が、すぐ父の聲が聞えてくる



と、彼は望を失つた。

讀書室へ入ると夫人はかう云つた。

『あなた、ラルフが可哀さうですから餘り厳しく仰しやらないで下さいませ。本當にラルフの爲では無いんですから。』

『私と子供の間の事に、どうか餘計な干渉はしてもらひたくありません。』ダグラス氏はぢり／＼して言葉に力を入れて、なほ次のやうにいつた。

『なぜそんなに子供の品性を害ふ様な事をお前はなさるのか、わたしには解らん。』  
別に品性を傷けはしないと思はれますが。』

と夫人は靜に云ふ。

『私の言ふ事をあの位よく聞く子はございませんし、それに……。』

ダグラス氏はその聲を遮つて、

『あゝさうか、ぢや何だね、わしが喜ぶ様に私にだけ悪い性質を見せて呉れるんだね。成程、尤もだ、慥に。』

『いゝえ、あなた、今まであなたの御命令に背いた事もほんとに滅多にないと思ひますが、それに

たまにはもう少し穩かにあの子に話をして下さいましたら——。』

『あゝもうよろしい、もうよろしい、すつかり解つてゐます。その話ならもう何度聞かされたか知れない。わたしはあの演劇に出る暴君の様な人間なのだね。私がわるいんで、ラルフは悪くない。わしがさせたんで、わたしには自分の子供の性質もわからんし、子供の監督も出來んだ。わたしは壓制者で、ラルフは天使だ——クリツケットより外に世の中に何も好きなもの無いラルフが天使だ。』

『でも、あなた——。』  
『よろしい、ラルフに言つて置く事が一つある——お前にも約束して置くよ——それはこの休み中はもう決してクリツケットをしてはならんといふ事だ。これは如何にも適當な處置だらうと思ふよ。尤もお前は私が子供の墮落を防がうとして何か爲れば定つて文句を言ふが、この位なら嚴しいとは言へまい。』

『何でございます？ こちらの運動場でやつても悪いのでございますか——村のクラブの人たちとでも、友達のアラビイさんやグレナリンさんとも——？』

『無論さ。あれほどやかましく言つて置いた命令を守つたんなら、——今日のやうにラルフの願を許した場合あの位の條件は當然であつて、それを守つたんならこんな事は私も考へなかつたのだ。』



だがラルフは私のいふ事には少しも敬意を拂はん。この位の事を強いるのは當然だ。あゝ、なぜこんな子供を持つ様になつたのか、わしは……」

「まあ、あなた！あんまりでございます。そんなにもお氣に觸るならもうこのお話は止ませう。ですが——」

「氣に觸る位ぢやない、苦しいのだ。一體私が今度の事をこんなに重く考へてるのに、お前は子供に軽く軽く取らせようと骨を折るのだから始末が悪い。どうかラルフがぢかに來て自分で申開きをする様に呼んで下さい。」

一言も怒つた様な口を聞かず、咎め立てするやうな顔を見せずに、彼女は靜に立つて其處を去つた。かういふ風に議論をする時は何時でも、どんなに靜に優しく話しても、たゞ彼を激させ、彼の決心をより強くするに過ぎない事を彼女は知つてゐたのである。溢れ出る涙を一心にぢつと堪へながら、彼女は食堂に歸つた。ラルフの額に接吻して言ふ。

「お父さまがお呼びですよ。——クリステイさん、さ、應接間へ戻りませう。」

ラルフは父の前へ行つたが、父は挨拶も爲なければ、腰かけよとも言はなかつたので、  
「御用ですか？ お父さま。」

と問うた。  
「當然だ！」

ダグラス氏は忌々しげに言ひ放つた。そして直ぐ、嚴格な態度で續けた。

「わしの命令と、私の望みと、お前自身の約束とをなせ心に留めないのかと聞かせれば、始めて悪い事をしたのか知らんと思ふ様では、お前はさういふ大切な事柄を、三文の價値も無いと思つてるらしいね。」

ラルフはおとなしく答へた。

「お約束の時間に遅れて歸つた事を仰しやるんでせうが、實際——」

「何、實際？ ふん、實際何だらう、お約束なんかあの美味いクリツケット・デイナーに比べて、全く價値が無かつたといふのだらう。」

「僕はデイナーの爲に残つてゐたのではありません。」

「ぢや何處にゐたのか？ アラビイさんの家でお世話になつて居つたのだな、それとも、あのやくざもののグレナリンと何か悪戯をして居つたのだらう。」

「グレナリン君と悪戯なんてした事は有りません。」



といふラルフの聲は少し怒りを帯びてゐた。父から物を言はれる時は、出来るだけ感情を抑へようと骨を折るのであつたが、彼はこの不條理な攻撃にむつとしたのである。

「さうか、それではすつかり閑になつたら私の命令に背いた言譯をして貰ひたいものだね。」

「僕が言譯を始めたなら、あなたが邪魔をなさつたんぢやありませんか。」

「あなたが！邪魔した！それが父に向つて言ふ言葉か！」

彼は怒つてかう呶鳴つた。

「もういゝ。もうこの事件については一言も聞く耳を持たんから。お前はお歸りなさい。たゞ一つ言つて置く、それはな、この休み中試合を一切さし止めるといふ事だ。」

「え、お父さま！」

と、ラルフは深く困惑した様子で言つた。

「氣に觸つたか。お前の心は、クリツケットとさへ聞けば共鳴するのだ。もつと高尚な考へには及ばずに。」

「それはあんまり不當です！」

ラルフは父の面をきつと眞面に見ながらかう言つて、それから靜に顔を背けた。

彼は未だ曾て父に對つてこんな強く出た事は無かつたが、この時は彼の深い苦惱の中から知らず識らず迂り出たのであつた。併しこれを聞いた父親も、これを言つた子供も同じ意外の念に打たれたのである。それはこの衝突によつてラルフが何時迄も子供ではない事と、父と子との間の意志の相違からの争ひが、今までよりも更に激しいものになつてゆくかも知れぬといふ事とが、二人にまざ／＼と分つたからである。

これと同時にダグラス氏はまた一つの決心を抱いた。その決心といふのは、どんな事があらうと己の抱く最も嚴しい躰の方針は縱令一箇條たりとも弛めないし、また子供との争ひはたとへ一瞬間たりとも容赦しないといふ考へである。彼は一寸の間、何と言つてやらうかと考へる爲に、怒の情と戦つたが、やがて頗る冷かな態度でかう言つた。

「不當だらうが不當で無からうが、どんな口實があらうと、どんな事情があらうと、休みが終つて學校へ歸るまでは二度とクリツケットを爲てはならんといふ事を確り覺えて居るがよい。尤もその時が來ても私は餘り名殘惜しくは思はんだらうがね。」

「私だつて名殘惜しくはありません。」

と口の先まで出たが、ラルフはじつと堪へた。そして靜な足取りで讀書室を去つた。彼の痛み傷



いた胸の中は、ひどい目に會つたといふ感じに打惱まされた。

彼は應接間へ行つて母とクリステイの所へ腰を下した。三人とも物も言はず、悲痛な感じは其處に満ちた。ラルフは本を讀む風をしたが、その眼は絶えず母夫人の方へ彷徨つて行くので、手に持つた本が倒になつてゐるのに氣が付かなかつた。母夫人はちつと首垂れて、頬に青ざめた兩頬を傳つて落ちる涙を子供たちに見られまいとしてゐた。

一時間程経つてダグラス氏が其處へ入つて來た時、皆は丁度さうした状態である。ダグラス氏はラルフの椅子の傍を通る時、如何にも蔑んだ調子で言つた。

「下らない佛蘭西小説だらう、無論。それさへクリツケットに直接關係が無いので、倒に見るだけの興味しか無いと見える。」

ラルフは何とも言はずに靜に本を閉ぢた。そしてやがてクリステイと二人で寢室へ行つた。二人はいつも一つ部屋で寢たのであるが、その部屋へ着くや否や、クリツケットの試合に於ける若い光榮ある戦士は——ラルフは、兩手に顔を埋めて、わつと泣き伏した。

「兄さん、お父さまは何て仰しやつたの？」

クリステイは兄により添つて脆いてかう聞いた。

「休み中はクリツケットが出来ないんだ。だけれどクリステイ、僕の残念なのは、クリツケットの事ぢやないんだ。」

「兄さん！それはもう考へることはお止しなさい。僕はほんとに兄さんがお氣の毒です。」

「あゝ、もうこんな話は止さうよ。もうちきに休みは終へてしまふ。そしたら又學校へ行つて終ふんだ。」

彼は弟の悲しげな顔を見つめたが、續けて言つた。

「お母さまやお前の傍を離れるのは辛いけれど、でもなぜか僕には家が家のやうでないんだもの。」

彼は徐々と夢心地の言葉を續けたが、やがて物に怖えた様に急に付加へた。

「お休み、クリステイ、僕の事など心配しないでね。僕はもうクリツケットの事は考へないよ。僕もお前も、何か外に面白いことをして遊ばうよ。」



その次の週は、ラルフにとつては寧ろ物淋しく過ぎてしまつた。ダグラス氏の収入をもつてすれば、息子等に乗用の馬を飼つてやる位のことは何でもないことだつたけれど、まだ飼つてはなかつたので、夏休み中のラルフの主な娯樂はクリツケットであつた。それを差し止められたのでラルフは閑を消す爲にする好きな樂みは何一つ無くなつてしまつた。それにクリステイは一生懸命に兄と仲間になつて遊んだのだけれど、何分孱弱い、華奢なつくりの少年だつたからぢきに疲れてしまつて、兄のラルフが好む激しい運動には堪へられないのである。そんな工合で、一日とラルフは父の不當な禁止を益々苦々しく思つて焦立ち初めた。日に日に彼は「いゝんです。お父様、僕はそれを不當だと思ひます」といつた自分の言葉を、益々強く想ひ出すのである。そんな風で一步一步と進んで遂に次のやうな明かた問ひを我と我が身にかけるやうになつた。

『たゞ單に父が止めたからといふ丈で、それを几帳面に守る必要は何處にあるのだらう。』

ダグラス夫人は深く此の有様を憂へて、一方にはダグラス氏の怒を和け、一方にはラルフの不満と倦怠とを救ふことにクリステイと一しよになつて肝膽を碎いた。併し夫人は今迄の経験から推し

て、夫人が眞正面から仲裁にはひるときに、何時だつて心よく受け入れられないばかりでなく、大抵の場合益よりも害あることを心得てゐた。それ故父の鍾愛を獨占してゐるクリステイに仲裁させるのが、この場合却つて有効だと考へた。だから、一日クリステイが夫人に「ラルフ兄さんにお父様はクリツケットをしてもいゝとお許しになるでせうか、ならないでせうか？」と尋ねた時に、夫人は「貴方自身でお父様に伺つてはいかゞ。」と云つた。

で、次の日、クリステイの日課の解釋なり作文なりは日常にも増して正しく且つ味の深いものであつた。殊に元氣のいゝ、將來の進歩が想はれるラテン語の詩が、すっかりダグラス氏の氣に入つてしまつた。で晝食の後クリステイは心を勵ましていひ出した。「お父様、大變なお願ひなんです、許して頂けませうかしら。」

『許くともね、屹度。といつたつてお前のことだから私が斷りさうなことは願ひはしないからね。』  
ダグラス氏は物を云ふ度にチラ／＼ラルフの方を視やり乍らいつた。

ラルフは何事をもいはなかつた——こんな不愉快なあてこすりをされても、近頃になつてはそれが慣れつこになつてゐたので、最早や大して氣にもならなかつたし、腹立ちもしなかつた。クリステイはつゞけた——『併し僕のお願ひといふのは、僕の爲にぢやないんです。兄さんのことなんで



す。』

『そんならラルフに自分で頼ませるさ。』とダグラス氏は冷やかに云ひ切つた。

『いえ、兄さんは僕がお願ひしたいと思つてゐることを何も知らないんです。』クリステイは熱心にいふのである。そして父親の冷やかな態度に氣も挫けたのであるが、唐突にその頼みを口に出した。

『兄さんにクリツケットをすることをお許しになつて頂きたいんです、お父様。』

『兄さんはこないだの仕合にお父様の命令に背いたのだから仕方がないよ。』

『先達の夜、若しお父様が僕に事情を話すことさへ許して下さつたならば、僕がお父様の命令に背いたなぞとは仰しやらないと思ひます。』とラルフがいつた。

『事情を話すといふことは大抵言譯をすることなんだが、お前はその言譯が好きなのだ。そして言譯は大抵の場合、明かな虚言と一番近い親類だからね。私は言譯は餘り好かないよ。』

『併し僕のは單に言譯ではなかつたのです。一體僕は滅多に言譯はしない積です。』とラルフは傷けられた感情を壓へようと努力して眞赤になり乍ら言つたのである。『そして虚言などは今迄生れてから一度だつて言つた覚えはないんです。』

『ふん、さうか。私はお前と議論なんかして居られないよ。ヘンリー・アラビイ卿を訪ねることにな

つてゐるのだ。一寸だつて閑は無いのだ。』

『そんならお父様は僕にクリツケットをすることを許して下さいさらないんですか、お父様。』

『今のところ駄目だね。』

低い怒りの聲が、ラルフの口から洩れ出たが、父親から睨まれてやめてしまつた。そこでクリステイが優しい辯護を續けることも今は無益となつた。

『お前の願を聞かないのは氣の毒だが、まだ許すことは出来ない。』といつて、ダグラス氏はクリステイの頭を軽く撫でてやがてその部屋を出て行つた。

『あれだ。』ラルフは苦々しげにいつた。

『あれがお父様の遣り口なんだ。クリステイ、お父様はお前を失望させたことを残念に思つていらつしやる。お前はお父様の御秘藏で、お願ひすることは何でも刎ねつけられたことはない。だが僕を失望させることなんかちつとも御考へにはならない。』

クリステイには、ラルフが如何なに此のことを氣にしてゐるかよく分つてゐた。これが原因となつて、彼が殆んど崇拜してゐる兄との間が仲違になりはしないかと、日夜心を痛めてゐたのである。父が不公平で、二人の子供に對する偏頗な取扱ひは、氣を留めて見ない人にも分るくらゐ



であることを、クリステイは知つても居たし、遺憾にも思つたし、否定することも出来なかつたのである。

ダグラス氏の遣り口ぐらゐる、兄弟の仲を裂き、一家の不和と不幸を招くものはなかつた。併し幸ひにも一方には母の美しく聖い献身的の愛があり、又一方にはラルフが持つて生れた心の寛さと、クリステイの何處までも變らぬ柔しさとの爲に、そのいまはしい結果を避けることが出来たのである。

『僕がいつたことを苦にしないで呉れ。時々は不平が口を迂り出すけれども、それは許してお呉れ。あんなことを言つたからつて、僕、お前を愛しないつて云ふんぢやないんだから。そしてクリケットの事についていふことは充分承知してゐるんだが、僕はどうしても遣つて見せるよ。屹度。』とラルフがいつた。

『兄さん。飛んでもないことです。そりやいけないでせうよ。若しお父様がお見つけになつたら、どんなにお怒りなさるでせう。——それこそ大變ですよ。お父様は時々あんなにお怒りなさるでせう。兄さんがそんなことをなさつたらどんなことになるか知れませんか。それに悪いことなんだものねえ。』

ラルフはそれには何とも答へなかつた。丁度その時ラルフの名を外から呼ぶものがあつたので家から飛び出して見ると、マーテンとグレナリンとが小門によりかゝつてゐた。二人ともクリケットの服装に身を固めて居て、グレナリンはバットを手にして居る。彼はバットを持つて、丁度自分がウイットケットの前にでも立つてるやうに、色々の態度をし、上下左右にバットを振り廻してゐる。『ねえラルフ君、此の十日程クリケットにちつとも顔を出さないね。君はアルトンで殊勳を立てたから、クリケットは斷つてしまつたのかへ。とにかく來週の明日は、オクスフォード組と又大試合をやるんだから君にも出て貰ひたいんだ。』

『オクスフォード組つて！』ラルフは驚き乍らも熱心にきいた。

『さうさ、われ／＼にとつては堂々たる相手ぢやないか。ペーイボードに讀書會があるんでね。その會の人等が僕等バブリック・スクール組に挑戦しようといふので、二人のオクスフォード大學生をよんだんだよ。僕等が先達アルトン組に勝つたもんだからさ。勿論君もやるだらうね。』

『さうだねえ。』ラルフはためらひ乍らいつた。『やれるとは受け合へない。』

『受け合へない？ こりや面白い。君は僕等の中の第一人者なんだからね。——マーテン君。君が褒めてくれ給へ。ラルフ君は、君の頼みは聞くんだから。』



マーテンはいった。

「ラルフ君、僕は君に頼まなかつたんだよ。先達君のお父様が君にクリツケットをお禁めになつたといふから。』彼は此處で言葉をフツツリ切つてしまつた。といふのはラルフが眞赤になつて、家中のごたくはどんな事にしろグレナリンに知らせたくはないと眼顔で知らせ居たからである。『お父様がお禁めになつたつて！ハハハ、馬鹿々々しい。』とグレナリンはいつた。そして氣がつかずにしてゐるやうすで、まだ癒り切らない額頭の傷痕のところへ手を上げ乍ら、その顔には不愉快だといふ表情が浮んだ。

「やるといふ約束は出来ない。僕はまだやるといふ決心はつかないんだが、若しも外に人が得られなかつたら、僕を宛てにしてもいゝんですよ。』とラルフがいつた。

「それで結構。お父様の命令なんか氣にしなくつたつていゝよ。お父様に何の關係があるか知らん。』

「僕はさうは思はないね。父が僕に差し止めたとしたら、僕としてはクリツケットをやらう等と思つてはならないと思ふ。』とアラビーがいつた。

「でも君のお父様は、クリツケットをするのを禁めたり等なさらないからね。マーテン君。あの人

は御自身でクリツケットをなさるんだ。そして君がクリツケットするのを見て喜んでゐらつしやるんだ。さあもうこんな話はよさうよ。とにかくどうにかして都合がつけば僕はやるから。』

「有難い」とグレナリンはいつておいて「君が僕等の側に加つてくれれば、大學の選手等を打ち破ることは確だ。向うはまだ一しよになつて練習をやつたことは一度もないんだとさ。僕はマーテン君と二人で今まで練習してゐた所なんだがね。君も僕のところへ少し弓を引きに行かない？ 近いうちに弓術試合がある筈なんだ。試合へ出て賞品を貰ふのも面白いだらうぢやないか。』

「弓は非常に好きなんだ。今は何もすることがなくて困つてるんだよ。クリステイも連れて行つていゝだらう。クリステイも決して下手ぢやないんだよ。』

「あゝ是非連れて來給へ。クリステイ君はいゝ少年だよ——實に。』といつてから、家から悠々やつてくるクリステイに「オーイ、クリステイ君、來給へ。』といつた。それからクリステイが傍へ寄ると「君と僕とは先に走つて行つて弓や矢を揃へて置かうよ。そしてラルフ君やアラビー君の來ないうちに、一等いゝのを選つておかうよ。』

マーテンは、クリステイと肩を並べて跳んで行くグレナリンを見やり乍ら「そんなにいゝんですか。』とラルフにいつた。



「君としたことが、グレナリン君を好きがるなんて可笑しな事つた。」  
「どうして？ 僕はグレナリン君は好きなんだよ。君は好かないの。グレナリン君は腹は悪くないんだよ。」

「マーテンはいつた。」そりや僕等は腹の悪い者は少ないと思ふよ。僕もグレナリン君は好きだが、尊敬は出来ないんだ。いや一しよにゐるには本當に面白い男だ。全く茶目で、愉快な男だよ。逆らひさへしなければ、然し逆らつたが最後、あの位駄々つ子の肝癪持はるないよ。いや何も悪口をいふ積りぢやないんだ。このことは現にたび／＼面と向つてさういつて遣つたのだよ。」

「僕はまた、君とグレナリン君との間は普通の友達同志だと思つてゐたんだよ。そして僕はグレナリン君には何も大した缺點はないと思つてゐる。只少しぶるけれども。」

「いや、グレナリン君は僕の友達であるし、また友達でないんだよ。そりやあ、僕の方が君よりグレナリン君のことをよく知つてゐるさ。なにしろ、僕はグレナリン君と一しよにイートンにゐるんだからね。歸省中も自然一しよになるし、僕は決してグレナリン君は嫌ひぢやないと思ふ。グレナリン君が、イートンで色々と事件を起した時に、僕は時には彼の力になつてやつた事などあるんだ。——グレナリン君がイートンで事件を起すことは數へ切れない程なんだよ。でも矢張、クリステイ

君にしたつて、僕の小さい弟等の誰にしたつて、決してグレナリン君の様にはならせたくないねえ。」

「でも、グレナリン君は何もクリステイを悪くするやうなことはないと思ふが。」とラルフはいつた。

「無論、そんなことはないさ。第一君の弟がそんなにグレナリン君とつき合はないだらうし、また君の弟は一寸やそつとのつき合ひで悪に染まる性質ぢやないよ。君の弟位、うぶな子供は僕は他に知らないよ。」

「ところが、僕を悪くするのにや、さう大して骨は折れないと思つてゐるんだらう。」とラルフは微笑を浮かべながらかういつて、

「そりや、それに違ひないのだけれどね、ねえ、マーテン君、僕だつて——」

彼は若しクリステイの様に優しい取扱ひを受けるなら、自分だつて同様に善くなつてゐるかも知れないんだと、一口附け加へようと思つたのだが、黙つてしまつた。

「來週の明日は、君が試合をやつても差支へないといふのは本當に嬉しいよ。」マーテンはかういつて話を轉じた。

「いや、試合に出ても差支へないとはいはない。自分から出るだらうと云つたんだよ。」



「え、君のお父様のお許しなしにかい？ 僕が若し君だったら、決して出ないのだが。」

「いや、いけないことは辯へてゐるさ。だけれど——」ラルフは云ひ淀んだ。

「だけれど、一體どうしたつていふの？」

ラルフは無言で地面を見て、砂利を足先で蹴つてゐた。

「だけれど、一體どうしたつていふの。」マーテンは繰り返した。

「いや、差當り心配かける程のことぢやないんだ。安心して呉れ給へ。」といつて、

「行かうよ。一しよにグレナリン君の後を追つて行かう。二人を待たせるといけないから。」

「だが、僕に約束し給へな。若し君のお父様が何處までも、お禁めになるなら君は試合に出ないといふことをね。」マーテンは思つたまゝを固く執つて言ふのだつた。

「若し君がお父様の命令を破りでもしようものなら、君のお父様の事だから、どんなにかお怒りなさることだらう。その試合の間中、若しや君のお父様が君のやつてるところを見付けられやしないかと、僕は気が気でないだらうからね。その上僕は、君が試合に出るつていふのは好まないね。假令君のお父様が君を見付けようと思つてまいとね。そりや、間違つたことなんだからね。どうしたつて善い結果のありようがないんですよ。」

でも、ラルフは決しかねた様子で、

「僕は約束は出来ないよ。そりや、やらない方が宜いかも知れないがね。それにしても、もつと考へて見たいから。若し僕が試合に出ないとすれば、誰か僕の代りを探して君にお知らせしよう。さあ行かうよ。」



ラルフとマーテンとがドネリル家の邸へ来て見ると、最早や標的が丁然と据ゑつけてあつた。クリステイはラルフの耳に口を寄せて、

「兄さん、僕はロード・グレナリン君が一等宜いのだといふ弓を兄さんにとつて置いて上げましたよ。」

「さうか、それぢや貰つておくなんて蟲の善いことをする兄さんだと思ふのか。」

「どうしても兄さんがとつて下さらなきやいけないんです。いや、とらせませす。」

クリステイはさう云ふと、他の弓をとつてもう一方の標的の方に投槍の飛ぶやうに走つて行つた。ラルフは、弟がかくまでに自己を忘れて兄を思ふことを、マーテンに見られて心竊かに喜び乍らもわざとクリステイに對つて、「捉まへたが最後、ひどい目に合はしてやるぞ」などと脅した。

ロード・グレナリンは名だたる弓の引き手だつたが、一方は彼とクリステイが一組になり、一方はラルフとマーテンとが組み合つて試合をやり、その隙に幾ら金を賭けやうといふ風なことをグレナリンが云ひ出したけれども、マーテンはその賭金のこととは、一も二もなく斥けてしまつた。

そして最初グレナリンがそれに對して怒りかけたのをうまく茶化してしまつた。

グレナリンはすぐ機嫌を直したが、それは彼とクリステイの組が相手のラルフ・マーテン組よりは遙かに巧いことが分つたとき、とり分け上機嫌になつた。四人の少年等は、此の試合をぐつたり疲れ切つてしまふ迄やり續けて、午後の半日を心から楽しんだのであつた。

少年等が宅へ歸らうと思つた頃は夕方まだ早かつたが、グレナリンはバットを磨かせに持つて行くからといふので、マーテンやラルフ兄弟の歸るのと連れ立つて邸を出た。その時グレナリンとクリステイとは少し離れて二人の前方を歩んでゐたので、ラルフはマーテンに話しかける機會を捕へた。

「マーテン君、僕は君のお勧めに従つて、此の試合には出まいと思ふよ。」

「ラルフ君、それを聞いて僕は嬉しく思ふよ。出ない方がどれ丈いか分りやしない。それも君のお父様の氣が變つてお許でも出れば格別。いや試合に出ない方が君にとつてどんなにか合せだらう。」

「え、マーテン君、こんなことになつたのも、一つは僕自身の罪だけでもね。君は長いおつき合ひで、僕をよく知つてゐて呉れるが、僕はうちでは心が安まる時がないんだよ。だけど、僕はその



156  
事については此の上何にも言ひたくはない。それに夏休みも、もうすぐ終へるんだからね。僕は學校に居る方が、うちにゐるよりずっと面白いよ。ただ、クリステイが僕と一しよに學校にゐてさへ呉れるなら、僕はどんなに嬉しいことだらう。』

『どうして、クリステイ君はラグビーへ入學して君と一しよに遣らないんだらう。』とマーテンは尋ねた。

ラルフは答へていふ。

『僕はよくは判らないんだがね。一つは弟が虚弱でおとなしいからなんだから、皆でね、學校生活には堪へられないだらうと氣遣つてるんだし、又一つは弟は父の手元で素的によく勉強をやつて行くし、父は父で弟を大變に可愛がつて自慢にしてゐる位なので、手放しするのが辛いといふやうな事情もあるしね。それに尙僕といふ者が、弟に怠惰るお手本を示すだらうとかいふ様なことも、お父様に見れば心配されるらしいんだ。で僕と一しよに學校に出さないんだよ。』

『だつて君は怠惰てるやしないぢやないか。ラルフ君。』

『あゝ、僕だつて、怠けちやるないつもりだよ。いや、僕などよりも十倍も怠ける者もゐるからね。そして僕には古典學よりもつとよく出来るものがあるが、その方は試めされないんだ。兎に角、僕

の父は競技が好きな者とさへいへば、必ず怠惰者だと思つてゐるんだからね。そして僕は組の中では可成よい成績だけけど、父は僕が五番か、六番より下れば、決して許さないんだもの。それぢやとても僕にや、遣つて行かれないよ。』

突然の叫聲——といはうか、それとも寧ろ恐れ怖えた叫びとでもいはうか——が、ラルフとマーテンとの話を中断してしまつた。二人は眼をあけて見やると、そこには息せき切つて全速力で二人の方に趨けてくるロード・グレナリンと、その後から——少し離れて——クリステイとが駆けてくる。そして二人とも大聲で叫んでゐる。

最初は、二人がなぜ逃げ出してくるのか一向に分らなかつたが、グレナリンは二人のすぐ傍にやつて來た時に喘ぎ喘ぎいつた。

『おゝ、逃げる。逃げる。逃げないと君達の生命にかかはるんだ!』

『何だつて、一體どうしたんだ?』ラルフとマーテンとは口を揃へて問ひかけた。

『ローバー(飼犬の名)が跳んでくるんだ。氣が狂つたんだ、氣が違つたんだ!』

それは一目で分つた。

二人の前方五十碼足らずの所を、道路に沿つて一直線にこちらへ向つて跳び乍ら、舌を突き出し、



両眼は血走り、毛皮は塵埃と涎とにまみれ、口には濃い泡を喰つ付けて、マーテンの愛犬ローバーが追つかけて来たのだ。發作的に起つた恐水病で吠え聲一つ立てないで、絶えず或る架空の敵に對つて喰ひつかうとしながら、そして時には發作的に矢庭に怒り狂ひ出しては吾と吾が身に噛みつくのである。然もそれでゐて、自分で自分に加へる痛みには全く意識を失つてゐるのだ。犬とは僅かに數歩の前を、可哀さうに、少年クリステイがかけてゐる。彼はロード・グレナリンより遙か後れたのである。眞青になつて、帽子もかぶらず——小さな天鵝製のスコッチ風の帽子は、とうに彼の美しい髪から脱けてしまつてゐたのだ——恐怖に戦く肢で、力もつき果てて走りながら、絶えず蹶いた。恐しい危険が一同の上を迫つてはるたが、ラルフは少しも心の落着を失はなかつた。天性の豪膽は早速に應急の手段を取つて誤らなかつた。

『待て、グレナリン君、待て。バットを僕に渡し給へ。』

併し、恐怖でももの見分けもつかなくなつたグレナリンは、早や驀進にラルフの前を駆け抜けてゐた。一瞬も猶豫せず、颯とラルフは跳び出してグレナリンの手からバットをもぎ取つた。そして直ぐ様、全速力で引き返して、危険に立ち對ひ、何如犠牲を拂つても弟を救はうとした。それこそ最も恐ろしい命賭の仕事だつた。けれどもラルフは両手にバットを高く振り翳してそこへ突つ立ち

上つた時は、びくともせず全く冷靜を感じてゐた。そしていつかりした明かな聲で叫んだ。

『横へそれちまへ、急に。急に曲れば犬は行き過ぎてしまふから。』

併しクリステイは、咄嗟の危険に氣を吞まれて、グレナリンの意氣地なさが傳染つてゐた。だからラルフの言葉が明かに彼の耳に、鳴響いてゐながら、全く膽を奪はれて、ラルフの言葉通りにすることは出来なかつた。怒り狂つた犬は今極く近くまで追ひせまつて来て、クリステイはその恐ろしい喘ぎを聞き、その火のやうな熱い呼吸をも感じた。そこですつかり駄目だと思つて、立ち止まり、よろ／＼とした。それと同時に一聲長く金切聲をたてると、全ての今迄閉ぢ込められてゐた心の苦痛と恐怖とは、とりのけられたやうにホツと樂になつた。彼はその狂犬の残忍な噛みつく音を聞き、又その鋭い歯が、わが脚に喰入るのを感じた。同時に何だか空氣をついてビューと音がした。途端に犬の唸り聲と、恐ろしい撃ち聲がして、丁度彼が苦痛と恐怖とで氣を失ひかゝつたとき自身の身體が、強い兩の腕で抱き上げられ、何處かへ連れ去られるのを感じた。

天から降つたともなく、地から湧いたともない此の唐突の事件は、書くのは中々大抵の事ではないが、實際には、一瞬をも要しなかつたのだ。マーテン・アラビイはラルフと同様、機敏に又勇敢にクリステイの援助に飛んで来た。そして狂犬が丁度犠牲者に飛びついた時に、マーテンは路を横



に跳んで来て、クリステイをその兩腕の中にいつかり抱き取つた。丁度それと同時に、ラルフは其處に突つ立つて、心を落ちつけ、待ちかまへて、目も眩惑する程の速さで、電光石火とバットを空に輪を描いて打ち落した。とクリツケットで、鍛へに鍛へた腕の牙は、ねらひ誤はず、畜生の頭に命中して、その頭蓋を打ち砕いてしまつた。そして犬は只最後の一吠えを残した儘ラルフの足元にその死骸を横たへたのである。

ラルフとアラビイとは、直ちに、彼等の遣つたことは成功して凡ての危険の域は脱してしまつた、といふことに気がついた。マーテンは道側の縁なす堤の上に、彼の兩腕に氣を失ひ弱り切つたクリステイを抱いて腰を下した。そしてラルフは、死が見舞つてから数秒の間、ビク／＼と痙攣を起してゐる狂犬の四肢には、一瞥もくれないで、熱情を籠めて、マーテンの身近にかけよつた。

「マーテン君、弟は大丈夫かね？ 僕がまだ打ち下す閑のないうちに、ローバーが噛みつく音をきいた——あ、見給へ！ 遅つた。」

ラルフは眼敏くクリステイの薄灰色の下袴についた数滴の血潮を見附けた時、かう叫んだのである。

二人は大急ぎでクリステイのズボンを捲くり、又靴下を脱がせて見ると、足の腓に二本の齒形が

残つてゐる。犬の齒が喰ひ入つたのは、僅か片側丈で、他の片側は、齒がズボンの厚い縫目にあたつたので、中まで通つてはゐない。二つの齒形は血を出させただけであつて、傷は極く上つ面だけに過ぎなかつたのだが、二人の少年は、僅かこれ丈の小さな齒傷も、その儘にすれば遂には、クリステイの命を取るかも知れないことを知つてゐた。さう思ふと、二人はブル／＼と身慄したが、ラルフは應急の手當が必要だと思ふと、忽ち氣を取りなほしていつた。

「マーテン君、急いで「居酒屋」へ擔いで行かう。手をかしてくれ給へ。五分とかゝらないで行けよ。」

「一寸待つてくれ給へ。それより前に、遣らなきやならない事があるんだ。」とマーテンはいつて、ラルフが弟の身體を支へてゐる間に、マーテンは衣囊から一筋の絲を取り出して、それで犬の噛みついたクリステイの脚の上部を、出来る丈強くく／＼つた。そして二人で可哀さうな少年の小づくりな身體を持ち上げると、二人は大急ぎで路傍の「居酒屋」を指してクリステイを擔いで行つた。身體を揺られたのでクリステイは我にかへると、兩眼を開けて、まだ怖えてゐる様に小さく噛くのであつた。

「犬は僕に噛みつきましたか。」



『いや、噛みつかなくつたといつても宜い位だ。』とラルフは快活な調子でいつておいて、

『只ね、ほんの一寸した磨り傷なんだ。もう居酒屋にやつて来た。それにしてもグレナリンはうちへ歸りつかないうちに、止まるか知らん。それから誰か援けの人を送つて呉れるか知らん。』

二人はクリステイを居酒屋の居間の寢臺に横臥した。そしてラルフは取るものも取りあへず大急ぎで、事件のあらましを宿の主婦に告げると、アラビーにいつた。

『此處へ来てくれ給へ、クリステイと一しよだね。マーテン君、お醫者のメースンさんはこゝから一哩と離れない所に住つてゐるんだから、僕はそこまで八分も立てば行かれる。そしてメースンさんの馬車に同乗して来れば、歸りはもつと早く来られる。』

『あ、行かないで下さい、兄さん。僕の傍にゐて下さい。』クリステイは熱心に小聲でいつた。

『ねえ、クリステイ、すぐ引き還して来るからねえ、マーテン君は僕だけに走れないんだから。それでなきや僕は行かないんだ。』

併しクリステイはしつかりラルフの手につかまつて、行かせようとはしなかつた。そこで病人には心の安靜が一番大切だと思つたから、ラルフは囁いた。

『走つて呉れ給へ。マーテン君、出来るだけ速く。僕はせがまれるからクリステイとこゝに残る

から。』

返事もしないで、マーテン・アラビーは投槍のやうに、愛情と恐怖とで翼でも生えた様な速さで出かけた。クリステイは青ざめた顔をして、身動きもしないで、兩腕をラルフの首にまきつけ、頭を兄の肩の上に置いて、横臥してゐた。



マーテンが出発するかしないに、フト或る考へがラルフの念頭に浮んだやうだつた。まづ彼等兄弟の周囲にベチャ／＼珍らしもの見たさに集つてゐる宿の主婦や召使共に、患者の爲には静寂にすることが一等大切だから、醫者がやつてくる迄は、彼と弟とだけを部屋に残して置く様に、頼んだ。そして一同が部屋から出て行くのを見ると、自分の肩から弟の頭をどけ、靜かに自分の首に巻きついてゐる弟の腕をほどくと、傷の繃帯を解いて、軽く、ボケット・ハンカチフを出して、血潮を拭ひ去つた。そして傷口のところへ身を屈めて行つた。丁度その時クリステイは驚いて兄の心持を讀んだので、全力を籠めて兄を突きつけた。

「兄さん。とんでもない、傷口を吸はうなんて思つちや不可ませんよ。並の毒ぢやないんですからね。若し兄さんの舌にほんの小さな搔り傷でもしてゐるものなら、毒はすぐ兄さんにも廻ります。どうか後生だからやめて下さい。」

彼は衰弱の爲、こらへかねてワツと泣き出しながら、

「兄さんがそんなことをなさるなら、兄さんは僕を殺すことになるのですよ。」

「ぢや、僕はどうすればいいのだ。お醫者は家にゐないかも知れん。來ても手遅れになるかも知れん。どうか傷口を吸はしておくれ。」

併し兄のその言葉は全くクリステイを悩まして、彼は再び喪神の狀態に陥りかゝつた。そこで激しい感情をそゝつて危険を増してはならないと思つたから、ラルフは慌て、罷めようといつた。その約束を聞いて、クリステイは安心して、そして元氣を取り戻すと、物靜かにいふのだつた。

「兄さん。僕はね狂犬にかゝつた時の手當をよく知つてゐます。僕は博物學の書物の中で讀んだんです。縫針か又臺所用の焼串かなんかを焼いて下さい。」

ラルフはすぐクリステイが云はうとする意味をさとつて、例の沈着さでそれにとりかかつた。彼は居間の戸を開けて主婦を呼んだ。

「お主婦さん。大急ぎで焼串を臺所の火で、眞赤になるまで焼いて下さい。いや、どうか何も云はないで、黙つて遣つて下さればいいんです。」

ラルフの態度が冷靜なので安心し、熱心に感染して、お主婦はラルフの頼み通りにしたが、間もなく鐵串が赤く焼けたことを知らせに歸つて來て、鐵串は眞赤に焼けましたと告げた。

「クリステイ、どれ程焼かなくつちやならないのか？」とラルフが聞くと、



「よく焼けてりや焼けてる程、痛みが少ないんですよ。白熱にして下さい。」とクリステイは囁いた。しばらく経つて、主婦はラルフにその焼串を持つて来たが、熱くない端には、布がぐる／＼巻きつけてある。最初ほんの僅かの時間に過ぎなかつたが、流石にラルフも死者のやうに蒼白に、たちちとなつた。

「クリステイ、嘘、痛いだらう。僕には逆も出来ない。僕はいやだ。」

クリステイは殆んど聞きとれない程に小さい聲で言つた。

「後生ですから——だつてよつほど宜いんですよ……」と言つたが、心の中に思つてゐる恐ろしい言葉を口に出すことは出来なかつた。

これを聞いてラルフは決心した。慄へもせず手もと確かに、弟の足を執つて、もう一度その血潮を拭ひとつた。そして柔らかくつまんで、傷口をはつきりさせて置き乍ら、物練れた手つきで、犬の歯がはひり込んだ深さまで、その先の尖つた焼串をさし入れ、二三秒間それを中で動かしまはしたのである。そして年老いた主婦が一言も發し得ず、驚嘆の念を以つて眺め入つてゐる間に、ラルフは前と少しも劣らぬ落着きを以つて、有効に今一つのをも充分に灼いた。

クリステイはその手術の間、顔の色こそ眞蒼になつてゐたが、決して叫び聲も立てなければ、又

呻り聲をも發しなかつた。虚弱な者が屢々堪へ得るあの覺悟の努力を以つて、クリステイは兩腕を握り、齒を喰ひしばつてこらへた。で凡ての作業が終つて、始めてほつと堪へ切れなくなつた安心のすすり泣きをして、全く力も盡き果てて、寢臺の上に横たはつた。ラルフもまた始めてはり切つた力を落して、自分の手から焼串を落してしまつた。そして弟の側に膝まづいて、例へば氣絶して動けなくなつた者のやうに、じつとしてゐたが、その間殆んど無意識的に涙が彼の顔を雨と流れ落ちた。

クリステイの方が先づ氣を取り直した。

「兄さん、元氣にして下さい。どうか泣かないで下さい。今の兄さんの療治で、もう危険はなくなつたと僕は信じてゐます。」

「本當に思つても恐ろしい。どうしてまた溫和しいお前の身に、こんな災難が降りかゝつたのだらう。不思議で堪らない。僕は自分の身に降りかゝつた方が、どれ位よいか分りやしない。」

クリステイは只ラルフの黒い頭髪を撫でさすつてゐたが、やがて口を開いた。

「僕はね、もう大丈夫だらうと思つてます。狂犬に噛まれたからといつて、毒が廻るとは限らないんですからね。僕が何故恐がらぬかといふことを、兄さんにお話したいんです。」



『何故だつて。』

『だつて、犬の齒は僕のズボンと靴下とを通つたんですから、毒はぬぐひ取られただらうと思ひます。だから僕は大丈夫と思つて元氣にしてゐたいんです。それによし神様が若し僕に災難をお與へなかつたとしても——』

彼は夢を追ふやうに云ひつづけて、こゝまで來ると言葉を止めた。併し兄のその後を聞きたけな顔色を見ると、

『併し神様はそれに耐へられるだけの力を與へて下さるでせう。』

『なんてマーテンの歸りは遅いんだらう。』とラルフはいつて、一寸言葉を切つた。

『メースンさんが留守だつたらう。どうか先生が來てくれ、ばい、が。』

『本當にねえ、一寸行つて、先生とマーテンさんが見えないか、見てくれませんか、兄さん。』

ラルフは部屋を出て路へ出て見た。静かな路上に轍の響が聞えないか、少くとも遠くに援けの人の足音が聞えないかと、熱心に聞耳を立てたのだが、森閑として何も聞えない。

其處でラルフは程遠からぬクリステイが噴まれた場所の方へ、路を駈けて行つた。すると、其處には塵埃にまみれて固く硬張つた、氣味悪い犬の死骸が横たはつてゐる。あれから半時間誰一人と

してここを通らなかつたと見える。側にクリツケットバットが轉がつて居たので、ラルフはそれの家へ持つて歸つて、ロードグレナリンに返さうと思つて拾ひ上げた。そして醫者の到着の餘りに遅いので、心を悩ましながら、宿屋に引きかへした。

部屋にはひつて行く前に、暫しの間は、立ち止まつて心を落ちつけ、ぢつと物音に聴き耳をたてた。その時彼の心臓は、繰り返し繰り返し、捧けられる黙禱に高鳴るのであつた。

『お、神様！ 吾が弟を救はせ給へ。彼を救はせ給へ。彼に襲ひかゝれる恐ろしき運命の手より彼を救はせ給へ！』

再び又再び、恰かも彼は神への祈願の言葉を代へるだに力のなかつたかの様に、同じことを繰り返し祈つた。

『お、彼を此の恐ろしき嚴肅なる死滅より救はせ給へ。』

その時冷酷な嚴格な聲で、ラルフのこの熱烈な無言の祈願を遮る人があつた、路を縁どつてゐる緑の草の上を、彼の父が反對の方角から、いつの間にか近づいてゐたのである、弟助けたさに夢中になつてゐたラルフは、己の名を呼ばれたのも聞えなかつた。

『おい、ラルフ、私は二遍もお前の名を呼んだのだ。それにお前は聞えなかつたのか、それとも聞



えない振をしてゐたのか？」

「御免下さい。ちつとも存じませんでした。」とラルフは驚きあわてて云つた。

「そりやさうだらうともさ。知つておつたとすりや、下等な居酒屋などの戸口で、私を待つてはられないからね。どうも事情を思ひあはせて見ると、お前は居酒屋とは可成りの顔馴染であるらしい。お前は今迄酒でも呑んでゐたんぢやないか？」

「僕は決して酒なんか呑んでゐたんぢやありませんよ、お父様。僕は生れてから一度も居酒屋なんかに入つたことはありません。」とラルフは答へたが、その聲の調子は怒りといはんよりは、寧ろ悲しみを帯びてゐた。先刻からどうしたら一番物優しく今の出来事を父に告げることが出来ようかと思ひめぐらしてゐたのである。

「それからお前は私の命令に逆らつて、クリケットをやつて居たのぢやないか？」

ダグラス氏は疑ひ深げな聲の調子になつて、ラルフの手にしたバットを指さし乍らかう聞くのであつた。

「いゝえ、」と答へたが、胸中の様々の情緒が面に現れてゐるのを見てとつた父は、ラルフの顔色や舉動の變つてゐるのを解釋して、事實を隠蔽してゐるためだと思つた。

「お前は屹度今迄酒を呑んでゐて、私に虚言を言つてゐるに違ひないのだ。お前のその顔つきが證據だ。お前の顔は現に赤くなつてゐるぢやないか。若しクリケットをやつたんぢやないのなら、バットは一體何に使つたんだ、而も、私が明瞭お前にクリケットを禁めたのは、まだ今朝の事ぢやないか。それに亦々やつたんだな。誰だつて、道を歩くのに散歩杖のかはりに、クリケットのバットなんか持つて行くものはありやしない。」

「お、お静かに、お父様。静かにして下さい、お父様は全く誤解してゐらつしやるんです。可哀さうにクリステイに聞こえろと不可ません。」

「何だ！」

ダグラス氏は怒にわななくと慄へながら叫んだ。

「クリステイも此處にゐるんだつて？クリステイを此處へつれ込んだのはお前に違ひない、それなのに「可哀さうにクリステイ」だつて、何故可哀さうなんだ。なに、クリステイを悪い方へ引き込んだのか、ラルフお前は私の目にかからない所へ行つてしまへ。お前はお父様の顔には泥を塗り、不幸をかけるんだ。」

といったが、彼は丁度手に持ち合はせてゐた乗馬用の鞭をふり上げると、それでもつてラルフの



肩を打つた。

瞬時の間はラルフは例へば麻痺させられたやうに佇立してゐたが、次の瞬間彼の兩眼は電光のやうに閃めき、怒りの言葉が口まで突き上つて來た。そして父が持つてゐる鞭を奪ひ取ると、それを垣根越しに投げやつてしまつた。それから先どんなことになるか分らなかつたが、そのとき、

『お父様。』といふ衰弱し切つた力ない叫び聲がその居酒屋の窓から聞えた。それを聞くと一種言ひ知らぬ苦しい恐怖の念が起つて、ラルフの行に對する憤怒も驚駭も打忘れて、ダグラス氏は居酒屋の中に向け込んだ。

クリステイは戸外の騒しさをきゝつけ、そしてその聲が彼の父の聲音だと知ると、父が何か誤つた推量をしたものと思つて、ハツと胸を打たれた。ダグラス氏は部屋にはひつて來た時、恰も死せるもののやうに力もつき果ててぐつたりとなつて黙りこみ、蒼白になつて寢臺に横たはつてゐる吾が子を見ると、吃驚してしまつた。

それと同時に、メースン醫師、ヘンリー卿、そしてマーテンの三人連れが部屋にはひつて來た。ヘンリー卿は息子のマーテンと村でばつたり出合つたのであつたが、言葉少なに大急ぎで恐ろしい事件の真相をダグラス氏に告げ、その間に醫師は急いで病人の手當をした。

『一體誰が此の傷口を灼いたんですか。』と醫師は口早に尋ねた。

その間に答へられる者は、宿の主婦だけだつたが、事實をいつては悪いと思つたのであらう、何かとどくと言葉を濁してゐたので、醫師は、

『さつさと一口に言つて下さい。ねお主婦さん。誰かが金を灼いて傷口を灼いたんでせう。誰ですか、その人は？』

『へえ、貴方、私は言ひつけられないことをした譯ぢや御座んせんので、私は觸りもしませんでした。』

『お灼きなさいましたのは、ラルフ・ダグラスさまですよ。』とこの酒場女の一人が有りの儘にいつた。この女は女將の様に多辯をしなかつた。

『さうですか。いや、犬に立ちむかつて、犬を殺したのもラルフさんだ。さうして弟さんの生命はいふに及ばず、大勢の生命まで救つたんです。ラルフさんは本當にえらい、男らしい青年だ。』

彼は熱心になつて話しながら、その傷口に布をかぶせ繻帶をし切めた。

『それといひ、此の傷口の手當といひ、誰だつてこれ以上出来るものぢやありませんよ。醫者の私でさへこれ以上にうまく、充分に遣ふことは逆も出来ません。それも私が都合よく衣囊に硝酸銀



でも持ち合はせて居れば格別、いや、これで大丈夫、弟さんの生命を取りとめることは出来ませう。もう何も心配は起らないで済みませう。」

「何處にゐるんだらう、ラルフさんは。たつた今戸外に立つてゐたんぢやないか。」

ヘンリー・アラビー卿は尋ねた。

「皆は四邊を見廻した。併し彼は其處に姿を見せなかつた。そこでマーテンは彼を探しに戸外に出て行つたが、失望しきつて、遠くの曲り角を曲つて本道から脇道へさつさと外れて行くラルフの姿を見た。ラルフは父と別れてから暫しの間は、そこに立ちつくしてゐたが、憤りの爲に胸をどきどきさせ乍ら、萬感が交々に胸の中で相争ふのである。併し間もなく平穩な心持になつた。クリステイの介抱は今心配はない。自分が去つても差支へはない。併し此の聞くも恐ろしい事件は、彼の母に知らせなければならなかつたし、又その告げ方が、彼女の心を出来る丈強く刺戟せず、動亂させない様な風になければならなかつたのだ。それにはラルフは、誰よりも自分が一番適任だと考へて來ると、慈愛と同情とが胸に湧き起つて來て、世の中には、自分を愛して呉れる人々のあることを神に感謝した。家に歸りつくすつと前に、憤怒の念は全く掻き消えて居た。そして残るものは、悲哀と希望ばかりだつた。」

酒場女から細かいことを聞くにつけて、醫者やヘンリー卿の感歎の念は益々高まつた。

「どうです。こんな立派な青年は、一萬人に一人とは御座いませんでせうね。」

メースン醫師は感じ入つてかう叫ぶと、一段と聲を落して、ダグラス氏の方を一種の腹立たしい眼つきで見遣りながら、つけ加へていふには、

「ねえ、御子息はもつと柔しく、もつと合理の分つた取扱をなさる價値はありますねえ。」

醫師とヘンリー卿とが大急ぎで、此處へやつて來た時、ダグラス氏とその長男のラルフとが不幸な口論を交はして居たのを、奇異の感じで見居たから、かう言つたのである。

併しダグラス氏はクリステイの傍に、落膽と悲哀との標本とでもいひたい様に、默然として、心は亂れてゐた。そして失神してゐるクリステイを蘇生させようとして一心に介抱した。

「氣持はどうかね。」

クリステイが眼を開けて、周圍を見廻し乍ら、次第に事情が分つて來た時に、ダグラス氏はかう聞いた。

「お父様、僕は氣分は可成いいんです。たゞ少し吃驚したただけなんです。兄さんは何處にゐますか。」  
クリステイは心を痛めて尋ねるのであつた。



「僕は、お父様が兄さんに怒つたやうな口振で何かいつてらつしやるのを聞いたやうです。それで私は驚いたのです。」

「兄さんはもう家へお歸りです。屹度君のお母さまに知らせるつもりで歸つたんでせう。」とマーテン・アラビーがいつた。

「それで安心しました。兄さんなら大丈夫です。兄さんの話振のやうに、人に力を附けることが出来れば、お母さまも、それを聞いて落膽なさることはありませんでせう。それに僕はもう大丈夫なんです。勿論灼き跡が少しは痛みますが、只それだけなんです。そしてマーテンさん、あれから僕はまだお禮を云ひませんでした。御自分の危いことを忘れて助けて下さつた、本當に有難う。一生忘れません。そして兄さんは、僕が愛しても愛しても愛し切れない位です。」

「そんなに口を利いては不可ません。」とメースン醫師は優しく云つて、

「今は少し休むのが一番いいんです。ダグラスさん、貴方はすぐ馬車をお命じになつて、御子様をお家で靜かに寝かせて、安心してゐらつしやるがいいでせう。それからクリステイさん、嚙まれたことなんか考へるんぢやありませんよ。もう心配することはありません。貴方はどんなことがあつたつてもう大丈夫なんです。何かもつと大それた災難が、貴方に振りかゝつてくれれば兎も角

ね。狂犬の齒が下袴と靴下とを透したといふことだけで、多分貴方の生命は助かつたでせうと思ひますが、若しさうでないにしても、ラルフさんのこのうまい手術で助かつたでせう。此の手術で駄目といふなら、駄目でないものはありません。」

「先生、有難う御座います。もう心配はしません。神様が私をあはれんで下さるでせう。私は出来る丈早く今度のことは忘れませう。たゞマーテンさんと兄さんとに御恩を受けたことだけは忘れませぬ。いろいろと皆さんから親切にして下さつて、本當に有難う御座います。」

「神様が貴方を恵んで下さいますよ。ね、神様が、誰だつて貴方に親切にせずにはゐられないんですよ。」と醫者は胸に銘へてかういつたが、更に言葉を續けた。

「明日はお家をお尋ねしませう。何、これといふ理由も何もないんだけどね。只貴方に又あつて見たさと、ラルフさんに、私等があの人遣つた行について全く感服の外ないといふことを話さうと思つてゐる丈のことですよ。」

醫者はダグラス民に四角張つて腰を屈けると辭して行つた。すると間もなく、ダグラス家の馬車が戸口にゴロ／＼とはいつて來た。それは彼等の望をかなへる爲に、魔術によつて遣つて來たやうだつたが、而し事實は、考へ深いラルフが送つてよこしたのである。彼が家にかへつて母に逢はな



い前に、厩の方に廻つて行つて、御者に命じたのであつた。

クリステイは馬車の中へ抱き入れられた。そしてマーテンは、出来る丈クリステイを樂にさせる爲に、枕や蒲團を直したが、ダグラス氏は跡に居のこつて、宿の主婦に面倒をかけたお禮を支拂つた。

「ダグラスさん、失禮します。」と、ヘンリーアラビイ卿は冷やかな調子でいつたが、

「此の御不幸に、私は心から御同情を致します。だが、貴方は實に子供運のいい方ですよ。クリステイさんの怪我はもう少しも心配なさるには及びませんでせう。兎に角ラルフさんのやうな息子を持つ親は、誰だつてそれを自慢にしたつて宜いと思ひます。誠に無遠慮なお尋ねですが、私等がここへ遣つて来た時に、一體どんな事で、御子さんは貴方の御機嫌を損じたのですか、お話し下さいませんか。」

「いや誤解です。」ダグラス氏は持つて生れた自負心が燃え上つて来て、高ぶつた態度で云ふのだつた。

「それからヘンリーさん、失禮ですが、私の家のことは、どなたからも、噂を容れて貰ひたくないんですが、あのラルフは何時でも、父親に自分の悪い方面ばかりを見せつけるやうです。」

「子の悪いのは父のせいだ。」とヘンリー卿は殆んど口の中でいひ乍ら、ダグラス氏に挨拶すると、吾が子のマーテンを呼んで一しよに家路についた。

途中二人の親子は、蠅の群が黒くなつて、犬の死骸のあたりをうるさく飛び廻つてゐるところを通りかゝつた。

「犬も可哀さうに！ 永年飼つた末、こんなにならうとは思はなかつた。」とマーテンは言つた。

「氣が狂ふ前に何か變つた様子はなかつたかい。」とヘンリー卿は云つた。

「ローバーは昨夜一晩ちう寝なかつたんですよ。そして足で自分の齒を掻きづめにしてゐたんです。だから僕は骨でも齒にさゝつてゐるのかと思つたんです。そして今朝僕は犬が木の枝を吞まう呑まうとしてゐて、少し變だなと思ひました。だけでもね、平常からどちらかといへば風變りな犬だつたし、永い間僕の友達として一しよに遊んだんですから、狂犬にならうなんて、夢にも思はなかつたのです。」

「私が見なかつたのが残念だ。狂犬になりかゝつてゐるなといふことは、すぐさま知ることが出来るんだらうにねえ。そしてすぐ打ち殺させたらうにね。併し出来たことは仕方がない。お前があの狂犬にたちむかつて、クリステイさんを助けたことは、本當に見上げたことだ。」



「クリステイ君は可哀さうです。ラルフ君がクリステイ君に曲れ曲れといったんですよ。だけでも、僕は、クリステイ君は怯えて曲ることは出来ないと思つたのです。それに狂犬は滅多に外へ曲らないことを知つてゐたので、僕は飛出してクリステイ君を救はうと思つたのでした。」

「お前のお父さまは、お前がさうしたことを誇らしく思つてゐるのだ。」

「有難う御座います。」といつてマーテンは父の手を握りしめながら、

「だけでも僕のやつたことなんか何でもありません。ラルフ君の行を見て頂きたかつたのです。本當にラルフ君は豪いんです。はじめにグレナリン君のバットをもぎ取つたんですが、ウィツケットの前で低い球を打つとしても、とてもあれ以上に落ちついてゐることは出来なかつたでせう。ローバーなんか、ウィツケットの前に立つラルフ君にかゝつちや、勝つ見込は少しも無いんです。」

## 九

ダグラス氏は馬車に乗つてクリステイの側に坐つた。二人の心はめい／＼異つた感情にひたされてゐて、一時は二人とも黙りこんで、物を言はなかつた。クリステイはいろ／＼と運命の手をくゞり抜けて來た爲に、全く身も心も疲れ果てゝ居た。ダグラス氏も心は甚く動亂を感じて、クリステイに話しかけず安靜にさせて置くことが第一と思つた。で、二人は沈黙のうちに馬を驅つたが、遂にクリステイは父の手のうちに、己の小さな冷たい手を滑り込ませて、おど／＼した聲でいひ出した。「お父様は兄さんに優しくしてお上げなさいませうね。兄さんはあんなに立派な働きをして下さつたのですから。」

ダグラス氏はその言葉がグツと胸にこたへたのである。どこへ行つても、何を考へても、誰に話しかけても、誰でも、あらゆる人々がまるで腹を合はせて自分の長子に對する仕打が残酷だとか、苛酷だとか云つて批難するやうに思はれた。一向氣には止めなかつたが、メースン醫師の小嘯いた言葉も聞き、ヘンリー・アラビイ卿のまるで大つ平にも近いやうな譴責をも聞いた。そこへ又今クリステイが、それとおなじ印象をもつてゐるらしいことを云ひ出したので、ダグラス氏はムラ／＼と



憤りの念が起つたのであるが、いたいけな吾が子の手が自分の手の中でワナ／＼震へてゐるのに  
氣がついた時に、漸く怒りの情を抑へつけることが出来た。

「私はお前達を不親切に取扱つたことがあるかい。」

「私にはちつともありません。だけれど——」クリステイは言ひ淀んだ。

クリステイが黙つたのでダグラス氏はいつた。

「兄さんにだつて決してないよ。たゞお前はまだ年がいかないから、必要な、いらしめと不親切といふものの差別が分らないんだよ。お前はもうそんなことを二度と口にしてはいけぬ。」

クリステイは深い溜息を吐いたが、それ以上口を利かなかつた。それから馬車が家へつくまでの間、クリステイは無言の儘身ゆるぎ一つしないので、心は深い憂に閉ざされてゐた。

馬車はやがてダグラス邸に着いた。喜怒哀樂の激しい感情が、表に出るのを嫌ふダグラス氏は、召使等にいろ／＼と命令ながら、中へはひり兼ねてゐるが、クリステイはびつ／＼を引き／＼客間まで行つた。其處にはラルフと母とが、彼の歸りを待つてゐた。彼女は部屋の入口まで飛出して、クリステイを迎へ、兩腕にだき上げて接吻した。彼女はこんなに激しくこみ上げてくる感情を、抑へることは出来なかつたが、しばしの後には、何とかして憂はしい心持から息子の注意を外へ外らさ

うと、訝え／＼とした晴れやかな態度をとつた。

「お母様はもうすっかり御存知でせうね。」とクリステイは尋ねた。

「え、すっかり聞きました。そんなことを考へて心配をしてはいけぬんですよ。兄さんがね、それは物靜かに私にお話してくれたものですからね。私はちつとも驚いたりなどしないんですよ。ですから、私はもうお前は何の危険も起るまいと思つてゐるんですよ。」

「若しお母様が兄さんの振舞を御覽になつたら、それこそお母様は兄さんのことをどんなに誇らしくお思ひになつたでせう。」

「なあに、お前が私だつたとすればやはり同じことはやつて呉れたにちがひないよ。なあに、ローバーの頭がクリツケットの球で、そしてお前がウィツケットだと想像してゐただけのことさ。」とラルフはいつた。

クリステイは、かうした兄を持つたことを誇るやうな嬉しい様子で、やがて二人は開けられた窓のそばに腰を下ろした。

「お母様、お池の島でお茶を頂けませんか。」とクリステイがいつた。

「あゝそれがよう御座んすね。ラルフさんは私達を乗せて漕いで下さいね。」と彼女は答へた。



彼等は島の上では、皆本當に幸福だつた。併し水に映る夜の星影の輝かしい反射が、彼等に家へ歸るべき時だと警告を與へ、とりわけ、冷やかな露が、クリステイを戦慄はせ始めたので、三人は家へかへつて、また客間にはいつた。ダグラス夫人は非常に清らかな美しい聲の持主だつたが、二人の子供等の一番好きな、極くあどけない、元氣のいゝ歌や小唄等をいくつか、兄弟の爲に歌つたのである。

ラルフの心持は屢々次の問題に彷徨ふのであつた――

「お父様は、今日僕がやつたことを氣にとめて下さるだらうか。事實を悉しくお聞きになつたのだから、自分の行を賞めて下さるだらうか。いや、僕は、僕はお父様から賞めてなんか貰はなくともいゝ。たゞ僕をお打ちになつたことを濟まないと思つて下さるだらうか。僕を不當にお疑ひになつたことは、お認め下さるだらうか。」

ラルフは父がさう氣づいてゐて呉れ、ば宜いと心から願ふのであつた。

一方ダグラス氏は、新聞に出す爲に猛烈を極めた不公平な自分の議論の原稿を校正してはるたものの、矢張父子の關係に就て、夜通し思ひわづらつてゐた。而し彼の思ひは、息子のそれとはずつと違つた型を持つたものだつた。一體立派な廣い心の人だといふ最もよい證據は、その人が堪忍深

く、謙遜であつて、自分の誤謬缺點は潔く認める自由な淡泊な態度である。此に反して剛愎で自分の權利を主張する念が熾んに、いつでも自分は完全無缺で、他人が悪いのだと思つてゐるやうな心は、決して前にいつた高尚な眞摯な性質とは、兩立することは出来ないものである。

さて、ダグラス氏は自分の頑固な性情と自負心とを長年助長し來つたのであつて、彼の心に起つた問はかうであつた。

「子供風情に頭を下げるなんて不見識なことが出来るか。而も自分の子供に對つて詫びるなんていふことが出来るか。鞭で彼を打つたことは勿論濟まないと思つてゐるが、實際あの場合、あんな變な様子を子供がするのを見たら、誰だつて屹度私と同じ態度に出るだらう。それに私から鞭をもぎ取つて、それを投げ棄て、しまつたあの亂暴と、親に楯をついた仕打とは忘れることは出来ない。」

かうした考へが、ダグラス氏の心の中を、その夜中引つきりなしに動いてゐた。而し流石にかうした考へが正しいとは、自分に確信することは出来なかつた。だから彼が立つて客間へ行かうと思つたときにも、まだ自分はいかにすればいいか、どういへばいいかといふことについて、氣迷してゐたのである。かうした場合にはよく誰でもあることだが、特にダグラス氏は、その場の感情で心を定めてしまつた。



といふのは、彼が客間にはひつて行つた時、妻と二人の息子とは、尙黄昏の中に燈火をつけず、窓際へソーフアを引寄せてゐたが、そこからは芝生と庭園とを眺めることが出来る。クリステイは頭を母の膝の上にもたせて、凭臺に休んでゐる。ラルフは彼女の側に、低い臺の上に腰を下して、空を見下げながら、母の歌聲に聴耳をそばだてゝゐる。彼女の歌聲は夫がはひつて來たので、歌の中途でばつたり止んだ。そして全く無意識的に起つたのではあるが、外目には態としたやうに見える沈黙が起つた。

その場面のすべては、ダグラス氏の氣にひどく障る或ものがあつた。みんなが楽しい團樂から、自分をのけ者にしようと思つてゐるのだ、と想像した。自分は此の席には、邪魔物であつて、みんなから來なければよいと思はれてゐるのだ、その上いまくしいことには、皆がそれを隠さうとさへせず、自分にあてつけに黙つてゐるのだと、想像した。

「さうだ。お前達は私を馬鹿にして、相手にするに足らないと思つてゐるのだらう。それとも亦、お前達は皆今夜に限つて、機嫌が悪いのだらう。」

併し事實は、三人ともに各自が何か切り出さうと思つてゐる矢先に、ダグラス氏はかう觀てとつてしまつたのだ。

「クリステイは非常疲かれてゐるんですよ。」とダグラス夫人は、その瞬間、他によい言葉も思ひ浮ばなかつたのでにう言つた。

「ふふん、そりや當り前さ。可哀さうに。それはまだ此の時刻になつて、寢床に靜かに寢かせて置かないなんて、どうしたのだ。それとも皆でこんな暗の中に、坐り込んでなくちやならない理由でもあるのか？」

「ラルフさん、燈火をつけるやうに、電鈴を鳴らして頂戴」とダグラス夫人は云つた。

「それに私はこんな所に凭臺を引張り出すのは嫌ひだ。すべて道具はきまつたところへ置いてないと不檢束に見えて、不快なものだ。」

他にもつといけない癖がある上に、ダグラス氏は、非常にやかましい、こせつきの癖があつた。

「動かないでいよよ、クリステイ。お前はその儘で起きなくつたつて、僕が凭臺を元のところへ動かすからね。」とラルフがいつた。

皆が急いで取りかたづけてゐる間に、ダグラス氏はじつとそこに立ちつくしてゐたが、燈火が部屋に持ち込まれた時に、その日の午後居酒屋の一件以來、一度も顔を合はせなかつたラルフと、初めて鼻をつき合はせたのである。この對面は打解けない堅苦しい對面だつた。といふのは、ダグ



ラス氏にとつては、意識的にしろ、無意識的にしろ、此の部屋にはいつて来てから、自分の云つた事は、皆の心へ冷酷に、不満に、そして同情のない言葉に響いてゐたといふことを感じないわけには行かなかつたから。そして又非常に幸福さうに坐つてゐた静かな三人の平和に満ちた氣分を、自分が打ち壊したいといふことも考へないではゐられなかつた。かうしたことが彼を腹立たせ、そして不満に感じさせたが、その心持が自然とダグラス氏の眼に現はれてゐた。二人の視線と視線とがじり／＼と見つめ合つたと思ふと、ダグラス氏は、ラルフの表情を見て、たゞ己を侮つてゐるものと想像したものか、一言をも語らないで、脇を向いたが、その素振には、立腹と輕侮の情が現はれてゐた。

三人の間にはそれから殆んど何事も起らなかつた。三人が冷やかに「お休みなさい」を残して別れると、ダグラス氏はラルフに對して、絶對服従をこれ迄にも増してやかましく強ひようと決心した。ラルフはまた父といふ源泉から、誠ある同情を受けることは、逆も望まれないといふ諦めをますます強めたのである。彼は父から段々と深く離れて行つた始は、此の晩からだといふことを常に言つてゐたが、父子のこの疎隔の感じは、最早や隱匿をも希望をも許さない状態となつた。

+

その次の一日二日は何といふこともなく靜かに過ぎた。クリステイの容體にはその後別に悪い結果はあらはれないで済んだ。そしてラルフは、弟の氣を晴らし樂しませるやうにといろ／＼と盡すことを樂みにしてゐた。兄弟は朝から晩まで一しよにゐたので、二人は父親と會ふことは殆んどなかつた。といふのが、父親は長男と一しよになることを、避けよう／＼と努めたからである。

ラルフが少し意外に思つたのは、あれから試合のことを一向聞かないのと、グレナリンが少しも訪ねて來ないことだつた。せめてクリステイの見舞に來る位の親切はあつてもよささうだと思つたのだが、併し實際のところは、すでにお話した通り、若い子爵は、大切な、危機一髪の場合に、狼狽したのであるが、もと／＼生れつきは決して臆病者ではなかつたのだ。自分が一目散に遁け出した話をするのを、少しく恥づるところもあつたので、さうした關係上一日二日の間は顔を出すことを避けてゐたのだ。試合のことは大舟に乗り込んだ氣で、試合に必要な準備を備へながら、常にラルフをばバブリックススクール側の選手になることを誓つたものと確信してゐた。

その試合は水曜日に行はれる筈であつたので、日曜日になると、ロード・グレナリンはダグラス



邸を訪ねて来た。その時ラルフは一人で池を漕ぎ廻つてゐるときだつた。そしてクリステイは池の島で、深く書物に読み耽つてゐた。ラルフはグレナリンを見とめると、岸の方に舟を漕ぎよせ、そして走つて行つてグレナリンを迎へた。

「やあ、グレナリン君、一週間程逢はなかつたね——クリステイのあの災難からこちらへ——」

「いや、ラルフ君、クリステイ君の遭難のことについては、どうか僕を咎めかけないで呉れ給へ。僕が、その後の様子さへ聞かないと思ふだらうが、僕はお醫者に逢ふ度に、容體を尋ねてたんですよ。そしていつも経過が大變よいことを聞かされてゐます。——實際のところ、全くもういゝんで何にも心配することは要らないつて聞いてるんですよ。」

「どうも有難う。」

「おい、ラルフ君、皮肉らないで呉れ給へ。そしてそんなに冷やかな態度を見せないで呉れ給へ。先日僕が逃げたのを、恐ろしい卑怯だと君は思つてゐるだらうし、また、實際僕は卑怯だつた。僕は自分乍ら、恥ぢ入つてゐるんだ。併し僕は正直正銘の卑怯者ぢやないんだよ。僕は學校にゐる時に僕よりは體の大きいものや、年をとつた奴等と喧嘩したことがあつて、危険が自分の身に迫つてゐるのを知つても、僕はそれにビクともしなかつた。併し先達は全く不意打を喰つたんだ。僕は駈け

て行つて援けの者を出す積りだつたのを、どうしたことか、畑の中で道を迷つてしまつたんだよ。」

言譯の言葉が非常に無理がなくなつて、見たところ淡泊で包み隠しもないやうで、上機嫌で述べたので、ラルフはすつかりその態度に動かされてしまつた。實際のところ、誰だつて、グレナリンが人の心を捕へようとする時、その魅力ある態度に動かされないものは無い。ラルフはマーテンを敬愛するやうには、グレナリンを敬愛することは出来なかつたが、グレナリンと交はることは、いつも好んだのである。そしてグレナリンが持つてゐるらしい數多い外面的の長所に強く引きつけられるのを感じてゐた。

「有難う。ラルフ君。君は僕を許して呉れたと思ひます。クリステイ君も僕を許して呉れるでせう。きつと、僕等は一しよに逃げ出したんだもの。どうです、容體は？」

グレナリンはラルフの顔が、微笑みに和らいて行くのを見守り乍らいつた。

「有難う。もうすつかりいゝやうだ。クリステイを呼ぼうか。島にゐるんだ。」

「さう、逢ひたいねえ。あゝ、一寸待つて呉れ給へ。水曜日にやる試合のことについて君と話したいんだから。いよゝ僕のうち庭でやることになつたんだ。そして僕はね、その時に使ふ爲の素的なテントと御馳走とを、僕のうちから出すやうに注文したんだ。お父様はね、僕に萬事好きなや



うにさせて下さつたから、僕は本當に最善をつくしたんだ。」

「君のお父様は本當に親切な方だねえ。」とラルフがいふ。

「さうだよ。だけれどもね。僕はお父様を容易く思ふ通りに動かすことが出来るんだよ。一つはお父様は、いつでも派手なことを遣るのが好きでね。出来るなら此の地方の評判にでもしたいんだよ。又お父様は許さんとか許すとか争ふやうなことは嫌ひだから、大抵は僕の仕度い放題にさせて下さるんだ。また願事をするには、いつもお父様の急しい様な時とか、上機嫌の場合を狙つて下さるんだ。お父様は面倒を避けるために、屹度「よろしい」と言ふんだよ。」

「オックスフォード組はよい選手を出すつもりだらうか。」

「第一選手だつてさ。そのうちの二人はケンブリッジとの試合に出たんださうだ。大試合になると思ふね。新聞紙も書き立てゝゐるよ。」

「ほんとに面白いだらう、君等は。」とラルフがいつた。

「君等はだつて——僕等はつていふところだらうねえ。勿論君は出る心意なんだらう。」

「僕は出来ないと思つてるよ。」

「おい、冗戯ぢやないよ。君の名前は、こゝの新聞は勿論、もう一つの他の新聞にも載せられて、

遣ることになつてるんだ。僕は二つの新聞に試合のことを知らせてやつたんだ。」

「そりや僕の知つたことぢやないよ。それにマーテン君は従兄弟のボーモント君を連れて行く心意でゐるから、その人が僕の代りにやつて呉れるだらうよ。」

「そんなら、立派な補缺だよ。まあ四點やそこいら得られることは受合だ。併し僕等は君に少くとも四十點を望んでるんだ。どうしたつていふんだ。今週の新聞には、君は英國に於ける將來最も有望な若手の選手の一人だといつてるのを知つてるのか。」

ラルフはかうした權威からの、かくまでの賞讃を聞いては、嬉しさに顔が赤くなつた。彼は試合に出たくて堪らないのであつたけれど、黙り込んでしまつて足先で砂利を蹴つてる。

「君は君のお父様のことを氣にしてるんだね。」

ロード・グレナリンは少し輕蔑するやうな口調になつていつた。

「たとへお父様が君をほけしくお叱りなさつたつて、今度丈は、試合をやる價値はあるよ。」

彼は熱心に又つけ加へた。

「それに、ラルフ君、實は君はお父様に見つかるのを恐がつてゐるが、それは無用だよ。僕は偶然知つた譯なんだが、何か大切な事件で、此の水曜日に長官會議があるんだよ。君のお父様も行か



なくつちやならないんだよ。僕の父も君のお父様と一しよに馬に乗つて行くんださうだ。だから、君のお父様は試合が済むまでは歸らないだらうぢやないか。そして君にしたつて早く場を歸つて行くことが出来るんだから。」

そんな風に誘惑者は説いたが、ラルフは立派な性格の持主であつて、たゞ見つけられないだらうといふくらゐで、悪いことを爲るようなことは決してなかつた。

「僕はね。叱られることを恐れてるんぢやないよ。それから若し出るにしても逃げまはつて見付からないやうにとしたりなどはしないよ。けどもね。僕は正しくない事を爲たくないんだ。」とラルフは静かに答へた。

『フューウーウーウ。』

グレナリンは口笛を長く引つ張つた。そして何か口の中でつぶやいたがその中に、『恐ろしく孝行者だ。』

といふ言葉だけ、漸く聞きとれた。一寸言葉をきつた後彼は寧ろ威丈高になつていつた。

『いよ、ダグラス君。君は少し卑怯だよ。君は試合に出ると僕に約束し、出ることに披露され、僕等も亦君を頼りにしてゐたんだ。それだから若し君が約束を履行しないとなれば、試合の興味を

殺ぐことは勿論、僕等は試合に負かされるんだ。』

「僕は君に約束はしなかつたよ。何といつたか自分の言葉は忘れたが、僕は確にやるとは約束しなかつた積りだ。僕は出たくつて堪らないのを出ないのだ……」

彼が言はうとした理由はダグラス氏が近づいて来たので途切れてしまつた。ダグラス氏の顔色はこのうへもない陰鬱に溢面の一つだつた。彼は今まで地方新聞の紙上で、クリステイの遭難の記事を読んでゐたのだ。記事は特にラルフの賞讃に力瘤をいれてゐたし、又その記事は、或る種の田舎新聞によくあるやうな無責任な態度で、ダグラス氏に腹いせをする機会を捉へたのであつて、此の新聞の編輯者は、ダグラス氏に對しては、個人的にも亦政治的にも、或る意恨を前から持つてゐたのだ。だからその記事は次の様に結んである。

「いま記した如き立派な行爲を有した年若い紳士は、家にあつて、並外れた苛酷な取扱を受けてゐるので、噂によれば、今度のオックスフォードと、バブリック・スクールとのクリケットの試合にも、出場することを止められてゐるとのことである。而もそのマッチの爲に、ドネリル伯爵は例によつて寛大にも、その立派な庭園を、公衆の爲に解放せらるゝ筈である。前記の青年紳士は非常に勝れた選手だといふことは、他の欄に載せた先達のアルトン俱樂部との試合の記事で御覽の通りで



ある。かうした譯だから、前記の風説は事實に相違してゐることを望む。いや多分は無根の風説だと思はれるのは、ある有名な新聞が此度の試合に出る選手の名を載せてゐる表の中に、青年紳士の名が見えるからである。』

ダグラス氏はその記事の初めの方を讀んだとき、胸が悪くなるほどの氣持がした。それによるとメースン醫師は居酒屋の一件に就て、口をつぐんでゐなかつたことは明かであつた。此の記事を見ながら、一行々々毎に氏の憤激は高まつて行つた。そして彼は記事を讀み終ると、新聞を卓の下に擲きつけて、踵でそれをふみにちつた。

この憤激はたゞダグラス氏にこれ迄よりは一層きびしくラルフの服従を要求する決心を固めさせたのであるが、併し此の度の試合については、いかにラルフでもよもや自分の意に叛き、自分の許をも得ないでやるやうなことはなからうと思つた。それで新聞にラルフが出場するやうに書いてあるのは、無根の風説に違ひないと思つたが、併しラルフの服従を試めて見ようとする考が、突然頭に浮んで來た。それに前にいつたやうにひどく腹が立つてゐる際なので、前後の考もなく矢庭にそれを試めて見た。

『や、グレナリンさん。』

彼は子供等のところへ來ると言葉をかけた。

『ラルフ。』

『何ですか、お父様。』

『私の鞭をとつて來て貰ひたいのだ。』

『はい、廊下にあるのならどれでもいい、んで御座いませう。』

『いや、いけない。私がいづも使ふのが入用なのだよ。一寸考へりや、それが何處にある位のことを思ひ出すのは何でもないことなのだ。』

その時のダグラス氏の冷やかな、人を馬鹿にした物言ひ振りには、普通の何でもない時でも不快の感を抱かせたらうに、況して場合が場合であつたので、たまらなく聞き手の腹を割つたのである。ダグラス氏は自分の言葉がどんな影響を息子に與へたかを、止まつて見ようとはしないで、どんどん歩いて行つた。只ちよつと振り返つて、

『直ぐ取つて來ておくれ。』といつた。

ラルフは一言の返答もなく、父の後を眺めやつて、ムラ／＼と起る憤激の念と戦つたが、全力をつくしてそれを胸の奥に押し下けて了ふことは殆んど出來ぬくらゐであつた。その爲、顔の色も蒼



ざめたが、漸くそれを鎮める事が出来た。そしてグレナリンに話しかけた時には、非常に物靜かに次の様にいふのであつた。

「グレナリン君、僕は先まで試合には出ないと決心してゐたんだ。併し今は僕の心は變つてしまつた。僕は水曜にはどうしてもやつて見せるよ。僕は今君に約束する。僕は前には約束しなかつたんだけれど、僕はその邊まであの「大切な鞭」をとりに行かなければならない。丁度二志半の。君の歸りを途中まで一しよに行かう。」

それからラルフは發作的にしよけ返つて、黙り込んでしまつた。そして陽氣なグレナリンがいくら彼の氣を引き立てようと努めても、駄目であつた。

## 十一

マーテン・アラビイは次の日の朝、ラルフが父の許を得て選手の一人として出場するようになつたかどうかを知りたいし、若しさうだとすれば、彼と一しよに試合にも出かけようと、ラルフを訪ねた。

彼は、クリステイが書物を手にして楡の木蔭の芝生に腰を下ろしてゐるのを見た。そこでクリステイの容體を優しく尋ねてから、訪ねて來た理由を話した。クリステイはその試合のことを聞くと驚いた。といふのは、ラルフは弟に心配をかけまいと思つて、黙つてその朝、他人に見られないやうに家を抜け出してしまつたからである。

「君のお父様は試合をやつてもよいと、ラルフ君にお許しになつたんですか。」とマーテンは尋ねた。

「いゝえ、たしかお許しにはならないでせう。若しもお許しが出たなら、兄さんは直ぐにも僕に話して下さるでせうから。困りましたね、兄さんがいらしたんでは。氣の毒に、兄さんはいつでも何か彼にか困つたことを仕出かしてゐますが、本當に兄さん位、善い人にはありませんよ。」

「さうです。いゝ男です。僕が誰よりも君の兄さんが好きだといふことを君も知つてゐるでせう。さ



うだ。僕は後を追つかけて行かう。もう仕合に出るのを引止めるには間に合はないだらうけれど。だが、僕は面白くないだらうよ。君のお父様がいらしつて見つけやしまいか心配でたまらないだらう。」

「本當にお父様に見つからなければいゝんですが。」

クリステイは心配さうに尙言葉を續けていつた。

「マーテンさん。行つて、若しお父様が見えても、兄さんがひどく腹を立てるやうなことがないやうにして下さい。兄さんは中々怒らないんですが、怒ると大變ですから。」

「クリステイ君僕は出来る丈のことは盡して見ますからね。大丈夫に思つて居たまへ。失敬するよ。心配をしないでね。うまく行くだらうから。」

併し、かう元氣には言つたものの、マーテンはダグラス氏が生憎、試合場へ遣つて来るやうなことがないやうに熱心に望むのであつた。

日は朗かに晴れて場所は華やかに陽氣だつた。ドネリル家の立派な邸地は見物人が群をなしてこみ合つてゐる。樹園の中を流れる川の土堤の並木の下に、或ひは腰を下ろし、或ひは横臥してゐる。その日は、アルトンやその接續町村に一種のお祭りとされてゐたので、幾百とない群集が見に來た。

そしてグレナリンはいろ／＼の仕度に一生懸命立ち働いて、試合に光彩を添へる手段は、何一つ洩らすことなく、全力をあけて人を喜ばすことに努めてゐるやうだつた。

誰一人としてラルフを心底から歓迎しないものはなかつた。といふのは彼の技巧は此の界限では有名になつてゐたし、彼がはひるといふことが、彼の味方にとつて第一の勝味となつてゐたからである。併しマーテンは、ラルフに挨拶したとき、ラルフの心は落ちつかず、そして悲しんでゐることを一目で知ることが出來た。ラルフは殆んど口を利かなかつたが、試合が始まるまでは、マーテンの側を離れることは殆んどなく、マーテンと一しよにゐることを以つて、第一の樂とし力としてゐるやうだつた。併しマーテンが、こゝにくる途中ダグラス邸にラルフを呼びに行つたことを話した時、ラルフの心を掩ふ雲影は、人目につく程濃くなつたのである。

「君は僕の父に會はなかつたやうね。」

不安に襲はれ乍らラルフはいつた。

「いゝや、君のお父様はアルトンへ馬で行つたんだ。クリステイ君に會つたよ。」とマーテンがいつた。

「え？ 僕が此處へ來たことは弟には話さなかつたらうね。」



「君がクリステイ君に隠してゐると知つたなら、云ふんぢやなかつたんだが、僕が君を試合に誘ひに来たことを云ふと、クリステイ君はすぐ君がこゝへ來てゐることを覺つてしまつたんだよ。」  
「どうしよう。弟は一日中心配することだらう。可哀さうに。」  
とラルフはいつた。

「僕はクリステイ君の氣を引立たせるやうにいつては置いたがね、矢張——君が正しいことを固く守つてゐてくれて、こゝへ來なかつたら宜かつたと思ふよ。そりや、グレナリン君が君に説き付けてしまつたのだとは想像するがね。」

「いや、さうぢやないんだ。僕は出ることを斷つてゐたんだがね。一寸したことから僕が非常に業を煮やしてしまつたので、僕はどうしても試合に出ないでは置かないと意地になつてしまつたんだ。約束して見ると、また後悔はしたものの、一旦はつきりと約束したのだから、それを破る氣にはどうしたつてなれなかつたんだ。」

「うん、ぢやもうどうにも仕方がないんだね。」

「さうよ、今となつては引込むことはもう出来なくなつてしまつたんだ。併し僕は、來なかつたら宜かつたと思ふよ。僕はこゝに來るのは悪いといふことはよく知つてゐるんだから、さう思ふと僕は

情無くなる。」

「ラルフ君、ラルフ君。君は味方の主將だつて皆がいつてゐるんだよ。」ロードグレナリンはかう叫び乍ら、彼の側にかけて來た。

「それに、もうすぐ始まる時刻なんですからね。第一回戦に攻守を定める爲に、向うの主將のメーニイさんとトスをやつてくれ給へ。」

オックスフォード側の主將がトスに勝つて、敵が守ることになつた。パブリック・スクールの生徒たちが豫期してゐた通りに、敵は果して手剛であつて、之をアウトにすることは容易なことではない。三時になつて一同が天幕にはいつて晝食をとつた時にも、まだ敵をアウトにすることは出来なかつた。ラルフは非常にうまく投球したのであつたが、オックスフォード組の主將をアウトにすることは出来なかつた。此の主將は既に非常に高い點を得てゐる。そこでラルフはマーランを自分の代りに投手として置いて自分は外野に立つた。

丁度ゲームがこんな状態になつた時、ロード・ドネリル、サー・ヘンリー・アラビイ、ダグラスの三氏は、アルトンの會議が豫想した時刻よりも非常に早く切り上げられて、しづ／＼と馬を驅つて歸つて來たのである。路は河の向ふの岸に沿つてゐたが、やがて三人にはクリケット場の光景が目



に入つた。

三人は駒の手綱を引いて、その輝かしい光景に視入つたが、そこからは彼等は並木を透してつととその光景の全體を一目にすることが出来た。

「ね、今度こそは倅も満足してらうと思つてますよ。そりや此の十日程といふもの、此のクリツケット試合以外には何もかも忘れてるたんですからね。」とドネリル卿が云つた。

「時に、ダグラス君、私はあの下らないアールスポロー新聞で讀んだことなんだが、君が息子さんのラルフ君に試合に出ちやあ不可ないと、禁じたつてあつたが、そりやあ本當なんですか。」

「本當ですとも。」とダグラス氏はぶつきら棒に、あの有害な文章が人目を引かないではなかつたといふことを立腹して、更に次の如くにいふのだつた。

「當分のうち、クリツケットをすることは決してならんといひつけたのです。」

「決してならんといひつけたんですつて。どうしたつていふんです。ダグラス君、どうして君はあの息子にさうまでつらく當られるんです。可哀さうに。若し誰かが君に一月の間書物を開けることを禁じたとして見給へ。君はどういふだらう。」とヘンリー卿は、驚きのあまりいふのであつた。

「私の息子は、煮て食はうと焼いて食はうと私の好いたまゝにさせて置いて下さい。」ダグラス氏は

斷乎たる調子になつて答へた。

「いや、僕は君を怒らす積りでいつたんぢやないかね。併しそれぢや餘りに息子さんの義務心を緊張させることにはならないかね。」

「或ひはさうかも知れない。だがね、私はそんなことについては氣をとめては居ないんです。私はいつでも私の家の中では主人を立て通して來たんです。そして子供たちは小さいうちから、有無を云はせないで服従させて來たんです。」

「子供をそんな風に躰けるつて、とても凡々のものには眞似の出來ないことですね。どんなにして君はそれを實行してお出でになるんですか。」といさゝか皮肉を含めてドネリル卿が丁寧聞いた。

「ソロモンの教へに従つて、子供等が悪いことをした場合には、手厳しく罰するんですね。」とダグラス氏はいつておいて、非常に自信のある風で更に付け加へた。

「倅も私の命令に背くほどの馬鹿ではありません。」

「さうかね。だが此度丈は君の息子さんが、君の命令を守つておるかどうかは疑問だね。見給へ、私が大して誤つてないとすれば、あそこに立つてるのは、君の息子さんぢやないか。」

ドネリル卿がラルフを指した。ラルフは彼等の方に背中を向けて立つてゐるが、ダグラス氏はそ



の指のさす方を見送つた。

「あの少年はどうやらラルフの様ですね。ほんとに。」ダグラス氏は氣にとめない調子で答へた。  
「非常によく似てゐる。此のあたりには、あんなに活潑な立派な體を持つた少年は他には無いね。」とヘンリー・アラビー卿はいつた。

「それでも、大丈夫、ありやラルフぢやありません。何故かつて出場することは堅く禁めてあるんですから、私の命令に逆くなんてことは決してありません。」

此の時三人は自分等が見て議論してゐたその問題の少年が、素張らしい球を受止めたのを見たのだが、その難球を受止めるとき、少年は少し走り出して、自分を殆んど後に倒すやうにしななければならなかつたのだ。

それは已に非常の點數を得て、殆んど勝ちつゞけさまに見えたあのオックスフォード組の主將の打つた球だつたのだ。だから多分ラルフをおいては、此の試合場に於て、かくも困難な光輝赫々たる捕球に成功することの出来るものは、一人もなかつたのだ。彼が直ぐ體を曲けて球を空中高く投げ上げた時には、場内は喝采と稱讃とで鳴り渡つた。そしてかうしたどよめきの裡に馬上の三人は遠く離れてはゐたものの、明かに次の叫びを耳にしたのである。

「うまいぞ、ラルフ君。うまいぞ、ラルフ君。」

ドネリル卿とアラビー卿とは、意味あり氣にダグラス氏の顔を窺つたが、その顔に現れた恐ろしい怒と憎の表情を見て、いたく困つたのである。ヘンリー卿はダグラス氏の腕を捕へながら、  
「そんなに怒つちやいけませんよ。そりや意に逆つたのは悪いが、誘惑の力があまり大き過ぎたのだ。たゞそれだけなんだ。そして君の命令にしたつて、あまり厳し過ぎたんだ。今度だけはお許しなさい。先達のあの見上げた働きだけに免じてでも。ね。これからは決して君に逆かないやうに、僕が引き受けますから。」

「いゝえ許しません。それからのことについても他人さまに御願はしません。私がつまます。」ダグラス氏は低い、厳しい調子で云ひ續けた。

「それはそれとして、私が堅く禁めておいたのを破つたんですから、その罰に、今からすぐ家へ歸るやうに命令で、彼に恥をかゝせてやります。」

「お願ひだから、そんなことはしないで下さい。そんな残酷な苦しめ方はありませんよ。」とヘンリー卿はいつた。

「あれもその位のことには前以つて覺悟の上でせうよ。」



『僕にも口を出させて呉れ給へ。僕の息子のグレナリンは決して素直ではないから、時には僕も非常に立腹もするが、併し僕はどんなことがあつても、他人前でさう亂暴な取り扱ひはしない積りです。』

『貴君のお頼みをお聞きしないのは濟まないと思ひます。併し、私は、私と私の子供との間のことは、何誰にも干渉をして貰ひたくありません。こゝで失禮して、私はすぐクリケット場に馬で廻つて行きます。』

ダグラス氏は四角張つてかう答へ乍ら、二人の紳士に丁寧な會釋すると、馬で驅け去るのであつた。

## 十二

その間にバブリック・スクール側はウィツケットを守りに行つてゐた。マーテンは一番に守りに行つてアウトにならずにゐたのだが、二番、三番の二人は、オックスフォード側の投球で、また、くづにアウトにされてしまつた。彼はいつでも暫くは、たゞアウトにならぬやうにしてゐて、それから始めて敵の投球を打ちまくるのである。ラルフは味方に元氣をつけようと四番目に出て行つた。併し最初はたゞアウトにならぬやうにしたいと思つてゐたものの、味方に安心させる爲めに、最初のいくつかの球があまりによい球だつたので、力まかせにかつ飛ばして、また、くづ間に八點を奪つてしまつた。彼は誰にも可愛がられてゐたので、彼が球を打つ度毎に、只彼自身の味方側ばかりでなしに、一般の見物人がどよめき立つた。そして數分間の後には、その試合はますます、活氣がつき面白くなつて來た。

ダグラス氏が馬を乗り入れたときは、丁度かうした状態だつた。數多の腫は彼の方に結びつけられて、彼が一體何を仕出かすのかと見てゐる。といふのが、こゝに見物に來た人等の大部分は、あのアールスポロー新聞の批評を讀んでゐたし、闘入者の顔色は、大變に腹を立てて機嫌を損ねてゐる。



るといふことを十分に表してゐたからである。

彼は馬から下りると、手綱を馬丁に持たせて、まだ父の姿を見とめなかつたラルフが突つたつてゐたウィツケットの方に選手等の真中を横切つて、大股に真直やつて來た。

「傍へおより下さい。貴君——傍へおより下さい。貴君、何卒——貴君の身體が投手の邪魔になるんで。」

驚いてしまつた審判官が聲をかけた。

併しダグラス氏はその言葉を全く輕蔑的に鼻の先であしらつた。丁度その時も時、投手が球を投じたので、ラルフはそれを打つ爲に、急に身體を廻して、外野の方に美事に打つた。球は遙かの彼方へ飛んだので、既に大變の點數になつてゐた得點の上に、尙六點を加へることは、屹度容易に出來たであらう。

又々場内は喝采でどよめき渡つた。ラルフと向ひ合つて、向うのウィツケットの前に立つてゐるマーテンは全速力で走り出した。併し誰もが驚いたことには、ラルフがもぢく／＼と動かうともせず、に失神したもののやうに立ちつくしてゐたことだ。身を廻轉してボールを打つたとき、彼の敏捷な視力は、彼の父の貌を見たのだ。怒りの爲に血相を變へてゐた父の顔を見ると、ラルフは石にでも

なつたかと思はれる程、忽ち堅くなつて突つ立つた。

ロード・グレナリンと五六人の友達に口を揃へてラルフに走れ走れと叫んだので、ラルフが覺えず身を進ませようとした時、突然彼の父はどなりつけた。

「止め、その場を動くな。」

いはれて彼は又ビタリと立ち止つた。それは呪ひでもかけられたかの様に。その時ダグラス氏に對する不興の小囁きが場内に行き渡つた。最早やその時はその打たれた球は投げ上げられて、ラルフの守る真中のウィツケットは、ウィツケット・キーパーに打ち落されてしまつてゐた。

「お前のバットをそこへ置いて私と一しよにすぐ家へかへるんだ。」彼の父は苦しげにいつた。

その苦り切つた聲と命令とを聞くと、ラルフは始めて我に歸つた。觀衆が皆目をそばだて、見張つてゐるところでの、此の恥辱に對する言ふに言はれぬ感情が、少年の頭につきおこつて來た。そして此の恥辱の念は同時に怒りの焰と變つて燃えさかつて來た。彼はそのバットを烈しく地上に擲きつけたので、柄は手に握られたまゝ、ポツキリ折れてしまつた。そしてラルフは興奮の餘り、憤怒と反抗との響きを持つた聲でいつた。

「僕は今は試合を止めません。僕はすぐ家に歸れなんて、そんなことは知りません。」



『もう一度考へて見ろ、歸らない？』

『歸りません。』

『よし、歸らせてやる。』といったかと思ふと、ダグラス氏は、例のやうに全く自制心を失つてしまつてゐたので、飛びかゝつてラルフの眞白なジャケットの襟を掴んだ。

ラルフは怒りの聲を擧げると、手にもつた折れたバットの柄を投げすて、父の手を叩き放して掴んでゐる父の手から自分の身をもぎ離してしまつた。

併し、幸ひにもマーテンは、クリステイとの約束も、ラルフに對する友達の仕事も忘れなかつた。場内の群集が、此の突然のいたましい邪魔に、驚きのあまり黙つてゐた時、彼は静かではあるが、友思ふ心をこめてラルフの腕にすがりつき、そして口早ではあるが、しつかりした口調で囁いた。

『ラルフ君、皆が見てるんだ。後生だから自分を忘れないでくれ給へ。ねえ、天幕に來給へ。』  
いつでも氣持よく聞えるマーテンの聲が、今の此の心も動亂した瞬間のラルフには、いつもの二倍も嬉しかつたので、再び我にかへることが出来た。かうして、突如として起つた彼の怒の焰は、又突如として消え去つたのである。深い慚愧の念や、様々の感情に襲はれて頭を垂れると、子供の様に従順にマーテンと歩いて行つた。一方ダグラス氏は激怒のあまり身分も分別も忘れてあんな行

動をしたのであるが、まだその怒から恢復することが出来なかつた。氏の非常識な干渉によつて、滅茶苦茶にされた試合場を去ると、氏も亦マーテンやラルフの後を追つて、天幕にはひつたが、そこには人影もなかつた。ラルフは黙り込んでゐたが、氏はマーテンが側にゐて、而も明かに困つてゐるにもかゝはらず、堪へ切れない數々の鋭い無慈悲な罵倒をラルフにあびせかけ、最後に毒々しく、次の如くに言つた。

『もう一度こんなことをして見るが、鞭で打ちのめしてやるから。忘れるな——鞭で打ちのめすのだぞ。さ、出来るならもう一度命令に反いて見ろ。』

氏は踵をめぐらして、その天幕を去つて行つたが、その時始めて、人目もはばからないうで、大つ平にやつてのけた自分の無分別な行に眼覺めたのである。併し彼は自分の悪かつたことを認める人ではない。己の附近にゐる見物の人たちが、黙つたり、脇を向いたりするのを、侮蔑の態度で眺め乍ら、彼は馬に乗つて静々と歩み去つた。

併しラルフはじつと天幕の中に、マーテンと並んで、自分が人々から同情されてゐるとは露知らず、後悔と狼狽とに驅られて、父の言葉は少しも無理のないやうに思つて、ひたすら恥ぢ入り苦しむのであつた。



『言ひたいこともあるだらうがいはないでね。ラルフ君。さ、歸らう。君のうちまで送つてあげよう。僕の父も一しよに行くでせう。あれ父が馬でやつて來ますよ。僕は勝負をやめて來た。多分僕の從弟が、僕の代りに出るだらう。君の代りも誰か出来るだらう。』とマーテンは物靜かにいった。ラルフは何も云はなかつたが、下を向いて踏む足、震へ乍ら、二人連れ立つて出来る丈觀客の目につかぬやうにして去つた。

併しこの事件で、クリツケットの試合はまるで水をかけられたやうに、すつかり減入つてしまつた。初めの豫定はすつかり崩れて、試合の興味は全く去つてしまつたやうだつた。相談の結果、一回戦の結果で勝負を定めることに死んど直ぐに一致してしまつた。そしてグレナリンが最後に案外頑張つて奮闘したけれども、なにしろ第一等の選手が去つてしまつたので、中學側は手もなく負けてしまつた。試合がすんだ後、二組の選手等は天幕内に於ける大晚餐會に招かれた。幾人かの客人もそこには招かれた。そしてドネリル卿が自身で會を主宰した。併し伯爵の接待振も、グレナリンの快活も、會の氣分を引立てることは出来なかつた。

誰も彼もの談話が、先程突發したあの一件に集まつた。そしてグレナリンは遺憾千萬に思つたけれども、會は豫定よりもすつと早く閉ぢられてしまつた。

### 十三

『ラルフさん、君がお父様の命令に逆いて試合に出たことは、非常に悪かつたよ。君はい、少年です。だから私は、どうしてあんなことをしたのかと驚いたんです。』

ヘンリー・アラビイ卿はラルフを送つて歸る途すがら、かう話しかけた。

『お父さま、今はラルフ君にそんな叱言を云はないで下さい。本當に可哀さうなんですから。』とマーテンは彼の父に小呟いた。

『私は叱るんぢやないよ。』とヘンリー卿は大きな聲を出した。

『ラルフさんは屹度、私がどれ丈温い同席を持つてゐるかは、よく知つてゐてくれると思ふよ。』

『伯父さん。僕は本當に悪いことをしました。腹立ちまぎれにあんなことをしてしまつたんです。』とラルフは答へた。

『私は君を見棄てるやうな氣は決してないよ。たゞ君の本當の友達として、私が君にいふことは、兩親の命令を守ることです。それは子供の第一の義務なんですよ。』

『僕は今迄はいよつちゆうその心掛でゐたんですよ。』とラルフはおとなしくいつた。併しそのあ



と云ひ終らないで、自分の云つてゐる心持がよく分つてゐるかどうかと、ヘンリー卿の顔を見た。

『あ、そりやよく分つてゐるよ。それで君のお父様が厳し過ぎて、子供の心持を知つて呉れないといふのだらう。それが爲めに子としての務を盡すことは骨が折れるが、務は務だからね。私は本當に君のことをよく思つてゐるんだから。』といひ乍ら、靜かに手をラルフの肩にかけて、

『君が今日の誤を仕出かしたからつて、私が君を尊敬してゐる心は決して變らないよ。併したゞ六敷いからといつて、子としての務を棄てないやうにしなければいけない。ね、ラルフさん。忘れないで覚えてゐるんだよ。義務といふものが困難であればある丈、その義務を履行することの出来るやうに、餘計の力が人間に與へられる。そしてそれを仕遂けた時の嬉しさもそれ丈大きいんだよ。』

『本當に君が可哀さうだ。君の爲になることが僕に何か出来ないかねえ。まあしばらくその垣の上（こゝろ）に腰でも下ろして、君が少し元氣になるまで休まうぢやないか。』

『決して卑怯でぢやないよ、マーテン君。僕が家にかへると酷しく折檻（せうかん）をされるといふんで、くよくよしてゐるんぢやないんだよ。僕は折檻（せうかん）されることなんか何ともない。たゞお母様とクリステイが——』とラルフは自分の元氣のない小聲で辯解した。

『その方は心配はないよ。兎に角、君のお母様と弟さんとは、君を愛して同情して下さるよ。』とへ

ンリー卿がいつた。

『でも、僕はしよつちゆう家の者には何とか彼とか迷惑をかけるんですから、お父様も、あの可愛がつてらつしやるクリステイの外に子供がなかつたら、皆はたゞ幸福に暮らせるのでせうけれどね。僕が家にゐる間は、どうしたつてうちの中（うち）は面白くいきませんよ。』と彼は悲しうに答へた。

『ラルフ君、そりや間違つてゐる。だつてクリステイ君は君がゐる時（とき）には、いつも萎（し）れてゐるやうに僕は思つてゐるよ。いつだつたけか、かう詩の様な文句で、君の歸つてくることは、彼にとつては春の日輪（はるのひろ）のやうだと、僕に語つたことがあるよ。』

暫くの間はラルフの顔色が微笑にかはつて輝（きら）かしかつたが、それもやがて消え失せると、彼は吐息をついて答へるのであつた。

『あ——、マーテン君、君にはよく分つてゐないんだ。併し、家庭のことは友達にだつて話してはならないんだからねえ。』

『さあ、もう皆出かけたがい、だらう。マーテン、お前は小門のところまで待つてゐるんだよ。私がラルフさんを連れて行つてあけるから。』

『有難う御座います。』とラルフは感謝に満ちて云つた。



ダグラス邸の玄關につくと、ラルフを待たせておいて、ヘンリー・アラビイ卿は名刺を通じた。併し殆んど折り返して下僕は再び姿をあらはして来ていふのだつた。

「主人からはよろしくといふことで御座います。それから誠に失禮ですが、只今はお會ひすることが出来ません。お差支なければ、明日こちらから御邸へ伺ひますとの事で御座います。」

ラルフの爲を考へて見て、ヘンリー卿は當惑してしまつたが、併しその劍もほろゝの挨拶には別段機嫌を悪くもせなかつたが、その少年の蒼白になつた熱心に哀願するやうな面を見ては、氣の毒になつていつた。

「ねえ、君には氣の毒だけれど、斷られて見れば無理にお父様にお目にかゝることも出来ないからねえ。」

「僕は一體どうしたらいいのでせう。伯父さん。」とラルフは尋ねた。

「門番所の方へ一しよに歸りながら話さう。それともこゝにゐますか。この本の中に私の言ふことよりもよいことが書いてあるから。」

卿はポケットから一冊の小形な希臘語の聖書を取り出したが、その聖書は卿がいつも必らず携へてゐるものであつて、次の言葉の下に線がひつぱつてある。

「ラルフさん、わかりませうねえ。」

「吾は起ちて、吾が父の許に行かん。而して父に吾は罪を犯せりと言はん。」

ラルフは小聲でいつた。

「さうだ。それから、なぜさうすべきかといふ理由はこゝにある。」といつてヘンリー卿は更に他の節に鉛筆で記號をつけると、その頁を折り返して、ラルフに渡した。

「これだ。ね、此の本は私にとつては昔からの友達なんだ。併し君にあけよう。その書物が私の親友であつたやうに、どうか君の親友となつて呉れることを望むよ。私が記號つけたところは、君にとつては今も、今後も、私からの一番よい忠告となるだらう。左様なら——神様が君をお恵み下さるからね。」

「左様なら、僕は亦明日はやつて来てお目にかゝるから。」とマーテンがいつた。

ラルフは彼等に感謝した。そして二人の歸つて行く姿が麥圃のあなたなる小高く盛れ上つた丘を越して消え去るのを見送つてゐたが、やがてその小さな書を開いた。ヘンリー卿が先に記號をつけていつたところを、ラルフは原語から容易く意味をとることが出来た。

「而して彼は兩親と共に下りてナザレに來り、彼等に願へり。」



ラルフはその意味をよく了解することが出来た。といふのは、両親の心遣ひ。彼は宗教的に育てられて来たからであつて、宗教的の教義が根深く彼の心を支配してゐた。彼は何度も何度もその文句を読み返して見たが、見る度毎にその意味がいよゝ明かになつた。彼は基督のあの屈從貧賤謙遜の生活が、吾等に偉大の教を垂れることを心の底から、始めてつくづく悟ることが出来た。即ち基督は宇宙の主であり乍ら大工の子と生れて、一屬國中の貧しい州の中の最も貧しい村で、大工として三十年間微賤な生活をお送りになつたではないか。

そこでラルフは、これまで自分は我儘で、強情つばりで、そして不従順であつたのだから、彼の悔悛の心を現はし、父の前に頭を下げて告白し、我が身に下る刑罰は、どんなことでも耐へるの自分の義務なのだ、心を決めたとき、ラルフは殆んど快活になつたのである。

かうした考へと決心とで、彼は家の中へはひつて行つた。そして彼のクリツケットの服装を脱ぎかへると客間の方へ行つた。その客間にはダグラス夫人とクリステイとが、いつもの様に屹度坐つてゐるに違ひないと思つた。彼が部屋へはひつて見るとクリステイはソファの上に元氣も失せて横になつてゐるが、ダグラス夫人はクリステイの側に坐つて、何か聲を出して讀んでゐるのであつた。

「クリステイ、大變に心配さうな、氣分の悪さうな顔をしてゐるぢやないか、それに貴女までが、お母様、一體どうしたつていふんですか。」

彼は二人の側に置かれた足載臺の上に腰を下ろしながらいふのであつた。

「冗戯ぢやありませんよ。ねえ、ラルフさん。何故お父様の命令に逆いたのですか。お父様がどんなにお怒りなさるか位は、分つてゐるぢやありませんか。」

「そりや今に初つたことではありませんよ。お母様。お父様は僕には怒りづめなんでせう。しよつちゆう。僕が何一つしても。あゝあ、僕は皆さんに心配をかけてばかりゐる。いつそ、僕が家を出て行つた方が、皆さんにとつてずつと幸福になるでせう。」といつて吐息をついた。

「何を仰しやるんです、兄さん。お母様、あれは兄さんの本當の考ではないんですから。」

クリステイは答めるやうに、小叫いた。

夫人は何とも答へなかつた。併しラルフは母が物優しくラルフの前額におほひかゝる黒い頭髪を無で上げてくれる時、母の手が微かではあるが、震へをおびてゐることを感ずるのであつた。

「お父様から詳しいお話がありましたか。」とラルフは聞いた。

「えゝ、ありました。お父様は大變なお腹立ちですよ。なぜお前はクリステイか私に前もつて打ち



明けてくれなかつたの。』

「お母様に申上ければ行くなと仰しやるにきまつてますが、僕は行くと約束してしまつたもんでから。』

「どうしてそんな悪い約束をすることになつたの。ラルフさん。』

「腹立ちまぎれにしてしまつたんです。お母様、本當に僕が悪かつたんです。ですから、今すぐ行つてお父様の御許を願つて見ます。』

「併しお父様は大變な怒り方なんです。そして兄さんはお父様が何と仰しやつてると思ひますか。』とクリステイは泣き乍らいつた。

「何と仰しやつてゐるつて——』とラルフは心配氣に尋ねた。

「お父様は兄さんを、すぐにも學校をやめさせてしまふ、もう學校へはやらないんですつて。』ラルフは驚いてしまつた。

「何だつて！今學校を止めるんだつて、一寸も前振なしに。そりや、あんまり酷い。誰だつて僕が放校にされたんだと思ふもの。』

「もう一學期間だけはお前を學校にかへして下さるやうに、私からお父様に納得して貰ふことは出

來ようと思ふけれど、併し、一學期たてば退校させることはもう定めていらつしやるんですよ。お父様は、學校では無駄なことに時間を費つて、そして何もよいことはしないだと仰しやつてましたから。』

「お母さまもさうお思ひになるんですか。』

「私はさうは思つては居ないことは分つてゐるぢやありませんか。少くも私だけは、お前を十分に愛し、十分に信用してゐるんですよ。』

戸口にノツクの音がしたので、三人の會話がブツツリ途切れた。そして下僕がはひつて來て次のいひつけを傳へた。

「ラルフ様は暗誦なさらなかつたところを、お覺えなさるやうにといふことで御座います。』

併しそれつ切り、父の前で暗誦せよといふ呼出しはこなかつた。お茶時になつてもダグラス氏は姿を見せないのだつたが、使の者をよこして、彼の書齋の中にお茶を運ぶ様にとのいひつけであつた。そして長い宵が更けて行つても、ダグラス氏は、夫人と二人の息子とがいつもゐる客間には姿を見せなかつた。

ダグラス氏が書齋に閉ぢこもつてゐる時は、いつでも家の者は誰も滅多に側へ行かない。



『お寝みなさい。』の挨拶にさへ行かないことになつてゐた。だからダグラス氏は戸口にノックの音をきくと驚いた。そして戸口にラルフを見たとき更に一層驚いた。當分の間、ラルフに會ふことは避けようと前方から心組んでゐたのだ。而もラルフはそこに立つて、自分の失態をあやまらうとし、心は許されたさで燃えさかり、只一言丈でも氣を勵まし親切な言葉を父の口から聞きたいと憧れるのであつた。それはラルフが家での和解と平和に對する最後の希望であつた。

『どうしたんだ。お前が此處へ來るなんて？』

ダグラス氏は、ラルフの頭の尖から足の爪先までじろく／＼見ながらいつた。

『今日のやうな行をしたら、私に顔を見せない位の心遣ひはお前にもあるだらうと、私は思つてゐたよ。』

『僕のまゐりましたわけは……』とラルフは言つたが、父からの手厳しい挨拶に聲も慄へ、氣力も萎へてしまつた。父は彼にそのあとを言はせなかつた。一體彼の父は腹を立てた時は、一番焦々とした威壓する態度になつてしまつて、相手の言葉は殆んど一言一句遮つて言はせない。そんな時に相手が自分の思ふことをしまひまで言つてのけるのは非常の決心がなければ出來ない。

『何しに來たにしても早く此の部屋を出て行つて呉れ。そしてお前は自分の頑固と不従順から、さ

ういふ苦しみを招いたのだから、泣言をいつたつて私の加へようと思つた罰を、免れることは出來ないと思つてゐるがよい。』

泣言！さうしたことは、立派な男らしさが一番の取柄になつてゐたラルフには逆も出來ないことだつたらう。これは不親切な言葉、残酷な言葉である。一瞬の間、怒の稲妻がラルフの心の中にバツと燃え盛つた。が、ふと『彼は兩親に従へり。』といふ聖書の言葉を再びその光の中に讀むと、彼はすぐ平靜になつた。

『お父様。私は只お父様にお願ひに上つたのです——』

彼はおとなしくいふのだつた。

『そりや知れたことさ。お前を罰するのを赦して呉れつていふのだらう。それくらゐ悪いことはないよ。お前にも私にも。どうか此處を出て行つて貰ひたいよ。』

こんな不機嫌なときに彼を和めようとして辯解などしたところで、明かに望みのないことだつた。言葉にもつくされないうちに心を傷めて、ラルフは踵を返した。併しもうこれ切だといふ時、彼は戸の栓を手にして、たち／＼つとし乍ら、若しや彼の父の面に憐れみに和らいだ閃光はないのだらうか、ともすれば内に潜んでゐた同情と許容との見込がありはしないか、と眺めた。



「お父様が、私に口を利かしてさへ下さつたら。」彼は溜息をついたのであつた。

「お前はいつでも私の命令を破つて置き乍ら、それを私が許すかどうか試してゐるのか。」と怒りに任せてどなつたが、更に言葉をついで、

「私は出て行けといふことを三遍までも言はなければならぬのか。それともお前は、私が手を下ろしてまでお前を外へつれ出さなければならぬやうな恥づべきことを私にさせようとするのか。」

「そんなことをして頂かなくても宜しうございます。」

ラルフは深い／＼落膽の調子になつて答へたが、二度とふり返り見もせず、その部屋を出て行つた。彼が客間に歸つてくると、クリステイは寢てしまつてゐて、ダグラス夫人がそこにたゞ獨り残つてゐる。彼は母にはどんな首尾だつたかは語らなかつたのだが、彼女は彼が頭を力なく卓の上に乗せてゐるのを見たときに、すつかり事情をさつてしまつた。

「お休みよ、ね。」

夫人はさういふと身體をこめて子供の頬に、優しい接吻をおしつけた。

「氣を落しちやいけませんよ。もし援けが入るなら、常に私共を愛して願を容れて下さる『天にまします父』にお祈りなさい。」

「僕はどうしても、僕はもう一度寢る前に考へて見ます。」彼は低い聲でいつた。

母が部屋を去つて行つたとき、彼は書簡用箋を一枚はぐと、すぐ書きつけた。

お父様——只今はお許しを乞はらないで、お父様の書齋に行つたことを恐縮に思つてゐます。

併し私はたゞ今日は、私の不従順であつたことをお許しを願ひたいと思つて行つたのでした。

お父様、私は非常に悪いことをしたとごときりました。私は眞面目に後悔してゐます。私は二度

とこれからお父様の仰せには逆らはない心意でゐます。お許し下さいませ。ですから貴方の不幸な息子を愛して下さいませ。

ラルフより。

彼はランプを消して、彼が寢室に行く途中書齋の前を通りかゝつたとき、入口の戸の下にその手紙を押し込んだ。ダグラス氏はそれを知つて、ラルフの足音が遠くへ退いて行くが早い、立ち上つてその手紙を手にとつて見た。しばしの間その手紙を見てゐると、彼の兩眼には涙が浮んだのである。彼は、このやうなへり下つた、飾りのない正直な文句に、深く心から感動させられた。そこで彼の第一に起つた一等級、衝動は、直ちに二階へ行つて息子を許さうとしたのである。

併し愛情とか悲しみの感情とかに征服されることは、ダグラス氏には新奇なことである。ラルフ



が不従順であつたのなら、自分も思ひ遣がなく、厳し過ぎたといふことを、自覺せずにはゐられなかつた。自分をいぢめた人を許す方が、自分がいぢめた人を許すよりも、遙に容易いことなのだ。

ダグラス氏の心はためらひ、ゆらいで、遂に折角の好機を逸してしまつた。  
「チエツ、すつかり分つた。母親のさしがねなんだ。私が彼奴をすぐ學校から退かせる考へだといふことを、母親が話したのだ。そしてそれが恐しさに、こんな眞似をしたのだ。彼奴は惡魔のやうに高慢ちきだから、自分から氣がついて、こんなことをする筈がない。決して構ひつけないから。」  
その手紙をすたく／＼に引き破いてしまふと、それを紙屑籠の中に投げ入れてしまつて「サーベラス」紙に載せる諷刺文の続きを、今までより十倍も辛辣に書出した。

ラルフは力なく二階へ上つて行つたが、クリステイはまだ眠つてはゐなかつた。そしてラルフが眼を赤く泣き脹らしてゐるのを見た。そしてこんな今まで、兄が心を惱ますことは滅多にないことだと思つた。兄と父との間に、どんなことがあつたのかと、一部始終をラルフに尋ね問ふのである。

『どうか尋ねないでお呉れ。クリステイ。僕はね、僕は濟まないことをしましたとあやまりに行つたんだのに、お父様は僕に物を云はせることさへ許しては下さらないんだ。クリステイ、僕は實につらいんだよ。』

クリステイはワツと泣き出した。ラルフは優しく涙を拭つてやつて、弟をなだめて話しかけた。そして弟が眠つてしまふまで、その側を離れなかつた。弟が寢入ると、ラルフは物音をたてないやうに着物を着替へると、寢臺の側に膝まづいて、祈禱の言葉を捧げるのだつた。このいたはしい少年が膝まづいてゐるときに、平和が彼の心を訪れた。少くとも神様だけは彼を許して下さつたと感じた。そして横になつた時に、静かな清々しい眠りが、彼を襲つた。



ラルフは父が手紙を読んで、どんなに感じたらうとそれが知りたくて堪らなかつた。それで、元氣づけたり又は許してやるといふ風な簡単な言葉ぐらゐは、自分で我意を征服したのに對して報いられることだと思つた。併しすぐ彼は、さういふ言葉は決して報いられないだらうと知つた。彼が朝食のとき下に下りて行くと、父は新聞を讀んでゐたが、ラルフには知らん振りをしてゐたので、ラルフは父の逆鱗に觸れるのを恐れて挨拶もしなかつた。そして朝食の時は何事もいつもと變らなかつた。談話はつまらない世間話に向けられたが、ラルフは殆んど口を出さなかつた。皆は窮屈な肩の凝るやうな思をしたので、食事が済んでしまふとホツとしたのである。その時ダグラス氏は極くブツキラ棒に、冷やかに子供等に朝のうちにしなければならぬことを囑咐たま、で、立つて書齋へ行つてしまつた。

かうした風で、毎日／＼過ぎて行つた。そこで休暇ももう殆んど終りにさし返つて來た。併しラルフは、彼の父がクリスマスの頃までには初めからの心組み通りに、彼を退學させようとしてはゐるけれど、今さしせまつては、學校を止めさせることだけは、思ひ止まつたといふことを聞いた。

ラルフは機會ある毎に親友のマーテン・アソヒと一時期の間中文通し合つた。そして二人はいつも各々の學校のことについて手紙で比べ合ひ、互に自校の辯護に云ひ争ふのがたのしみであつた。併しラルフは、クリスマスの少し前に、マーテンから届いた報知には困り抜いてしまつた。それはいつもになく長文で、ロード・グレナリンが、イートンから放校されてしまつたと告げてあつた。その理由については、學生の手紙等といふものは、普通つまらないものだが、マーテン自身の言葉を引いた方がいゝと思ふ。手紙は次の様に書いてあつた。

吾が親愛なるラルフ君——僕は何も君がわがイートン校を冷かしたことを、彼是といふのではない。君の言葉ぐらゐを打ち破らうと思へば、容易いことなただけけれど。——Floreat Fiona (イートン萬歳)——此の言葉に僕の言はんとする所はつきてゐるんだ。

併しこの手紙では冗談を抜きにして君に告げなければならぬ事件があるんだ。僕等が休暇中のある日に、ロード・グレナリン君のことについて話し合つたことを、君は屹度思ひ出すことと思ふ。さう、僕はその時に、グレナリン君はいつも困つたことを引き起すといふことを君に話したね。それで僕は、何時か大變なことになるはしないだらうかと、實は氣にかけてゐたんだ。ところが到當ひどくなつて、グレナリン君は退校させられた。それを非常に残念に思



ふんだ。その理由といふのはかうだ。僕は彼を好かずにはゐられないのだよ。尊敬するといふ方からいへば、グレナリン君よりもどの位尊敬してゐるか分らない程の多くの人があり乍ら、それ等の人等以上に、僕は彼を好いてゐるんだから。僕が彼を好くやうになつたわけは数々あらうが、中でも僕が彼に忠告すると、何でも腹を立てないで聞いてくれる磊落の態度だ。實際、僕は彼が悪い方に悪い方にと、足を向けて行くのを知つてゐたから、僕は遠慮會釋もなしに度々彼を攻撃してやつた。そしてそんなに墮落して行つて、悪い評判の立つてゐる人たちとつき合ふのは、いかにも馬鹿なことだと忠告したのだ。そこで彼れの身にも悪い評判が立つて來たのは當り前だ。僕の舍の友人等は、僕が彼と一緒に散歩したりするからといつて、僕を少々冷やかな目で見ることにさへあつたんだ。實際のところ、グレナリン君は事實以上に悪く思はれたが、それは無理もない當り前のことなのだ。自分の評判といふことには一向おこまひなしたからねえ。

彼はさまざまの不始末を演じたのであつて、その半分さへも言ふことは出来ない。彼はわすか一學期のうちに、六回も罪を犯して不名誉な罰を受けた。彼はどの先生をも馬鹿にしてゐた。馬鹿にしないのは學生監だけであつた。その學生監には彼も本當になづき、また尊敬してゐた。それだから、その學生監に對してさへも、もつと有難く思つてもよいのだ。彼は校則を犯すことに興味

を持つてゐるやうに見える。そして彼の借金は法外にかさんでをり、それでゐて商人には父の名を擔いで、際限もなしにどしく註文したことが分つた。そしてしまひには、此の次に反則すれば放埒にすると言渡されたが、それも效目はなかつた。遂にある晩、食事の折、明かに酩酊してやつて來たので、勿論彼を放逐するよりほかには、とるべき處置は残されてはゐなかつたのだ。

僕はそれがいかにも残念で堪らない。彼はもうこれ迄に本當に度々忠告を受けたんだ。退學されるといけなから僕がいふと、いつも只笑つて取り合はなかつたんだ。一番困ることは、差當り身の振方なんだ。彼は軍隊にはひるつもりでゐたんだが、もう學校を放り出されて見ればそれは出來ない。それに兎に角、彼はまだ十五歳の少年なんだからねえ。ドネリル卿の處置次第だね。若しグレナリン君がどこへも出ないで、家にゐるやうなことになるれば、それこそ大變だ。どんく墮落するだらう。なにしろ、小さいうちから甘やかされて育てられ、何事も我儘の仕放題にし來たのだ。現在では彼の父の手には少しもおへないんだ。それに取り分け困つたことに、あの見るも嫌に思ふ、クラークがゐるんだ。彼奴め、しよつちうグレナリン君を悪い方へ引きずり込もうとしてゐるんだ。

僕は此の長い手紙を終へなければならぬ。僕は今フットボールの試合に出かけるところなん



だからね。ね、休暇になるのももうたつた二週間なんだ。そしたらまた君にお目にかかれるんだ。ね、あの獵のことや、楽しい聖誕祭のこと、そして家には親友が大勢集るし、家庭劇をやるんだし、それに類した様々な娯楽、さうしたことを考へるさへ嬉しいね。君は僕等の家庭劇の中では或る役をつとめると約束してゐるんだから、忘れないでね。失敬する。

君の親友なる

マーテン・アラビイより。

ラルフは此の手紙がいつてよこした報知を見て非常に悲しんだ。いろいろの事情が、二人の間には、非常に親密な友情といふものは湧きおこらせなかつたけれども、グレナリンとの交際は、いつ始まつたとも覺えない幼いときからである。グレナリンは彼をいつも好いて居て、彼にはたゞ性格の一番輝かしい、そして一番快活な側ばかりを見せてゐたので、さうした關係からラルフは、グレナリンの半面にある缺點は、何一つ知らなかつた。若しこれまでの家庭の躰がよかつたなら、或はよくなつてゐたかも知れないが、兎に角、今のグレナリンは實際、甘つたれ子に過ぎなかつたのだ——道德心の眠つた少年で、道德なり、宗教なり、強い指導力が全く缺けてゐた。併し一方ラルフは、彼自身の身の上について考へめぐらさなければならぬことを山程持つて

ゐた。彼の最後の試験は開近になつて來たから、彼はそれには一等いゝ成績をとらうと勉強してゐた。彼の學生監と校長とはダグラス氏を説いて、心を翻させようと思つたが、併し心を翻すことは、ダグラス氏の決してしないこと、又自分でそれを誇りにしてゐることだつたから、いくら手をつくし品をかへて説いても畢竟徒勞であつた。だから、學友達にとつては、皆で出来るだけ、ラルフの苦痛を軽くしてやることより他に仕方がなかつた。

ラルフは、最も愛してゐる母と弟のクリステイとに會へるのを楽しみにしてゐたが、彼の父のつけつけしい様子や冷淡な挨拶ぶりなどを思ひ合はせると、その樂さへ打ち消されてしまふのであつた。これまで、かうした父の態度は、しよつちう彼をおぢけさせ、卑怯にさせ、不幸にしたものだもの。併し、家庭へ歸つてからの最初の夜は彼は非常に幸福であつた。夜になつて彼等の小じんまりした部屋の中に坐つて、クリステイと四方山の話に花を咲かせたり、彼の學友達から贈られたさまざまな愛の記念品や手紙などを見せてゐるときには、彼には全てを希望の光で見ることが出来るやうに考へられ初めた。彼の將來のことはまだ模糊の中にあつたし、彼の父はそのことについて、何等の暗示さへしなかつた。ラルフは、兩親が彼をこれから後、地方の紳士として生活させるだけの資産をもつてゐることも知つてゐたし、亦兩親が彼に或る専門の職業を研究させようと決心して



ゐたことをも知つてゐた。彼の一己の願としては、最初の希望通り海軍少尉になるには歳も過ぎてゐたのだから、陸軍にはひることであつた。併し父の考は、自分か牧師にするか辯護士にするかどちらかを望んでゐるのであつて、いづれにしてもどこかの大學に入れられるだらうと思つてゐた。ラルフは例によつてキチンノと几帳面に勉強をさせられた。たとへ親友のマーテン・アラビイと遊ぶときでさへも、一日中遊ぶことは減多に許されなかつた。友達といへば殆んど弟のクリステイ只一人だけであつた。クリステイくらゐ兄思ひの弟はなかつたが、たゞ一人の而もこんな年下の友達だけでは、元氣な變化に富んだ中學生活から歸つたばかりの、而も仲間から受けのよい活潑なラルフにとつては、決して満足は出来なかつた。

だから、ラルフは父からグレナリンと交際してはいけないと申し渡されたときには、殘念で堪らなかつた。グレナリンは何も自分に迷惑をかけたのではないし、又家へ歸つてから彼の行は、とにかく世間に知れてゐるところ丈では、學校か、放校される原因となつたやうな、不檢束な生活では決してなかつたのだから、ラルフは、彼の父がもつと彼を信用して呉れて、そしてあの愉快な若い子爵と交はることを禁じないでくれ、ばと、どうしても望まないではゐられなかつた。併し彼はその禁止は無理もないことだといふことを知つて、少時ためらはずに、その禁止を守ることにした。

その後暫くの間は、彼はグレナリンとは首尾よく一しよにならずじまひだつた。グレナリンはそんなこととは露しるわけもなく、又ラルフに逢ひたいわけがあつたので「ラルフ君はちつとも訪ねて來て呉れないし、こちらから訪ねてもいつも留守だ。」とマーテンにこぼした。



當途ない我儘にはいつも天罰として恐ろしい倦怠が伴ふものであるが、グレナリンは放校される  
 ずつと前から、此の倦怠に罹つてゐた。そして幾度か親友のマーテン・アラビイの無邪氣な、平穩  
 な幸福さを見ては、ひたすら羨望の念から、友達の中の最もやくざな連中とは關係を斷つて、新し  
 いよりよい生活に入らうかと、半ば心を決めたこともあつた。

併し、自分がたゞ單に不満であるからといふに過ぎないので、宗教的の信念に刺戟せられ、或ひ  
 は神の援助にすがらうとして、立つた決心でもなかつたので、それは砂の上に描かれたやうなもの  
 だつた。グレナリンはマーテンの正しい忠告に耳をすましては溜息をついたけれど、それを實行に  
 うつすのは容易なことではない。それに必要な努力も出せるやうにはなつてゐなかつた。一體上り  
 路はいつでも困難なものであつて、不撓不屈の意志をもつてゐなければ、登れるものではない。そ  
 してこんな半ば悔恨に打たれてゐる時でさへ、グレナリンの失敗は幾つも重なつたので、遂に取  
 返しをつける機會はすつかりなくなつて、グレナリンのイートンに於ける生活は、思ひもよらない  
 時に終りをつけてしまつた。

その時になつて、グレナリンは、人生の一番大切な時期は有害に過してしまつたし、自分は人生  
 の出發を失敗つたといふことを、本當に感じ初めるやうになつた。グレナリンは放校になつたこと  
 を苦々しく感じ、心の中に或る眞面目な悔恨の微光を眼覺めさせた。グレナリンは受持教師に對し  
 て、自分のなした多くの過ちについて、本當に慚愧に堪へないと語つた。そしてその不面目を感  
 と平氣で圖々しく通り抜けたたり、心の悔恨を隠さうとするやうなことはなかつた。マーテンは只一  
 人彼をイートン停車場まで送つた時、グレナリンの兩眼が涙で輝いてゐるのを見て、驚いた位であ  
 つた。が併しグレナリンの乗つた客車が動き出すや否や、グレナリンはその客車の中に只自分一人  
 きりだと見ると、心から思ひ切り號泣してしまつたといふことをマーテンが知つたなら、彼は一層  
 驚いたに違ひないのだつたのに。といふのは、豪放な無頓着な性格の底にも、その優しい母の性質  
 から受け繼いだ或る深い感情の泉があつたからである。これまでだつて度々、グレナリンは父に怒  
 られても平氣でゐた。併し、今度といふ今度位に、父が怒るのも當然で、父の怒が一時的のもので  
 ないとすれば、これを軽く考へることは出来ないと思つたことはなかつた。そこでグレナリンが第一  
 に思ひ立つた唯一の望みは、父の命令に絶対に服従して、その怒を和らけることであつた。  
 グレナリンが父の邸へ歸つた時には、決して平氣でになかつた、恐恐歸つたのである。召使の者



までが、事情を知つてゐて、不面目が一家に振りかゝつたことを歎き、いつもは張り散らす若主人が、意氣銷沈の様子を氣の毒に思つて眺めたのである。併し、ドネリル卿は晩餐になつて、狩獵から歸つて来て、始めて息子に會つた。併し、晩餐には數人の客を招いてあつたので、ドネリル卿はわが子に對して、いかにも不快に思ふことを、只つけ／＼した態度や陰鬱な表情で表はすより他に道が無かつた。そしてグレナリンと二人だけで會ふ機會は、到當翌朝朝食をしまふまで來なかつた。

朝食のとき、客人等の目のまへでは、ドネリル卿は、息子に殆んど注意を向けないでゐたが、ただ息子が物言ふ度に顔をしかめてそれを抑へるだけであつた。でも口に出して、蔑むことはしなかつた。併し朝食が終ると、すぐダグラーズ氏はいつた。

『ハワード、お前私の部屋に來てお話しなさい。』

その語調は少年を全く腹立たせてしまつた。そこでグレナリンは無情になつてしまつて、冷酷な殆んど激昂させられた氣持にまでなつて、黙つて伯爵について、華美をつくした部屋にはひつて行つた。その部屋は、小さな圖書室であつて、伯爵はいつでも朝のうちは、この部屋でさまざまの用件を、人々と會談するのである。伯爵が椅子に腰をかけると、息子も同じやうにすぐさま腰を下ろした。

した。

『一體どんな御用事なんですか。』

遂にグレナリンは不平で堪らない語調で切り出した。

さうした問ひ方は、父が正當の怒を言葉に表はす、充分なきつかけとなつたので、伯爵は黙つてはゐなかつた。

『どんな御用事だつて。お前は一生とり返しもつかない不面目をしてイートンから歸つて來たんだやないか。それでゐて、私に糞落ち付きに落付いた不遠慮さで話しかけたり、非常の名譽でも得たやうにひとりよがりの言葉づきで話すんだ。』

『僕はさう大して悪いことをしたんぢやありません。』とグレナリンは張つ面しながらいつた。

『お前は決して悪いことではないといふんだな。酒によつばらつたり、學校からは放校にされ、身を立てる機會は絶たれてしまひ、そして軍隊へははひれないやうにしてしまひ、又お前たちのやうな年配から、こんなに借金をしたりなどしてながら。』とドネリル卿は荒々しく怒鳴りつけた。

伯爵はいろ／＼の商人の所から來た勘定書の一束をグレナリンの前に投げ出した。それは今朝の郵便で送つてよこされたのである。



『さうですか、僕にあてゝの信書は、開封される筈ぢやないと思つてゐるんですが。どんな場合にしる。』

グレナリンは思ひがけない舊惡露見に赤くなり乍らも、高飛車に出ようと思つたのである。

『お黙り。何といふ口の利き方をするのか。お前にあてゝの手紙なんか、そんな下らないものは構つてゐられない。』といつて伯爵は、勘定書のはひつた手紙を卓の上からぶちまけてしまつて、

『出て行け。』といつた。

『呼鈴を鳴らして、手紙を拾つて僕の部屋へもつて來させます。』とグレナリンは言つて呼鈴をおした。

『そんなことをすることは決してならん。』

伯爵の物の言ひ方が非常に嚴格な調子だつたので、少年の傲慢と我儘とが、すぐ縮み上つてしまつた。

『すぐ手紙を拾ひ集めなさい。その手紙は學校友達のところから來たのだらう。併し、確り覺えてゐるがよい。私のお前に對する信用をお前はすつかりぶちこはしてしまつた。今後私はお前の勝手に、勝手な人と文通することは許さないよ。これから當分のうちは、私のところに持つて來て讀めない

やうな手紙は、受けとつちやならんぞ。私はこれまでお前を甘やかし過ぎたんだ、だがもうこれからはお前を増長さしては置かないから、あてが違ふぞ。さあ、行きなさい。』

父が戸口の方を指さすと、グレナリンはいつに似氣ない父の權幕におぢ氣ついて、父の命するままに歸りかけた。併しグレナリンが出口に行つたとき、父は呼びかへしていふのだつた。』

『ハワード、お前は放校になつたお蔭で、休暇 上に又幾週間か遊ばれるだらう位に、考へちやいけないんだぞ。お前の教育の仕方に就ては、お父さまはまだ考案中なんだが、兎に角、此の邊を獵犬を連れて乗り廻り乍ら、何事もなかつたやうな顔で、浮れさしては置かないから。私はお前をこれ迄とは打つて變つた取り扱ひ方をするから。お前は私から特に許しが出れば兎に角、さうでなければ二度と馬になぞ乗つちやいけないんだぞ。そんな許を、當分お前は受けることはないんだが、もしお前にしろ、召使の者にしろ、私のいふことに逆らうなら、たゞは置かないから。』

『情ないんですね。若し狩獵が出来ないやうだつたら、一體こんな面白くもない田舎で、何一つすることはないんです。』

『お黙り。此の上私を怒らせると承知しないぞ。もう一つ言つておくことがある。お前のことだから、大抵此の勘定書を、私が拂つてやる位に考へてるのだらう。とんでもないことだ。お前の金使



ひが荒くて悪かつたからこんなものが舞ひ込んで来たんだ。それに誰にも知らさないやうな、こんなひどい高になるまで、お前に貸付けたほどの悪漢なら、損をするのは當り前だ。いや損をさせてやる。」

グレナリンは戸口にもじくして立つてゐた。その最後の言葉の聞くと、グレナリンは驚呆と共に、これがバツと世間に知れ、そして不面目になつたときの凡ゆる幻想を浮べた。といふのが、彼がロンドンの商賣人から買つた幾多の衣服にしろ、寶石類にしろ、装飾品にしろ、それを買ふには威張り散らして買つたのである。グレナリンはこれ等の商人たちに意張り散らしたり、恩を着せたりしたのを、今になつて、注文は父の許がないのを欺つてゐたのだといふことが、それらの商人に分るのか、思へば、立つてもゐてもゐられない思ひがするのであつた。併し、グレナリンは、父伯爵が眞面目でそんなことをいふのだとも信ずることが出来なかつた。

「お父様、お願ひですから、勘定はゆつて下さいませ。」グレナリンは、これ迄の話し振りとは打つて變つて、恐れ入り乍らいつた。

「一文だつて支拂ふものか、とにかく此處暫くのところ、官憲の手で十分に勘定書を取調べて貰ふまでは、拂はない。」

「でも、僕、お父様のお名前を用ひたんです。」

「私の名を用ひたんだつて！ 注文は、私の許が出てゐるなぞと商人に話したんだね。」

ドネリル卿は驚駭のあまり、聲高になつていつた。

「はい」答は低い語調であつた。

「そんなら、お前は故意で、澤山の偽をいつてゐるんだな。卑劣な奴だ。私はそんなことが本當だとは思はれなかつたんだ。ハワード恥を知れ。」

伯爵はその立派な威高い顔つき一ぱいに、侮蔑と憤怒とを表して、息子をまじく見つけめ乍らいつた。そしてグレナリンにわざと背をむけて、窓の方へ歩み去つた。

今度といふ今度は、グレナリンも心から恥ぢ入つて、頭を垂れて面を赤らめてゐた。彼の顔からは、傍若無人な、圖々しいところが、全くなくなつてしまつてゐた。そしておどろした足どりで父に近づくと、彼は父の手を握つた。併し、ドネリル卿はたつた今、嫌悪と憤怒とを感じたばかりのところなので、おいそれと氣持をおし鎮めることは出来なかつた。嘘をいつたことが何よりもドネリル卿に侮蔑の心をおこさせた。伯爵は少年の手をそつげなく振り拂つて、悪々しげに嘲つていつた。



『ドネリル家の一人で虚言をいふなんて！ 行つてしまへ。私の眼の汚れだ。』

あらゆる恥かしさと悲しさの念が、父のこの脇鐵砲に逢つて、消散してしまつて、その代り全く別な氣持になつた。最早や、顔は恥しきではなく怒の爲に赤らんでゐた。グレナリンは、此の部屋を立ち去らうとするとき、クルリと向き直つて念を押した。

『ちや、支拂つて下さいませぬね。』

『ドネリル家の一人で嘘つき！ まだぐづぐづしてるのか。私の目にかゝらない所に行つてしまへ。私がお前に云ひつけたことを覚えてるんだぞ。そして當分の間は、二度と私の目にかゝらないで呉れ。伯爵の答はたゞそれつきりだつた。』

少年は腹立ちまぎれに、戸をびしやりと締めて、書齋に歸つて行つたのだが、そこでいろいろと彼が思ひ廻らして見れば見る程、自分の立場は辛い立場のやうに思はれた。ドネリル卿が、結局は商人の勘定丈は支拂つてくれるだらうと固く信じたので、従つてそのことは心にとめなかつたが、グレナリンには、この借金よりも、もつとすつと心配になる借金が外にあつた。しかも、そのことについては、父にどうしても話されないので。ロード・グレナリンはずつと以前から、こつそりと數人の學生友達と一しよになつて、賭をやつたり、博奕を打つたりしてゐたのだ。その學友の小さな

群といふのは、まだ年端も行かないうちから、年長の學生等の仲間入をして、悪いことをしたり、道樂に耽つたりしたのであつた。そこでグレナリンも、特性の無鐵砲を發揮して、此の恐ろしい渦の中にもまき込まれてしまつた。さて、グレナリンは商人に金を待たせるといふことを、左程、不正なことだと思つてゐなかつたし、又待たせたつて、彼等に大した損害をかけることにはならないと思つたから、その點は少しも氣にかけなかつたが、前記の賭博の借金は、不名譽の借金だから、慙と『名譽の借金』の綽名がついてゐる位なので、この方の借金を思ひ惱んだのであつて、生憎その口數も、その額も、ちつとやそつとではなかつたから、自分にこれを支拂ふ資力は、今はもとよりこの先とても、父の怒が解けない間は、逆も消却の見込がたゝないのであつた。

併し、今朝受けとつた友達の手紙の中に、此の借金のことが手厳しく催促してあつたのが、幾つもあつた。若し此の手紙が、他にいゝ結果を産んでくれなかつたとしても、少くとも惡友たちとの交りは、全然虚偽で價値のないことを、彼の心に印象するだけ、効果は少しはあつた。併し、これ等惡友たちとの交りより、更に一層彼の心を悩ますことがあつた。それはロード・グレナリンは自分の召使から、弱味を抑へられてゐたことがある。グレナリンは無鐵砲な贅澤や、氣儘を盡して、金錢上の問題で困つてしまつたことは、決して今に初つたわけではないので、不幸にもその都度、彼



は幾回となく、召使のクラークに頼んでゐたのである。此の男は、グレナリンの力量を知つてゐてそれを悪い方面に利用しようとしたのである。それは、自分の若主人から、以前に虐待された恨を晴らさうと考へたのであつて、現在はクラークの方が事實上の主人で、若子爵はその召使であるといふことを、彼は自ら感ずると共に、ロード・グレナリンにも亦感じさせるやうにと企てたのである。グレナリンが演ずる不始末は學校でも家の中にも、皆此の男を道具に使つてゐる關係上、クラークは大抵のことでは邸から追出されることはない、高をくゞつてゐたのである。これまではドネリル邸の若主人をますます徹底的に苦しい目に陥れようと、クラークは猫をかぶつて媚び媚ぶ態度であつたが、最早や今となつては、充分正體を顯してもいゝところまで潰ぎつけたといふことを知つてゐた。

父と會見してから、二三日たつた或日、ロード・グレナリンは寢臺に力なく身體を横たへて、小説を讀んでゐたが、時々書物の下においては、自分の不愉快極まる立場について考へ込むのである。その時、戸口で叩く者があつて、クラークが姿を現した。これまでとてもクラークに自分の約束手形を與へては、金の融通かして貰つたことは、よくあつたのであるが、今度は金高があまりに大きいので、流石のグレナリンも頼み兼ねてゐたのである。兎に角、今この部屋へ入つて來たクラー

ークの顔には、何だかこのことを言ひ出し兼ねさせるものがあつた。

「何用だい。」とグレナリンは、クラークに荒々しくいつてのけた。

「一寸お話ししたいことが御座います。」とクラークは横柄な態度で受け答へした。

「僕に話したいつて、さうか、そんならこゝに話の種があるよ。」

ロード・グレナリンは今し方まで讀んでゐた小説を、召使の頭めがけて投げつけた。

召使はひらりと傍へに身をかはすと、その書物を拾ひ上げて、投げかへさうとでもするやうに、

最初はひどい權幕だつた。併し、彼は我と我が心をおさへつけると、たゞ次の如くにいつた。

「若様、お止しなさい。あなたの出様で、私も黙つちやるませんよ。」

「私も黙つちやゐられない。俺に向つてよくもそんな口が利ける。」ロード・グレナリンは、烈しい驚きと怒りの餘り、立ち上り乍ら叫んだ。

クラークは答へも、ずに只嘲罵するやうな微笑を送り乍ら、やがていやに落ちついた風に、腰を椅子に下ろした。その間ロード・グレナリンはクラークをヂツと睨めつけ乍ら、死者のやうに蒼白になつてゐた。

クラークは靜かにポケットから一束にした書類を引き出して來た。その書類はいろくゝの顔面の



借用證だつたが、グレナリンはその證書の多くは全く忘れてしまつてゐたし、その他は渡した覚えが少しもなかつた。だが、クラークはその證文を残らず皺をのぼして、一枚一枚卓の上に載せては、手で軽く打つのであつた。

『さて若様、濟みませんが、此の金を支拂つて頂きますよ。こりや皆、私の給金の中から都合をつけたんだと思つちや間違ひですよ。勿論私にやそんな力はありませんからね。ジューの金貸から借りたんです。若しあなたが綺麗にお返し下さらないとなりや、奴等は貴方を許しておく氣遣ひはありませんね。私にしたつて黙つちやるません。貴方は今迄随分長い間、私に意張り散らしたり、私を叱りつけたりなかつたが、私はもう貴方の戯言を黙つて聞いてはるませんから。』

『拂つてやる、馬鹿！ 何時か。そんな長い間経たなくつたつて、俺も丁年に達するんだ。お前やジューの好きなだけ、利子をいくらでもやるよ。畜生うまいことをしやがる。』

『畜生呼ばはりはもう止めて頂きやせう。』

クラークは到常本音を現していつた。上品な言葉つきよりは、その下品な物の言ひ方をする方がこの男にはすつとはまつてゐた。

『悪口もいゝ加減にするが、さあ百五十封度出して貰ひやせう。ちつとも待てねいんだから。』

『百五十封度だ！ お前に借りさせた高い、その半分にならない、たしかに。』とグレナリンは呆れ果て、いふのであつた。

クラークは自分の前の證文を指さした。併しグレナリンがそれを見ようとすると、クラークは證文をひつさらつて、

『いけません。いけません。その手は食ひませんよ。どうしたつて。』

『その手とは何の手だ。無禮な。』と少年は憤慨の餘り眞赤になつてきゝかへした。

『ねえ、若様。私はお叩から暇を頂きたいと申し出たんです。で私は今よりもつと立派になるつもりなんで、濠洲へ出稼ぎに行かうと思つてます。それには金がいるんです。私は貴方に此の金を御融通したんですが、金を返して頂かないうちは、此の家から一寸も動きませんから、若し返して下さらなきや、貴方の行のうち、大殿様のお氣に障るやうなことを一つ二つ、大殿様に申上けるだけです。いや大殿様のお嫌ひなことがらを、貴方も私も澤山知つてる。』とクラークは云つた。

唐突に威嚇し、顔に下素な笑を浮べて、クラークは部屋を出て行つて、あとに若主人は失望し切つてゐたところが、突然に、ものういはないでクラークが再び戸を開けると、頭をつき出していつた。



「二月の中なんですよ。お忘れないうやうに。お忘れになれば——お分りでせう。」

ロード・グレナリンはたゞひとり取りのこされて、自らを反省して見たが、この時ほど苦しい反省はなかつた。先達のあの放校された時の苦しさと、類の變つた、恐ろしい、そして豫想だにしかかつた、堪へられない苦しみがあつた。あの放校のことは、非常に恐ろしく思はれたが、こんどの苦しみに比べれば、何でもなかつた。グレナリンの父はこの數日間といふもの、嚴格と侮蔑とのこんがらかつた態度で、息子を遇らひつゞけた。剩へ、グレナリンは狩獵に出かけたり、又はいつもよくやる娛樂とか氣儘をすることを、固く父に禁められてゐた。父に金を下さいと頼んでも駄目だつた。而もいはゆる『名譽借金』は支拂はなければならぬ。それに萬一、その方は切り抜けて行つて延期することが出来たとしても、今こゝに新らしく起つて来た、どうにも仕方のない要求があつた。併もその要求に若し應じないとすれば、許されることの出来ないあらゆる罪や失錯を、口外されることになつてしまふのだ。而もさうなれば、彼の評判を多分とりかへすことの出来ない迄に傷つけ、父からはすつかり愛相をつかされるだらう。

かうした思ひに、グレナリンは深く心を悩ました。そして逃れ出す方法は、かいくれ思ひつかなかつた。グレナリンはそは／＼して、今は讀書することも出来ず、しまひにはワ

ツと泣き出してしまつた。長い間泣きやまなかつたが、それでも泣きとやらか氣を紛らすことが出来た。そして彼はズキ／＼病む前額と涙にぬれた顔を、寢臺の蒲團に埋めてしまつた。——他人目には最も幸福であつた少年は、その心中に於ては、最も哀れる少年であつた。



グレナリンが自分の困難を打明けて話せる只一人の友は、マーテン・アラビイである。彼には何時も親切や同情を求めることが出来た。それ故、彼はマーテンに手紙をやつて相談した。その返事としてマーテンから教へて来た方法は此際執るべき、唯一の正しい道であつた。即ち、事の始末をさつぱりと残りなくお父さんに打明けて、その上で何も彼らお父さんの保護と寛仁とに訴へ給へと云ふのである。

この忠告は彼の豫期してゐたもので、彼はどうかしてそれに従ひたいと苦心した。若しも父ドネリル卿が、彼に對する言葉や態度の厳しさを弛めて呉れさへすれば——眞の瞬間でもいゝ、昔の様に甘やかして、優しくして呉れば——總てを打明て、助けて貰ふ事はわけもないのだが、と彼は思つてゐた。

併し、ドネリル卿の方では、今までいつもグレナリンを甘やかせ過ぎた、そして今度の様な事の起つたのも自分の驕方の悪かつた事が、よし原因ではなくとも助けになつたのだ、と思つては、後悔の念に堪へなかつた。その結果は今までの反動として、厳しい、怒つた態度を執つたのであつて、

それがためグレナリンは己の傲慢な粗暴な性質を曲けて、柔しく折れて出ることが一層むづかしくなつた。でも事情を白状して改心するより他に道のない事は明かなので、彼は遂に反抗したがる自尊心を抑へて父の室へやつて行つた。

慄く手を舉げて彼はドアをノックしたが、何の應へも無い。で、把手を握つてみると、鍵がかけてあつた。

一方、彼は邸の庭の彼方を廣々と眺められる廊下の窓の一つを通して遠くの方を父が馬に乗つて行く姿を見た。

彼はこつそり自分の室へ戻る途中の廊下で召使頭に出會つたので、お父さまは何時頃お歸りになるのかと聞いた。

『わたくし存じません。ひどくお急ぎでございます。何でも鐵道線路に事故がありましたさうで、閣下は役人の一人として後仕末にお呼ばれなさいましたのです。ちよつとはお歸りになるまいと存じます。』

召使頭が去るとグレナリンは放心して思はず『しめた。』といつた。一體何を思つたのであらう？——不意に何か思ひ付いたらしかつた。彼は客付かぬ様子で立止つて、一寸ためらつた。それから



自分の室へは歸らずに、温室を通り抜けて庭園へ下りて行つた。二三分して再び心のきまらぬ足取りで戻つて来て、心配さうにおどおどと四邊を見まはした。立派な廊下にも、贅澤に裝飾した部屋にも、誰も見えなければ、何の音も聞えない。たゞ廊下の大時計が規則的に、音楽的な動悸を打つてゐるだけである。彼は暫く立止り、ちつと息を殺して四邊を見まはし、物音に耳を澄ました。がやがて何を恥ぢてか眞赤になつて、再び足音を忍ばせて温室を抜けて出て行つた。

グレナリンは父親の習慣をよく知つてゐた。即ち何時でも晝の中この室を明ける時は、ドアに錠を下して、鍵を自分で持つて行くのであつた。それは調べかけた書類や、出し放しの金を片附ける面倒を省く爲であつた。

ドネリル卿は鐵道線路に起つた事故の爲にあたふたと出かけて行つた。非常に性急で無頓着な伯爵は、讀書室の窓を閉めたり、金を取られない様に用心することを忘れたのであつて、金は箱に入れて錠を掛けすにあつたのである。實のところが、伯爵が斯様に物事を等閑にして置く事は一度や二度では無かつたのであつた。

グレナリンはその窓の傍を通つてそれが明いてゐるのに氣付くと、用心深く、頻りに遠巡ひながら窓に近よつた。そして開いてゐる窓を更に少し開けて、窓の闕に手を掛けて、軽々と部屋の中へ

躍り込んだ。

罪を犯す考へは次第々々に彼の心を捕へるやうになり、彼は秒一秒と大膽になつてきたのである。彼のこそそした、われとわが身を咎める態度や、熱したきよときよとした顔付を見たならば、何んな不注意な人でも、彼が恥づべき誘惑にかゝつてゐたことがわかつたであらう。——よし一週間の前であつても、こんな誘惑は流石に廉悪と驚きとで直ちに拂ひ除けたであらう。が——身に振りかゝる危険や難儀から免れたさに、今の機會を逃すなどの誘惑に、彼はかゝつたのである。長年にわたつて徐々に築き上げられる嫉の結果は、危急の場合に試されるものであるが、その危急の一つが今グレナリンの身に振りかゝつたのである。道徳心が長い間放任されたり、絶えず罪を犯す結果弱められてゐれば、かういふ危急い場合にはその道徳心の牆壁が一度にどつと崩れて誘惑に負けるのである。だから弱い一時の誘惑に負ける罪は、實はその時の罪では無くて、生れてその時に至るまでの長い間の罪から知れない。

——一つの大きい罪は、長く続ける一つの道の、たゞ一行動に約められたるのみ。——と古人は言つてゐる。あゝ、この恐るべき眞理を實感するならば、我らは内に存する善い本能や信念の一つ一つを強めるためにどんなに努めることであらう！ さうしてこそ、その危急に立向つて色めく



こともなく確と踏壊へることが出来るであらう。もし倒れたならば、

——心は曇り、哀しみの雨は来らん、

世は再び昔に歸らざるなり。——

である。罪びとが、若し前以て、お前は僅か一年の後にもこんな罪を犯す様になるだらうと言ひ聞かされたなら、きつと恐しさに慄へたに違ひない、身の毛もよ立つ思ひをしたであらう。然し、誘惑はだしぬけに『恐るべき虎の如き速さもて』襲ふものである。そして、襲はれるものは武器を持たず、心おちけ、準備なく、塞なきため、忽ち倒れて終ふのである。

現金と紙幣とを多く入れた手下け金庫は錠を掛けずに机の上に置いてあつた。然しグレナリンはそれに眼もかけず手も觸れなかつた。それを盗むのは餘り、危く、餘りに汚ないと思つたのだ。さすがの誘惑もそれほど卑劣な下等な事までは、彼にさせなかつたのである。もつと容易い、もつと安全な、不名譽な點が少しは少いと思はれる方法が別にあつた。小切手帖が机の上に置かれてあつた。グレナリンは父が金銭に無頓着なのをよく知つてゐた。あのしばしば一口のうちに十枚以上も小切手を書くことのある父が、銀行預金の精細を計算をしたり、自分の小切手帖にはさんだ利札を見たりなどすることは、有りさうもないといふことを充分心得てゐた。事實、彼は時々少しも記入

のしてない利札を見る事があつたのだから、それをしらべるなぞといふことのないのは明であつた。それに父の金は子の金ではないか、殊に小額でそれを費つたつて父には分らない位なんだ。のみならず其のうちには何とか工夫して費つたことの分らないうちに黙つて返して置くことができよう。また、結局相續人たる自分のものになる金のうちの少しを一時の急を救ふために借用して置くだけのことだ。——斯様にして彼はずるい心を増長させてしまつた。あゝ誘惑の舌ほど織細に婉曲な、巧妙に尤もらしいことを言ふものが又とあらうか！

グレナリンの手蹟は實によく父のと似てゐて、大きな、盛な書風であつた。それはこの家の昔からの書風なので、彼等はそれをむしろ誇つてゐたのである。ドネリル卿はグレナリンが幼い時に、この書き方を習はせるのに随分骨を折つたものゝつた。が、面白味のある、そして容易に眞似の出来る書風なのでそれは成功した。だから今までしばしばグレナリンが、戯れに父親の署名を書いてそれを父親に見せると、父親は、自分のと區別がつかなくて、にこにこしながら「んん、ハワード、よく出来た。ドネリル家の書き方がすつかり手に入つて結構だ。」といつた。

眞の瞬間、彼は逡巡つたが、たうとう骰子は投げられた。心の激動に、熱して燃える様な頬をしながらも、確な手付きで彼は小切手帖を取上げて、その一枚をちぎり取つた。そして最も苦しい困



難から自分自身を救ひ出す爲に必要だけの金高をそれへ書いた。かくして彼は小切手の偽造をしてしまつたのだ。否偽造ではない、グレナリンの良心は破れてはゐるたが、この時の心持では決してそんな偽造なぞする考ではなかつた。たゞ金額を書いて、父の署名を真似たゞけだ。ペンを置いて小切手帖を元の處へちやんと置いて、音を立てまいと爪尖で忍び足に窓に近づいた、窓から降りた——これは瞬間に行はれたのである。彼は再び鋭い眼で四邊を見まはした。こそこそ黙つてゐなければならぬ理由はない。悪いことさへしなかつたら、よし走らうと嗚鳴らうと、それが爲に他人が何と云はうが構はなかつたのだ。彼の行動を見てゐたものは孔雀だけであつたが、しかも彼には一萬の眼が彼を見てゐて、一萬の聲が彼の恥める囁きをしてゐる様に思はれた。彼は罪人のやうにこそこそと庭と温室を通り抜けて廊下へ歸つたが、矢張り落付くことができないのは、前と殆ど同じであつた。誰一人見てゐるものはなかつたのに、彼には地上が鏡で出来てゐるかの様に思はれた。時計の時を刻む音と、自身の罪を犯した恐しさの爲の、速い短い息遣ひのほか何も聞えないのに、彼にはその振子の音も意味ありけに思はれ、自分の息が他人の息ではないかと怪しまれるのであつた。その時、何かカチツといふ音がして彼は思はずびくつとした。が、ちぎりに時計が十一時を打つた。先にこの廊下を通つた時、十一時十分前だつたのを彼は思ひ出した。このたつた十分間に一人

の人間の歴史も運命も長い苦悶も籠つたのである。『一時の過は一生の苦み』といふ諺通りに。

すでに萬事は休した。その悲しい一日中、胸の騒を鎮めようと努めても努めても駄目であつた。少しでも今日の己が行を思ひ出せば、玉なす冷汗が額に滲み出るのであつた。

悲惨な彼よ、彼には今や己が心に付きまとふ暗い影を、どうしても追ひ拂ふ事が出来なかつた。もはや永久に自己瞞着の時は去つた。彼は始めて眞實の自分を、色付けてない素地のまゝの自分自身を見た。長い間の艱難や不幸に會ひ續けた人が、鏡に映る己が寝れた頬を見るときに、堪らなくなつてわつと泣き出す、さうして眞實の鏡がグレナリンの前へ立てられたのだ。誰からも好かれ、誰からも愛相を言はれて陽氣な伶俐な少年が、今や下劣な孤獨な罪人として、良友の交からは断たれ、不良な仲間からさへも退け者にされるのである。思ひ出して満足し得る事柄は何一つない。たゞ最後にいたましい絶望の心で辿り付いた考は、彼を悩ました幾多の難儀中の難儀即ち召使の壓迫からは兎に角脱れる事が出来るといふことであつた。彼の態度があまり眼に見えて落付かずそわそわしてゐるので、ドネリル卿もクラークも、確な原因は少しも察することが出来なかつたが、それと氣がつくことは氣がついた。がさてそれが正しい訓練を缺いた良心の曲つた見解と、羨のない放縦からの出来心とのために是非の分別に暗くなつて、そんな恐しい罪を犯すに至つたのだとは、二



人とも氣づく由もなかつた。よもやグレナリンが罪の秘密の恐しい重荷を何氣ない素振の下に隠さうと努めても出来ないで、その虚偽といふ鍍金の上衣の中で既に押し潰されかけてるようとは思はなかつた。

グレナリンは、小切手を手離す時が早く来れば、と願ふのであつた。小切手は罪を犯した證據ではあるが、でもそれによつて、無謀にも自分の秘密を握らしたあの召使の手から自由になれると思つたのである。だが罪を犯した當時にはどうしてもそれを渡してやる事が出来なかつた。彼は夜の明けるのを待つた。併し朝になつてもなほ、十分な勇氣を振つて思ふ事をするまでには中々かゝつた。彼はクラークに對して、言はれたゞけの借金を仕拂ふに何といふ言葉を用ふべきかと長いこと考へた。また、どんな顔付をしようかと考へて、その練習までして、遂々これならと思ふまでになつた。しかし、いよいよベルを鳴して、召使の足音が近付いて来るのを聞くと、胸が早鐘のやうに鳴り出して、折角の用意も皆無駄になつてしまつた。そして言はうと思つてゐた言葉も、しようと思へてゐた顔付も、まるで忘れてしまつて、小切手を取り出すと脇を向いてかう言つたゞけであつた。

「クラーク、證文をお返し、此處にお金があるから。」

男は驚きながら黙つて手に取つた。そしてそれをぢつと見て、次に若主人の顔へ眼を轉じたが、その邊に變る顔つきは、どんなうっかりした人にも、何か悪い事があるなと思はれた。

「如何した。」

といふ若い子爵の聲は抑へようとしても慄へた。「それだけぢやいけないのかい？」  
男はなほ黙してゐた。驚く様な事實があるに相違ないといふ幽かな暗示が、彼の心に閃いたのである。彼は更に眞實の事實を見極めようと決心した。で、なほ考へ深く沈黙を續けて、たゞ時々小切手から眼を上げてちらり、とグレナリンの顔をぬすみ見るのみである——死も二つの同一筆蹟を見較べて同一だと見極めるといふ様子で。

グレナリンは更に平氣を装ふのに顔に苦心しながらいふ。

「如何したつて言ふんだい？ お父さまから戴いたんだよ。いけないのかい？ 持つて行かないか、聞かないぞ。」

「はつはつは、左様で御座いますか。」クラークは無遠慮に齒をむき出して笑ひながら、「はい、行きますよ。ですが、これは何だか變で御座いますぜ、ねえ、どーも、へーんでございますぜ。」  
と悠り繰り返しながらドアの方へ歩いて行く。



「待て、お前、證文を返さないぢやないか。」

「ははは、今直ぐといふ譯にや参りませんよ。」

と一流の狡い笑ひ方をして、彼は部屋を立去つたが、廊下でぐづぐづしながら、小切手を持つて暫くそれを検めて見た。やがて彼は再びドアを開けて首を突込んだ。その時グレナリンは恐しさと後悔の念とに悶え苦しんで両手で顔を掩つて泣いてゐた。この様子をだしぬけに見たクラークは、すぐと自分が起した疑の確なことを覺つた。然し、この少年のみじめな姿を見、何か恐しい深みへはまつてしまつたと信じては、流石にかすかながら氣の毒の念が萌したのであらう。彼は無言のままドアを閉めた。だが、この四五日の間は十分に注意して眼と耳とを利用しよう。そして自分の推察を出来るだけ自分に利益なやうに使はうと廊下を歩きながら彼は思つたのである。

かくて、グレナリンの犯した罪は何の役にも立たなくなつた。否、役に立たぬ以上に悪い結果を齎したのである。彼の魂を強く束縛する鐵の帶に、更に一本のしかも最も丈夫な鋏を打つてしまつたのである。古い借金は消されずに、この新しい恐しい責任を負つてしまつたのである。彼は滅亡へ誘惑されてしまひ、そして誰でも罪を犯したものはあるやうに、自分の身を全く無償で賣つてしまつたのだと氣が付いた時は、己に後れてどうすることも出来なかつたのである。

## 十七

ほんの僅かの注意で、ドネリル卿とその子との間に今度の事についた何の相談もなかつたのだといふ事がクラークには判然と分つた。グレナリンは平常に似ず靜かになり、口數をきかなくなり、柔しくなつたが、ドネリル卿の方ではちつとも優しくならなかつた。その上クラークは時々ドアで立ち聞きして、息子の行爲については、ドネリル卿は少しも知らない、無論金などを呉れはしないといふことを極めて満足した。悪漢の心中の喜びは何よりも優つてゐた。彼は小切手を手に入れた、まだ棒引にならぬ證文を握つてゐる、この二つの財源を己の利益になるやうに充て、やらう、その上に今は恐しい發見の鍵を握つたのであつて、それを使へば前の二つよりもつと甘い汁にありつけるばかりでなく、それを金城鐵壁として、自分の過去のいろんな悪事が露見しさうな場合には、そのかけに蔽ひ隠すことが出来ると、彼は思つた。

然し、彼は十分確かな據りどころとなる根柢を把むまでは決して仕事を始めなかつた。更に一層確に事の真相を聞く時が来るのを待つてゐた。その時は遂々來た。

ドネリル卿は遂にグレナリンの青い憂ひに變れた顔や、打沈んだ様子に、心を動かされて來た様



であつた。誰か、若し何かの會へ行く前に一寸朝食を食べに立寄るとか、獵の歸りにデイナーに誘はれて來ることがあつても、グレナリンは少しも物を言はないで、ほんやり離れて憂ひに沈んでゐるといふ風であつた。

殊に或る夕方にそれが際立つて認められた。その時は彼が特に懐いてゐるヘンリー・アラビイ氏さへも、彼がそんなに鬱いで遠慮してゐるのを引立てる事が出来なかつたのをドネリル卿にも氣が付かれた。さうして一人ふさぎ込んで竊み見をしたり横眼をしたり眼を外したりする様子には何處となく昔のグレナリンとは全くちがつたところがあつた。ヘンリー氏は歸るときにドネリル卿に握手しながら囁いた。

「ドネリルさん、あなた餘りハワードさんに厳し過ぎはしませんですか？ 獵や乗馬位は平常の様にさせて上げなさいな。あなたの御機嫌の悪いのを大變氣にしておいでの様ですが、今まで自由にさせて置いて餘り急にきびしくなされると、それこそ却つて絶望させることになりはせんでせうか？」

「實に子供といふものは厄介なものですなあ！ 私はこの上もなく親切な父でしたのに子供はあゝして不名譽なことをする、放校される、そしてたしかに墮落しかけてゐたんですからなあ。ダグラスさんは父としてはもともと最も嚴格な方だが、いつもラルフさんが忘れておとなしくないと云つて

嘆してをられるし。ヘンリーさん、あなたの様な幸福な親になれたらいいですがねえ。」

「さう落膽するものぢやありません。グレナリンさんは少し我儘すぎるけれども、併し心の奥底は美しい性質ですよ。ラルフさんにした所で、あんなに良い性質の子供は何處にもゐないと思ひますよ。マーテンなどはもう兄弟の様に居ります。」

「一體どうしたらよろしいでせうねえ？」

「先づ許してお上げなさい。そして従前の様に愛しておやんなさい。只今後は餘り愛に溺れない様にちと従前よりも強くおやんなさるのですね。古くからのお友だちとして失禮をかまはず遠慮なく申上げます。」

ドネリル卿は感謝して彼の忠告に従つた。客を送つて應接間へもどると、グレナリンが興なささうに憂鬱な顔をして寫眞帖を繰つてゐるのを見たが、そのすつかり裏り果てた様子に今更胸を打たれた。

彼は子供の頭へ優しく手を置いた。グレナリンは父の察した通り、若くして亡くなつたために殆ど記憶に残つてゐない母親の美しい寫眞をちつと見つめて、深く心を動かしてゐたのであつた。父に觸られると吃驚して頭を掻き、如何にも驚いた様にその顔を上げたが、眼には涙が一ぱい溜つて



ゐた。

『私の傍へおいで、そしてこゝへおかけ、ハワード、少し話したいことがあるから……』  
良心の苛責に悩む子供の胸を最初恐しい矢が突通したやうに苦しめた。はつと思つた。犯した罪を發見されたのではないかと氣遣つたのだ。だが、父の言葉も態度もそんな想像を裏書きするには餘りに優しくかつた。父の傍の凭臺へ伴れてゆかれながらその温い手で撫でられた時にすつかり安心してゐた。何故なら、假令へどれだけでも父子の間にかうした愛情の現れることは實に久しぶりだつたし、又グレナリンは父が若し事情を知つてゐるならこんな態度が出来るものでないのをよく知つてゐたからである。然もなほ彼は慄へた、それは安心したばかりでなく感激したからである。彼には父のかうした愛情を悲しいことに、受ける資格はないのだと思はれた。又放校されて歸つてからの大衝突の後といふもの、幾度か不遜の心や復讐心を胸に燃したことを思つて悲しく感じた。更に、また我が名をも一族の名をも汚し、親戚のすべてから見放されても當然な行爲をして、父にも一生不名譽と悲哀とを齎してしまつたのだと今更思はれるのであつた。かうした思ひが洪水のやうに一度に襲つて來たのでグレナリンは兩手の間に父の手を握つて首を垂れると、抑へ切れぬ様に泣き伏した。

ドネリル卿は感情のこの突發を見て少からず驚いた。

『ハワード、いゝ子だからそんなにして私までお泣かせでない。お前がそんなに放校を辛く思つてゐると知つたらあんなに怒つたりするんぢやなかつたんだ。たゞお前が家へ歸つた時、すつかり心配してゐない様だつたからお前の將來を心配したればこそあんなに怒つたんだよ。ね、ハワード、もう許して上げるよ、すつかり許しますよ。だから今後のお前の教育についても少し考の立つまではお前は平常の休暇の間の様にしておいで、ね。』

しかしグレナリンは頭も上げず、歎り泣きも止めなかつた。父が温い言葉でいろいろと言ひ續けたけれども矢張り突伏したまゝ、泣いてゐる。漸く切れぎれに言つた。

『お父さま！ 僕は……僕はもうお父さまに……仰つて戴く價値がなくなつたんです。ああ、僕はなぜあんな悪いことをしたんでせう。後悔してももう追付きません。』かういひつつ絶望したやうに我とわが手を握りしめて、『僕はもう駄目です……僕はもう駄目です。』

いひ終るとわつと泣いた。『そんなことが——そんな事があるものかね。それはお前は首途を誤つたが、まだ若いのだから、失敗の經驗で立派になれるんだ。』

『あーあ！お父さまは悉皆御存じないからです。』と苦しげな調子でいふ。『ああもしお母さまさへ生



きていらしたら、お母さまになら打明けることが出来るんだに！」

ドネリル卿は一寸間を置いたが、

「それは私は全部知つてはゐない。けれどもねハワード、心配しないがい、もう過ぎ去つたことでお前を苦しめようとは思はないから。お金はね、お前がそんなに後悔してゐるんだから私がみんな拂つて上げるよ。たゞさうして上げたからお父さまに打明けて呉れなけりやいけないよ、今だつて將來だつて、ね、ハワード、何にしてもお父さまは第一の味方なんだつてことがわかるだらう。さあみんな打明けてお話し。」

すべてを打明ける！ 嗚呼如何してそれが出来よう。もはや彼の心には人に示すことの出来ない恐しい呪ひの一點が生じてしまつたのだ。さうして今や彼はますます明かに自分の犯し無分別な振舞や狂氣の沙汰が見え出したのである。併しかう氣づいたものの、もつ取返しつかないことだと思つた。

罪が罪の報としてくる時に——悪を眼醒ます神の最も厳しく恐しい手段になつて、多年静かに秘められてゐた罪の報として、突然罪に陥る場合に——人がそれと氣付いて廢殘と不名譽の光景に接した時は、必ず「すでに遅し」なのである。

然しながら、どんな事でも打明けることは慰めである。救つてある。遂にグレナリンは深い悔恨の色を見せて、時々歌り泣いては話を切らしながら、今までに爲て来た悪い事を少しも偽らず言ひつゝくろはずに父に白状した。クライクでもこれ以上にはいひ得なかつたらう。今まで犯した罪に對して想像の餘地が少しも残らぬほどに詳しく述べた。言譯も口實も少しもなく物語つた。けれども、實に最後の罪だけは打明ける事が出来なかつた、打明けなかつた。しかもその罪こそ彼の身に落ちかかつてゐる嚴しい罰の中の主な部分であつたのだ。

ドネリル卿は吾が子の話の進む間、眞面目に極めて眞面目にちつと耳を傾けた。

「ハワード、勿論私はかういふ話を聞くのは實に辛い。全く悲しいことだ。だがこれからさきはもつとおとなしく賢くなつて呉れるだらうね。悲しいことにお前は弱かつたんだ。お前の爲た事は本當に悪かつた。けれども私は許して上げる。ねえ、すつかり許して上げる。私が口に出して許すといつたら心から許すのだ。もうすつかり忘れてしまはう。これからお前は新しい生涯に入るんだよ。」  
グレナリンは嬉しげに父の手を握つて應接間を出た。學校を去つて来て以來始めて、彼の心には喜びの光がさした。併し彼は階段を上つて行く時、一人の男がこそそこそと廊下を通る人影の中へ紛れ込んで行つたのをちらと見付けた。それはこの家の惡魔、召使頭のクライクであつた。グレナリ



ンはそれを見ると落膽した。彼は力なく自分の部屋へ歸つた。夜一夜、彼は夢で自分が底へ底へと沈んで行くやうに思つた。

併も夢で見たものよりも現實の方が恐ろしかった。翌朝クラークがまた彼の室へ現れたのである。彼は小切手を取り出し、確信あるものの様に言ふのであつた。

「若様、この小切手は眞物ぢありませんね。」

「何だつて？」

「伯爵様があなたにお渡しなすつたのぢあないと申すのです。」

「おや、そんなら誰れが呉れるかい？」

とグレナリンはびつくりしながらいつた。クラークは返事をしないで卓子のペンを取上げて若主人の面から少しも眼を離さずに無言のまゝあてつけた所作をしたが、それを見てグレナリンの顔は急に青くなつた。

グレナリンは出来るだけ心の動搖をかくさうとして後を向いた。そして吃りながらやつと言つた。

「いや眞物だよ。アルトンの銀行へ持つてつて見せて御覽。」

「はあ、さうですな。ですが先づ御前様にお眼にかけてからに致しますよ。ぢや参りますかな。」

「お待ち——お待ち！」

男が殆どドアまで歩いて行つた時、グレナリンは力なげに言つた。

クラークは落付き拂つて立戻つた。グレナリンはぐらぐらと目まひがして椅子へドカッと崩れるやうに腰を下して顔を蔽つた。

「ねえ、若様。」

クラークは半ば誘ふやうに、半は威す様な態度で云つたが、それがグレナリンには堪らなく嫌であつた。

「私は何もあなたを苦しめる様な事を致さうとは思ひませんよ。こんどアルトンへいらつしやる時私をお伴れ下さい——御都合で明日でも——。それに此のことについては誰も知るものはありませんから大丈夫ですよ。今のところでは無論證文はお返ししませんよ。證文の方は待ちます。ずつと後まで催促は致しませんから。だがあなたが今度の新しい一件を口止めなさる積なら口止め料として、すね、この三週間のうちにもう百封を戴かなくちや。すれば私は濠洲へ行つちまいますからあなたも御心配がなくなるでせう。この小切手の出た所へ行けばもつと澤山貰へるんですがね。當り前な申出だと思ひますよ、いや親切な申出ですよ。こんどの一件はあなたに取つちや百封や——」



さうです、ね五百封だつて廉いものですよ。』

餘りの恐しさにグレナリンは椅子に慄へてゐるのみで何ともいへなかつた。もう急所を握つてゐるといふことを知り抜いてゐる悪人は又曰ふ。

『ようございます。そんなら私は直ぐに御前様の處へ持つて参りますから。そしたら必ともつともつと澤山戴けるんですから。只ねえ、私や出来るだけ穩便に済ませたいと思つてるんだが、あなたが道理を聞き分けて下さらないんなら、私は行きませうよ。』

グレナリンは再び待てといふ身振をした。

『ぢあ、お金さへ與つたら二度と小切手について僕をいじめないと聖書に堅く誓ふか？』

本箱にバイブルがあつた。クラークはそれを取つて誓つた。やがてグレナリンはいろんな反省をさせられるべく取残された。彼の思ひは極めて悼ましい恐しいものばかりであつた。何といふ暗い恐しい生涯を招いてしまつたのだらう。彼の罪が天の四方から集めた雷雲のまゝ厚いことよ！彼の若き日を照す光明は悉く蔽はれてしまつた。

誰にこの不名譽な重荷を分け擔つて軽くして貰へようぞ。助を、同情を、忠告を誰から求められようぞ。マーテンにか？ 否、それはできなかつた。マーテンの一本氣を、さつぱりした強い性質と

して、必と只一つの解決の手段として、如何な結果を生まうともかまはぬから直ぐに悔い改めて白狀してしまへといふに相違ないと思つてゐたからである。然らばラルフにか？ 彼はラルフをマーテンほどには知らなかつたが、確りした眞直な性質の人を見るとき弱いものは何となく一種の頼もしさを感じるものであるが、その頼らしさを、ラルフに對して感じたので、彼は先づラルフに會つて事情を打明け、出来るだけ彼に頼らうと決心した。ラルフは實際寛大で男らしくて、而も謙遜た所があるので、多分はグレナリンにでも打明けて何事も残らず話す事が出来たであらう。まことに人に事情を打明けけるのは心の休まるものである。よしんばそれが今まで自分をよく思つてゐた人から輕蔑される様にならうとも、併し、ラルフから輕んじられるやいな恐れはなかつた。最も善良な心は又同時に最も優しい情に富んだ心である。また悪い人の方が通例却つて悪事を咎めたり過失を責めたりするものであつて、正しい路を蹉跌することなく歩いてきた人の方がその點は鷹揚なものである。グレナリンが、自分のたよれる人として、自分の相談相手としてラルフを選んだのは、彼の知つてゐる友人のうちで最も善良な、最も正直なものはマーテンの次にはラルフだからである。かくて彼はラルフに會ふ機會頻に探した。會つてこの苦から逃れる工夫を立て様としてゐる間に一方ラルフは父の命令に従つてグレナリンと會はない様に會はない様にと努めてゐたのである。



併しながら、休暇に家へ歸つてゐるラルフに取つて、己が家から一哩も隔たぬ處に住んで居る自分とほゞ同じ年位の仲間達に長く會はずに居ることが出来る筈はなかつた。かくて彼はほんの二三日たつてマーテン・アラビイの家でグレナリンに出會つた。その晩、ラルフはクリステイと一しよにマーテンを訪ねて、マーテンがすつと以前から計劃してゐた家庭劇についていろんな打合せをしたので、兄弟がその家庭劇に加はることはダグラス氏が不承不承に許したのである。

明くる日、朝飯の時にラルフとクリステイは昨夜の面白かつたことを母に物語つた。そして如何にもうれしうに家庭劇の練習のをかしかつた事などを話し合つた。ダグラス氏は新聞を讀んでゐて彼らの話には殆ど注意してゐなかつたが、クリステイがグレナリンの名を當日出演する筈の役者の一人としてあけて、グレナリンさんは喜劇の役を如何にもうまくこなすから芝居はきつと面白く運ぶだらうといつたとき、不意に新聞から頭を擡げて早速に尋ねた。

「グレナリンも昨夜のたのか？」

「グレナリンさんですか？ え、ゐました。」

とクリステイは答へた。父はラルフに向つて澁面を作りながら、

「それで、お前グレナリンと口をきいたか？」

「え、出来るだけ口を聞かない様にしてゐました。」

「ラルフ、そんな遠廻しな狡い答をして貰ひたくないねえ。私はたゞ話をしたかと聞くんだよ。」

「話しました。でも……」

「でもは要らん。あの子が先に話を仕かけたのか？」

「さうです。」

「それで、お前はその返事の他に何か言つたらう？」

「い……い……え……え、さうです、私は唯……」

「いゝえ——さうです、たゞ。」と父は腹立たしげに繰り返して、「なんて拙い誤魔かしを言ふか。」

「いゝえ、誤魔かしぢやありません。」

とラルフはその瞬間むつとした。

「私の言ひ方が拙かつたんですが。私はたゞ失敬な奴だと思はれない程度で話したといふんです。」

「よろしい。そんならラルフ、よくお聴き、——聞えるか？」



「聞いてゐます。」

「さうか、そんならいふが、今後はグレナリヤとはどんな事情があらうと一切話をしてはならんぞ。よく分つたか？」

「あなた、何もそれほどにしないでよいではありませんか。」

と夫人が口を入れた。

「ラルフの従順を試す爲にかうしてやるんです。」

と父は再び新聞を取り上げながら言つた。

「ぢや私達お芝居なんて二人とも止めにしなければならぬですね。」

ラルフはむつとしていつた。

「やればたまには話さないわけに行きませんでせう。」

「大した損だね！ 命令された事を果す爲に、一晚の見懸倒しの下らない素人芝居を止めるとはね。」

「して悪いと仰るなら、決して交際をしないと思ひません。ですけれど、話もしないといふのは中難しい事です。まあ、私たちがグレナリン君と道で會つたとしたら――」

「したらなんて想像は私はしないんだ。もう話は充分だから、あとはいはれた事を守つてもらへば

いゝんだ。つけ加へていふが、どうしても守つてもらふよ。若し背くならば――よい、そりやかま

はん。もうこの話はやめにしよう。」

やがて彼は自分の讀書室へ行つてしまつた。自分も残された三人と同じ様に不快な心持で、而も

彼はその不快の原因は家族の人たち、特にラルフにあるのだと信じた。

父の去つたあとで、ラルフと暫く物を言はなかつた。彼は不快に感ずることがあるといつても容易

に口をきかぬのであつた。

ダグラス夫人が第一にこの沈黙を破つた。

「ラルフさん、落膽したでせうね。みんなして他に楽しみを見つけないけませんね。私ね、あなた方の爲に思ひがけないものを藏つてあるんですよ。今までよく秘密にして置けたと思つて少し得意な位よ。」

「ありがたうお母さま、何です？」

とラルフが聞いた。

「小馬を二頭買ったの、あなた方へクリスマス、プレゼントに。」

「まあうれしい！ お母さま、ほんとにありがたう！」



ラルフはかういつて母に接吻した。  
「僕はもうずつとずつと前から何よりも小馬が欲しかつたんですよ。でもお父さまが飼はして下さいませんか？」

「え、飼つて下さるとも。お医者さんがね、クリステイさんに馬をすゝめたんですよ、そしてクリステイさんは一人で乗つてもちつとも面白くないに決つて居るでせう。」

「おい、クリステイ、面白いだらうね！」ラルフは希望に輝く微笑をしながら、「この邊りを何哩も乗つてあるかうよ。——それからお母さま、お父さまが犬を連れて行つていゝつて仰るでせうか？」

「え、仰るでせう。何も不都合なわけはありませんよ。」  
「僕は柵を躍び越えるなんて事は出来ないでせうね兄さん。でも、兄さんが教へて下さるでせうね。」  
「僕は先づ自分で覺えなくちやならないだらう。なあに、一寸ふん張れば出来るんだらうよ。マーテン君に五分も習つたらやれるだらう。お母さま、ありがたう——有難う。馬に乗つてあるく位面白い事はないと思ひますよ。」

「さあ、それちや二人とも私といらつしやい。厩へ行つて見ませう。小馬がちやんとゐますから。さのふ着いたんですよ、あなた方がアラビイさんへお出でになるとすぐ。それでね、今朝まであな

た方に知らせない方があなた方が喜ぶだらうと思つたんですよ。  
曠地を捷く驅る新しい小馬を得た喜びに、二人はとにかくその當座グレナリンの事も家庭劇の事も全く忘れてしまつた。



しかし、その後二三日すぎた——さう、クリスマスの三日前であつた——美しい寒い朝、グレナリンはマーテンを訪ねて行つたが、留守だつたのでぶらぶら歸つて来る途中からラルフの家へ行つたのである。下男がお二人はスケートにいらつしやいましたと語つた。スケート場にしてゐる池は往來から大して離れてゐなかつたので、彼等が矢の様に滑る時の冴えた心地よい音のするのを便りに、直ちに二人を見つける事が出来た。

彼は二人を見ると喜んだ。何だか不安な或る疑が彼の胸に起りかけてゐたので、二人は若しや自分と遊ぶのを避けてゐるのではないかと思つてゐたものだから、二人を見ると餘計にうれしかつたのだ。實際、罪を犯した者は先づ第一に疑ひ深くなるものだから。それに引きかへて、彼の姿を見とめた二人は忽ち気が沈んでしまつた。

彼の挨拶を受けた二人の態度がかなり丁寧だつたに拘はらず、何處かにひどく當惑したらしい所があつたのを、グレナリンの様な眼の鋭い少年には、見逃す事が出来なかつた。氣位の高い彼、ドネリル家の後嗣として、近くの少年たちは誰でも彼に交際してもらふのを、名

譽に思はぬものはなかつたが、その少年たちの誰にだつてラルフに對する十分の一でさへも好意を示さうとした事は一度だつてない彼——は、この冷淡な様子に腹立たしくなつた。で、むつとした調子で言ひ放つた。

『どうも、僕がゐない方がいゝ様だね、ラルフ君。さうでないのなら此處よりも大きいきれいな僕の家池へスケートに来てもらはうと思つてゐるんだが。』

『怒らないでくれ給へ。君、僕の爲ぢやないつてことを知つてゐるだらう。僕は君とこの池で一しよにスケートが出来たらこんな嬉しい事は無いんだけれどね。』

『君の爲ぢやないつて何の事?』

『何つて、その、僕が冷淡に見えるのがさ。』

『冷淡に? あゝ左様かわかつた。』

彼は横柄に

『僕はね、誰にだつて腹にもないお世辭をもらひたくはちつともないんだ。それぢあ僕の方でも君の友達といふあつばれな名譽を、無論御辭退しようと思ふよ。ラルフ・ダグラスさん。だが、僕はどんな理由で絶交されるんだか知らないんだから、その理由を君言つてくれるだらうね。』



ラルフはグレナリンの調子に心を傷めて、

「失敬な態度を見せて済まないけれどもね、グレナリン君。マーテン君に僕は事情を話してくれる様に頼んでおいたんだが、話さなかつた？」

「いや、何にも。」

「さう、ぢや思ひ切つていふがね、お父さまが君に話をしかけちやいけないつていふんだ。それでね、もし話をすればひどい罰をするつておどすんだもの。」

「一體君のお父さんはなぜ僕を除け者にするといふんだらう？」

「それはね——」

ラルフはいひかけて口を噤んだ。そして深く尋ねて苦しませないでもらひたいと思つた。しかしさうは行かなかつた。

「あゝ——それは？」

「怒らないでくれ給へね、君。これをいふのはほんとに氣の毒で辛いんだが思ひ切つていふから怒らないでね君。それはね、それはあの君が放校されたからなんだ。」

「さうか？」

怒るべきか否か、若い子爵はちよつと躊躇つた。しかし彼はラルフが好きだし、その上この二三日の間といふもの、罪の重荷の爲にほんとに打沈んでるので、怒りはちつと抑へられた。彼は言つた。

「さうか、ラルフ君、何も僕の事を氣にかけないでもいゝよ、僕はたしかにイートンでは少し馬鹿な事をしたさ。けれども何も君のお父さんに癩病患者かのやうに嫌はれる様なことは爲てやしないからね。僕は残念だよ。然し、君のいふ通りこれは君の咎ぢやないとは思ふ。左様なら——左様ならクリステイ君、もう二度と御迷惑は掛けないよ。」

「待ち給へ君。君が此處でスケートをする氣なら追ひ返す譯はないんだからやつて呉れ給へ。僕たちの方で歸るから。」

「いや君、歸らないでもいゝよ。僕は君たちがいゝといふなら此處で滑りたいんだが——君のお父さんが君たちを見つけさへしなければ、併し見つけたつて、僕の爲で君たちの爲ぢやないんだ。殊に君、若しこれつきり會へないとすれば僕はほんとに君にお話ししたいことがあるんだよ。殊別に話したいことがあるんだが今すぐいふことは出来ない。まあ少しスケートをやつてからにしようよ。君は家庭劇の役割の方は如何したの。」